

昭和二年十月廿五日 第三編郵便物認可
昭和四年九月三十日印刷 昭和四年十月一日發行
「近世」 第四年十月號 第三十七報

通類編

大福帳
八道

状

お千代

求兵衛



第四年

十月号

大改訂代割上皇
純日本御料理

社交上に、家族連に
御宴會に、最適。

天王寺公園

電人旅館

電戎 三三三 三三四 三三五
三三六 三三七

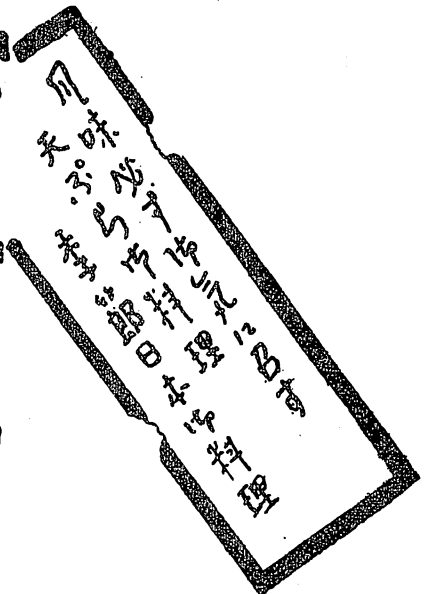


御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



吉屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

道頓堀

昭和四年十月號

第四年
第三十七輯

◇表紙(心中宵庚申).....

大塚克三畫

口

繪

■中座の大歌舞伎△鷹治郎の盛綱△「佐々木大鑑」の舞臺面、成太郎の妹時雨、福助の母渚扇雀の姉待宵、鷹治郎の盛綱△「錢五三人兄弟」福助の喜太郎、魁車の佐八郎、延若の要藏大詰富の越の舞臺面△「心中宵庚申」鷹治郎の半兵衛、福助のお千代、魁車のおかる△心中宵庚申上田村の舞臺面△「桃山譚」福助の家康、延若の清正、橋三郎の三成△「しま」魁車の茶屋女房「卯の花」右團次の萬歳、長三郎の才藏△延若の加藤清正、福助の喜太郎△浪花座の第一劇場△壽三郎の馬方清六、長二郎の白石武平△「足輕三左衛門の死」壽三郎の三左衛門、三好の母おしん、山口の遠山「馬の春」壽三郎の清六、石河の女因おたき△「心中みづ鏡」長二郎の白石武平、高田の中川主人、石河の藝妓おあん△「日清談判」の舞臺面△角座の家庭劇△「萩の下露」天外の長男一郎、十吾の次男讓治△「愛の訪れ」小織の住職寛澄、東の娘おしき、致雄の平塚清兵衛「夜寒」十次郎の助次郎、米津の女房おかつ■松島天滿八千代座の大歌舞伎△「伽羅先代萩」我童の政岡、大吉の外記左衛門、我童の細川勝元、霞仙の沖の井、福太郎の松島△「勢獅子」右團次の嘉頭鶴藏長三郎の同蝶吉、「姫山姥」扇雀の八重桐、徳三郎の坂田藏人△「後の梅川」右團次の丹波屋八右衛門、我童の榎屋梅川「戀娘昔八丈」霞仙の藤七、我童の庄兵衛、扇雀の娘おこま

◇扉(日清談判).....

森宣次郎畫

◆平凡人の盛綱.....

高安吸江(六)

◆「佐々木大鑑」雑話.....

木谷蓬吟(一〇)

◆掘出物の藤戸.....

高原慶三(一二)

◇増補桃山譚.....(芝居ばなし)

(二)

◇心中宵庚申.....(芝居見たま)

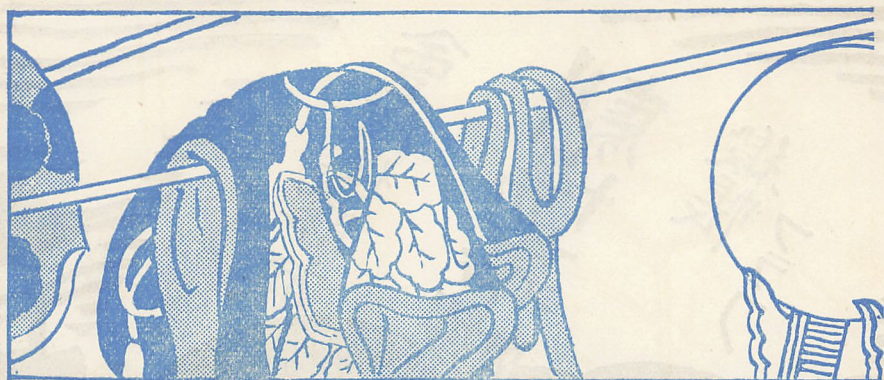
加世三辟(一四)

▽かはった「八百屋」.....

尾崎久彌(一八)

▽宵庚申の人々.....

高谷伸(二〇)



▽お千代半兵衛の墓を訪ねて……………南木萍水(二二)

◆鴈治郎の眼を語る……………富田泰彦(二八)

◆鴈治郎と第一劇場……………京極利行(四三)

◆東西舞踊の感想……………永田龍雄(五〇)

△足輕三左衛門の死……………(三一)

△心中みづ鏡……………(三四)

△馬の背……………(三六)

△日清談判……………(三八)

◆「日清談判」演出覺書……………野淵昶(三八)

◆第一劇場私語……………森ほのほ(四六)

◆第一劇場・長二郎……………門脇陽一郎(四八)

□實説心中宵庚申に就て……………(二六)

□劇場その日……………(五一)

―中座上演脚本―

佐々木大鑑……………(五四)

錢五三人兄弟……………大森痴雪(六〇)

□挿繪カッ……………田中滿彦

□編輯後記……………松本泰三(七四)

留旗 原旗

劇 十 幕 旗

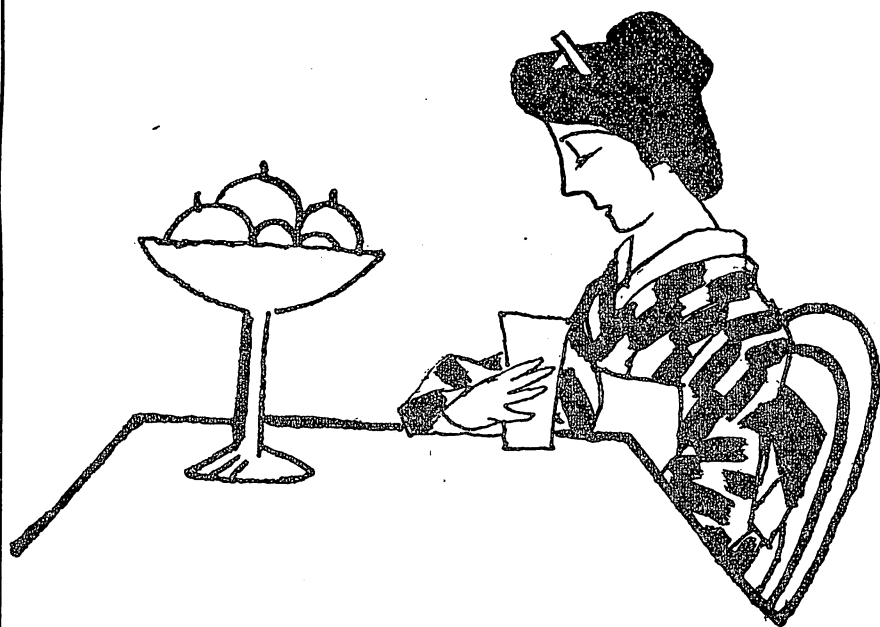
綴帳

梅原商店

神戸市

楠社西門

電話 元町一六五番

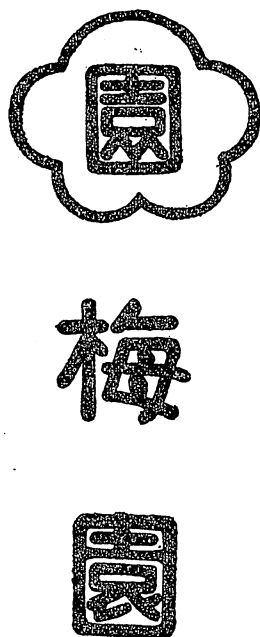


お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそゝる秋のお献立が

お待ち申してゐます



お芝居でのお食堂にて……………

お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

(カタログ進呈)



大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

本店

電話 南 (三二九) 六三三番
東京 本町二丁目



中座十月興行大歌舞伎

佐々木大鑑『佐々木盛綱……鷹治郎』



中座十月興行

近松左門衛門作……『佐々木大鑑』

(上) 藤戸の岩の舞臺面

成太郎の娘時雨・福助の落母・雀の姉侍宵・鴈治郎の佐々木盛綱……(下)りよ



中座十月興行大歌舞伎

大森獅雪作『錢五三人兄弟』

下

當主

喜太郎

福

三男

要

藏

延

上

大詰

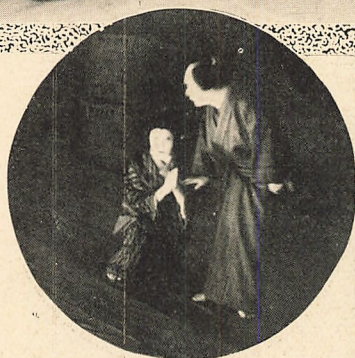
富の越

舞臺面

曳かれゆく

錢五一家

若車助



中座十月興行大歌舞伎

近松門左衛門作
食満南北脚色

二番目『心中宵庚申』

上 八百屋半兵衛 脇治郎
女房 お千代 福助
下 お千代の姉 魁車
おかる
中 宵庚申の夜半に手を取て生玉
勸進所さして行く
お千代 福助
半兵衛 脇治郎

妊娠のお方に警告

安産を望まれる方難産流産の癖

初産を恐れる方は

産婦人科専門諸大醫有効御證明

木津けなし丸を

是非お服みなさい

昔から有名な産婦専門の家傳藥です

効能
悪疽が治る 浮腫が引く
流産もせぬ 體内を温める
胎毒も取れて お産が軽い

できた子達は丈夫で美しいと旦那様も大喜びです

各地藥店にあり

價 藥

圓拾 圓五 圓參 圓貳 圓壹 錢拾五

ンリタンサニ舗本ニクブント痛腹

目丁一橋麗高阪大

堂在自野西

番七五一阪大替振・番一九三東話電



淡口醬油の親玉

景品付大賣出し

賣出方法

九升樽詰一樽毎に

萬歳味淋(六五〇、〇〇人)一本宛漏ナク進呈

外ニ特別景品(三萬樽ニ對シ)抽籤券一枚進呈
二立入ビン詰壹本毎ニ九天印入布巾二枚宛

- | | | |
|----|-------------|-----|
| 一等 | 大丸商品券五十圓 | 六本 |
| 二等 | 純毛ラクダ二枚續毛布 | 三十本 |
| 三等 | 唐木特製巻煙草入 | 三百本 |
| 四等 | 特製黒タン底ナシ十露盤 | 六百本 |



播州龍野

製造元 日本丸天醬油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

電話本(二五六一
番 四八三二)

燃ゆる日輪車

全篇

帝キネ秋季大特作時代劇
松本田三郎、松枝鶴子熱演

燃ゆる日輪

全篇

山下秀一監督作品

上島量原作脚色
鍋本榮一郎撮影



十月一日々十二月廿四日迄

午前九時開館午後七時閉館

○開館中急行停車

○八區以上の乗車券
持參の方に限り 途中下車取扱

ひらかた

大菊人形

一本日

餘興毎日見流廿餘場面

太閤記十二段返し

似顔・東西名優・キネマ俳優

東西名士似顔等似顔人形二百數十番

橋満天阪大・ばりの

車電阪京

番〇二六東話電



◇……中座十月興行大歌舞伎……◇

近松門左衛門晩年の傑作

心中物の白眉

二番目『心中宵庚申』

(上) 上田村の場の舞臺面

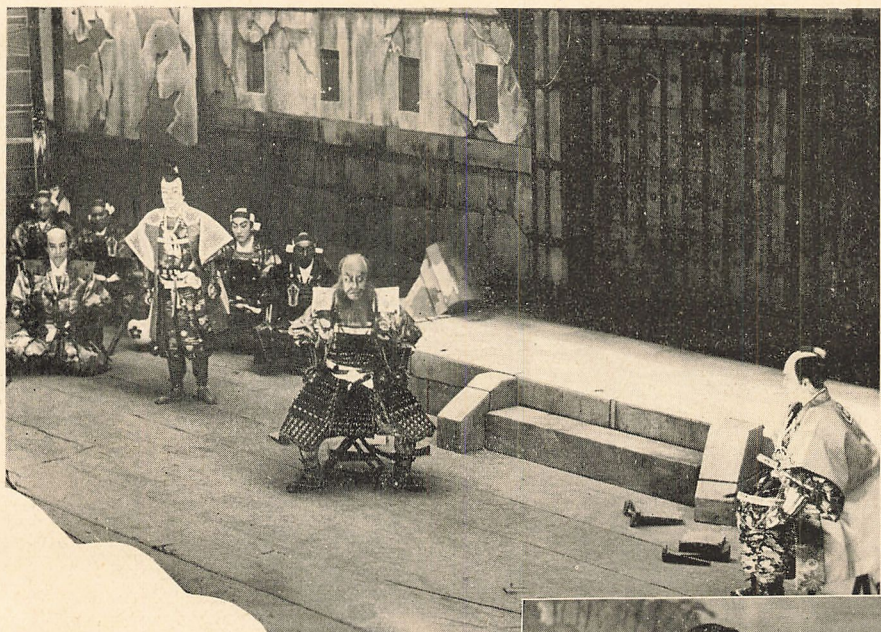
右より

姉おかる……魁
平右衛門……市
半兵衛……廊
お千代……福
治
助郎藏車

いつまでも若い

鷹治郎の半兵衛





◇ 伎舞歌大行興月十座中 ◇

場の門御中城山桃『譚山桃』内の番八十伎舞歌新(上)

成三の郎三橘 正清の若延 康家の助福 りよ右

姿な粹の房女屋茶の車魁『ましと』利喜大(右下)

蔵才の郎三長歳萬の治園右『花の卵』利喜大(圓下)





◇ 中座十月興行大歌舞伎 ◇

上 新歌舞伎 十八番の内 『桃山譚』

加藤 清正……延 若

下 大森 痴雪 作 『錢五三人兄弟』

長男 喜太郎……福 助



◇ 浪花座の第一劇場第三回公演 ◇

(上) 長谷川 伸作 『馬 の 脊』

馬 方 清 六……………壽 三 郎

(下) 門脇陽一郎作 『心中みづ鏡』

白 石 武 平……………長 二 郎

好評

御化粧用

好評

目立って賣れ出すた

スキナ

あぶら取り紙

散歩にいやなあぶら汚
お忘れあるな

各地の化粧品店石鹸
店に於て販賣いたし
て居ります。
尚道頓堀の各座の賣
店にても常備いたし
て居ります。

お買求めの
際はスキナ
と御指定を
乞ふ。

大阪 スキナ屋
謹製



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋溫習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

本店

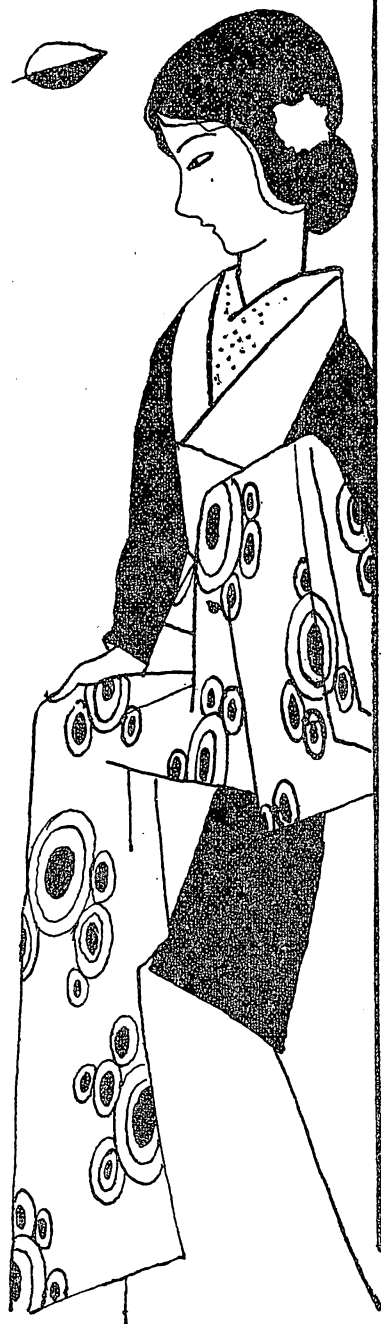
大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます





華々しく秋の映畫界に臨む

松竹キネマの文藝映畫陣!!

冬島泰三	菊池寛	原監督	時勢は移る	林長二郎	主演
オスカール	星哲六	ワイルド監督	妖魔奇譚	阪東壽之助	主演
小石田榮一	額六福	原監督	白野辨十郎	月形龍之介	主演
竹内俊一	メ原監督	かめるめ	鈴木澄子	特別主演	
飛田憲一郎	安田邦郎	原監督	潮に乗る北斗	阪東妻三郎	主演
シユニツ	服部静夫	レル原監督	霧晴る	千早晶子	主演
時代劇	監督	白井茂太郎	足輕劍法	市川右太衛門	主演

鈴木傳明・牛原虚彦の

『進軍』

菊池寛の

『不壊の白珠』

鶴見祐輔の

『母』

菊池寛の

『明眸禍』

中河與一の

『彼と軍隊』

『赤い復讐』

池津勇太郎の

『スピードの女王』

大阪市東區農人橋三丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話 東
特長
特長
一一五八〇番
二五八〇番
五六五番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話 丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）



浪花座第一劇場第三回公演

(主) 吉田絃二郎作

『足輕三左衛門の死』

(下)

三左衛門 壽三
老母 おしん 三好榮子
同 三左衛門 壽三
遠山 真吾 山口俊雄

(中) 長谷川伸作

『馬の脊』

馬方 潘六 壽三
女囚 おたき 石河三
薫郎



浪花座第一劇場第三回公演

(上右) 門脇陽一郎作

『心中みづ鏡』

(上左)
(下)

白 石 武 平…………長 二 郎
七太夫の息中川主水…………高 田 亘
白 石 武 平…………長 二 郎
藝 妓 お 糸 ん…………石 河 葉





◇演'公回三第場劇一第座花浪◇

川大の村藤 子二不の好三 子三の河石 人軍るせ狂發の郎三壽 詰大の『判談清日』作文洋子金(上)
 薫 河石…子三 子榮好三…子二不 場二第『判談清日』作文洋子金(左下) 人軍狂發の郎三壽 同(右下)



◇ 劇庭家竹松行興月十座角 ◇

外 天……郎 一 男 長 『露 下 の 萩』
 吾 十……治 讓 男 次

大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社
大
林
組

支店 東京、橫濱、名古屋、小倉
營業所 京都、神戸、京城
工作所 大阪、東京

大阪市北區中之島常安町十七番地

和田電機商店

電話北

一八七八番
七六〇四番



劇庭家竹松行興月十座角

郎一桂	小	澄	寛	職	住	『れ訪の愛』(上)
子愛	東	ま	し	お	娘	
雄	致	衛	兵	清	屋	榎手
郎次	十	郎	次	助	引	線味三
子喜	左	澤	米	つか	お	房女郎三庄

『寒 夜』(下)



面臺舞の殿御奥家達伊
岡政の童我



面臺舞の場の傷刃
門衛左記外の吉大・元勝川細の童我



岡政の童我・汐八の次團右 『場の殿御』
島松の郎太福・井の沖の仙霞

の演出座代千八満天・島松の月十

幕 三『萩代先羅伽』 伎舞歌大屬專竹松

便所の臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



(錢拾五金小瓶一定價)
(圓壹金大瓶)



△使用法

一回十滴乃至十數滴づゝ(場所により多少の加減を要す)一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥(カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など)と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所に「アポロ」の臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

元 寶 發

會 商 榮 光

番五 一三三局本話電
番七 一三三汲大替振

區東市阪大
目丁三町見伏

秋は郊外へ！

さわやか！

奈良公園

……奥山周遊バス……

上六より
急行三十五分
七十銭

あやめ池

……直營温泉……

上六より
急行二十五分

生駒山上

……秋晴の大展望……

上六より
三十五分

多武峯長谷寺

上六より
一時間餘

松茸狩 (山開き十日)

山の定食一圓均一

富雄、生駒、郡山、天理、國分、
關屋、櫻井

◇各驛前に指定案内人あり

大軌電車

電話南五五〇三番



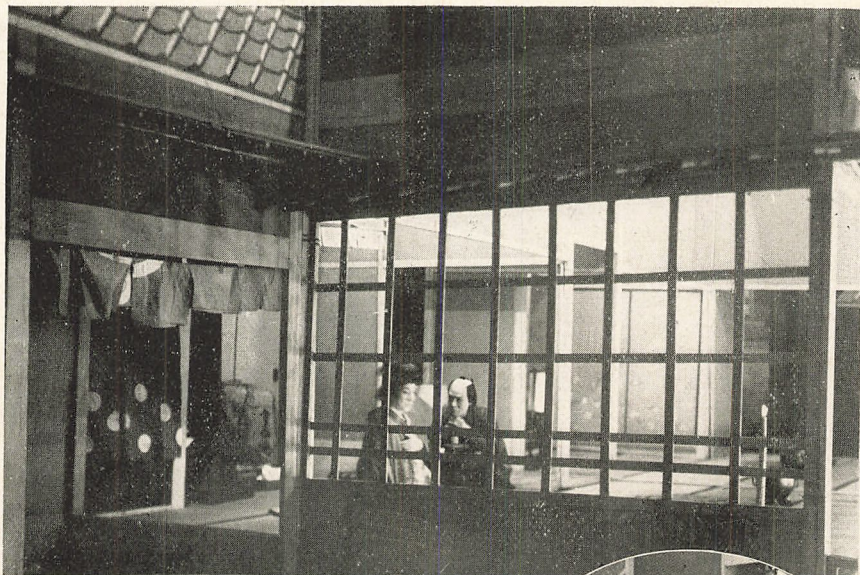
十月の^{松島}天誅八千代座へ出演の
松竹専屬大歌舞伎

(上) 所作『勢獅子』常磐津連中

意頭 鶴藏……右 團次
同 蝶吉……長三郎

(下) 『姫山姥』兼冬館の場

萩の家八重桐……扇
坂田 藏人……徳三郎 雀



十月の松島八千代座へ出演の

松竹専属大歌舞伎

(上) 大森痴雪作『後の梅川』

丹波屋 八右衛門……右 團次
梶屋 梅川……我 童

(下) 『戀娘昔八丈』 城木屋の場

壁結 藤七……霞 雀
城木屋 庄兵衛……我 童
娘 おこま……扇 仙

白井松竹社長序文
 中村鴈治郎氏題字
 岡本綺堂先生題字
 守田 勘彌氏題字
 喜多村 綠郎氏題字

鳥の子繪番附色刷美裝金字八
 口繪三十葉五頁
 定價金參圓 郵稅十六錢

最新刊

法居兎ひま、二十五年集 ぬよ顔へ替

本書は正に大阪劇場最近の大收穫である。本書の著者は若くして、多くの芝居を觀、多くの演劇を論じ、劇場の事情に通ずる人は少い。著者が劇文壇の大家岡本綺堂門に學びし麗筆と、鮮明なる口繪は、眼前舞臺の名演技を髣髴せしめ、加ふるに親切なる解説はよくその内容を説明する。好劇の人は本書を一度手にすれば、記憶は虹と浮び印象は油然と湧き、忽ち得意の人となれるであらう。まづ序文題字を見よ。劇場の大權威は舉て本書の眞價を語る。

鴈治郎の巻

- 10987654321
- 、、、、、、、、、
- 秋土近伊九一敵傾三夕
- 成屋江勢勢十條討城勝半
- の主源音頭戀大檻反七
- 家税氏先戀九藏樓あ
- 館の陣慶及折譯錦香
- 染

大阪歌舞伎の巻

- 181716
- 、、、
- 深洛雨
- 興北月
- 三玉物
- 兎の語
- 横秋
- 櫛

新國劇の巻

- 25
- 、
- 伊賀越道中
- 双六

新派の巻

- 242322
- 、
- 砂繪
- 狂時代
- 呪縛

本書内容

番五六一京東替 堀
 番九九〇七五阪穴替 堀

社元創

二町西根本二區芝市京東
 目丁一通中區西市阪大

元版

茶

西區みさわ町

坐半

電話五七二八三三番

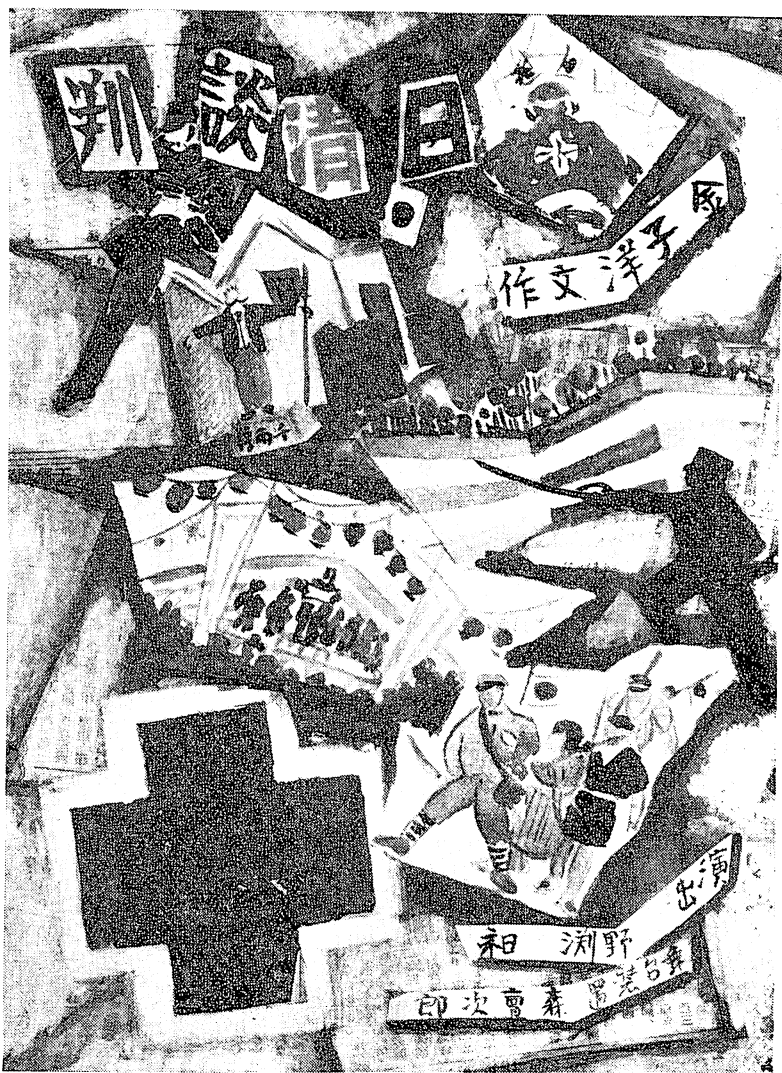
雜誌·電影·月刊

十月
號

通類編

第
四
年

第 三 十 七 輯



新歌舞伎十八番の

増補桃山譚

中座十月興行



第一 加藤清正邸の場

加藤清正衛、密藤立本、若侍二人を従へて、鐵の棒を持つて駈つける、四人の侍は

これでやゝ心丈夫に思へた。清兵衛は主君の安否を見届けやうとする時、奥の方で、

『イヤ氣遣ひ致すな、別條はないぞ』

清正の答ふる聲だ、一同が安堵の鼻先へ又も大きく揺れて、玄關の家根はひしぎになり、

破風の格子をバラ／＼とこわして加藤清正が御存じの麗簀、鏡下直垂、小手脚當、鏡と太刀を抱へて家根へ出る、家來の者は主の無事な姿を見て喜び合ふ。清正は邊りの神社佛閣に相當破損があると聞いて、桃山御殿の事を氣遣ひ家根へ上つて物見をする。

『晝にもまさる所々の火の手に、遙かに望む桃山の築垣も倒れ、營中は悉く破損の有様、愈々以て我君の御身の安危ふし／＼、今御不審を蒙つて謹愼の清正なれど、是より直ちに御殿へ立廻へ君の御安否伺はん』

清正は直ぐにも駈け行く様子である。木村又藏、井上大九郎の重臣が駈けつけて、御不審中の御登城は此上に石田、小西等の奸計で如何様の咎めがあるか計り知れぬと、清正の登城を止めるのである。

『御勘氣の身を顧みず推參なせしが落度となつて、まだ此上に罪を重ね一命を召さるゝなら、武門を守るの弓矢八幡もなき道理、神明誠を照らさずば、何條此儘ちつておつたり共、五年此方朝鮮にて千辛萬苦も水の泡に切腹仰せ付けられるとも、兎にも角にも清正が一命かけての今宵の登城、必ず止めるな』

清正の主を思ふ忠誠に今は止む理もない、猶揺れるにも動ぜず、清正は悠然として家臣を伴ひ向ふへ入る。

第二 桃山本城奥庭の場

一面の平舞臺に向ふば築山、櫓の倒れたるを見付にして眞中は大竹藪、五七の桐の幕を廻らし眞中に五疊、上手下手に三疊、幕際に一疊づゝと云ふ風に地に疊が敷かれてある。

激しい地震の鳴り物で幕が明いた。舞臺は破風造りの加藤清正の屋敷である。宿直の若い侍四人が、話半ばらしい處へ此の地震で、顔色を變へて異口同音に、

『萬歳樂々』

と唱へて、始めて地震の恐ろしさを語り合ひ主君の安否を氣づかうてゐる。と又一しきりの揺れて、最早顔色とてはない。

眞中の五疊敷には金屏風を立廻らして秀吉三疊の處には上手は大政所と松の丸、下手に遊の方、幸藏主は日吉權現の掛物を持つて下手の幕際に控へてゐる。大せいの腰元は後ろに控へてゐる。地震のための避難所である。吹き渡る又も地震の揺りかへし、御大將を始めとして、淀の方、大政所も打揃ひ皆々伏しておはします。

やゝ地震も納まつたやうで、幸藏主は皆に別條のないのを、大切な品物と思ひ持ち出した日吉權現の掛物で秀吉朝夕信心のおかけてあると悦ぶのである。秀吉は皆の無事を見て悦ぶが諸役人の未だに出仕せぬを察するのである。大政所も淀の方もかゝる時に清正が居ると心丈夫と思ふが、今は御不審で謹慎中であるので、大政所を始め清正の今迄の忠節にめで、許しを乞ふが、秀吉の怒りはまだ解けてゐない。清正が許しなく豊臣の姓を名乗つた不届きは死に償するものだ、重ねて清正の事は申すなと云ふので、是非もない儀とおし黙つてしまふ。

へせん方ななき其處へ、又も地震のゆりかへし、かゝる所へ加藤清正、手の者引つれ駈け來り。幕の外へ清正が、清兵衛、又藏等の家臣をつ

れて駈けつける。

『幸藏主はおわさぬか、幸藏主へ』

幸藏主は幕をかゝげて此方へ立ち出で、清正を見て驚く、さうして五年此方朝鮮で苦勞をしてやつれた姿を見て涙ぐむ。清正は幼い時からの馴染である幸藏主の無事を悦ぶと共に氣遣はし主君秀吉の安體と聞き涙をさへ浮べて悦ぶのである。さうして秀吉への執成を幸藏主に頼むので幸藏主は大政所に此由を傳へると大政所始め一同は清正の來た事を喜ぶ。悦び勇む局達、秀吉公も慕越しに見れば忠臣清正と、心の内に悦び給ひ。

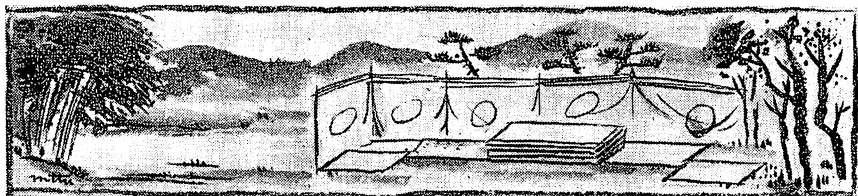
『謹慎の身を顧みず押して登城は不届き至極此の地震を幸ひに其身の詫びにうせおつたか』

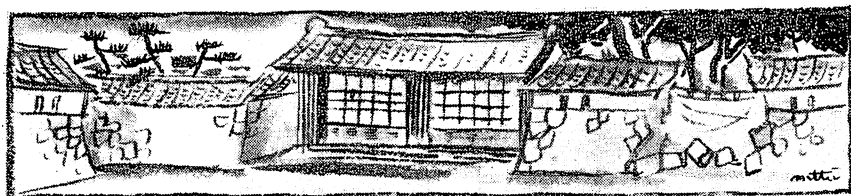
秀吉の心の内では清正の忠誠を充分に認めてはゐても諸大名の手前容易く、清正を許す譯には行かないのである。中門の固めはなきか誰が許して通つたと語じらねばならない。秀吉も苦しい立場にあるのである。大政所、淀の方の口添えも秀吉の怒りを解く事は出来なかつた。

幸藏主からこの由を聞いた清正の落膽は、傍の見る目も氣の毒である。家臣の者は此上は直々に願はうと立ちかけた。清正は家臣の

者に駈がれては一層怒りを受くる事と、中門へ遠ざけてしまつた。

『思ふ事云はざるは胸に申す、此身の述懐一ト通り聞いて下され。抑も五ヶ年以前三月上旬小西行長斯い清正、朝鮮國へ征伐の先鋒を仰せつけられ肥前名護屋表より一時に出帆いたせし處、行長兼て某に意恨有て釜山浦の先を取り又王城へ攻め入るにも我れを偽り先陣なし、再度耻辱を取つたれど、始終の勝こそ勝なれと、行長大明の大軍におぢ恐れて敗走せし跡に某踏み止り、わづかな勢にて數ヶ度の血戦、も





是迄と死を極め討死なさんと思ひしは幾度といふ數知れず、只日本の耻を思ひ五ヶ年の間朝鮮にて雨にぬれ雪にこいへ、あるひは野に伏し山に伏し。まつた蔚山にたて籠り、數日の間防戦、兵糧盡きしその時は獸肉を持つて飢をしのぎ、艱難辛苦いたせしは詞を以て申さずとも、瘦せおとろへし清正が此顔色にて推量下され」

鬼をも挫ぐ清正ではあるが、そゝる當時を追想しては今更のやうに兩の眼からハラ／＼と涙が溢れるのである。

『かゝる難戦苦戦なせしも朝鮮國を亡はせとある主君の命を貫

いて我日本の勇氣をば海外へ輝かさんと忠義一圖にこつたる清正を

「臆病未練な小西にかへ、御勘當とは情なし。」

我れ三歳の折親に別れ御前に於て人と成り十三歳の初陣に敵の首を取つた時、出かしたつた予を親と思へ子と思ふと有難き御詞に夫れより數度の戰場にうしろを見せし事なきゆへ、御感狀の御墨附幾度となく頂戴なし、家の寶と所持なす某、そのいにしへを思召せば、すこし位の落度が有つても御ゆうめん有るべき筈を倭人共の讒言にて御勘當とは情なし、三度の食も咽へ通らず、寝ても寝られぬ悔しさは兒嬰の折より泣かざる清正初めて涙を覺えしぞ。

縋々として涙と共に訴へる清正の詞、幸藏主ならねど誰か涙なしでは居られない。秀吉もこれを洩れ聞いて胸をつくものがあつた。

幸藏主は清正を我子の如く思はれる、秀吉の事だから遠からず、心が解けるに違ひない。まして今日の大事に早速の登城、一同から改めて願つてやると慰める。

大政所もそゝる憐みを催して此騒動に中門の固めなきを幸ひにせめて清正に固めきそうと秀吉にはかつたが、秀吉は謹慎中の者に自

分から指圖は出来ないう勝手にせいと、情けの籠つた言葉である。幸藏主も悦んで清正にかくと通じた。清正は嬉しさに涙さへ浮べた。

「勇み進んで長刀抱込み、鬼人も恐るゝ勢ひにて御門をさして急ぎ行く。」

秀吉は延び上つて清正を見送り、變りはた姿に涙を催した。大政所等の再三の願ひで秀吉も表面の怒りは解けたが、女子の詫びて濟むなどとは諸大名への聞へも悪い。家康か利家の詫びを待たうと云ふ事になつた。

第三城門の場

眞中に城門、左右は石垣であるが、處々地震て崩れてゐる。清正の家臣が四人程用意の鐵棒を持つて控へてゐる。

「いしづへかたき城門の家根の瓦もおちこちに、もへたつ火の手を篝となし、加藤の家來は中門口、人々來ると待つ所へ」

石田三成が烏帽子素袍の姿で家來の運平を連れて出て来る。そして自分より先へ出仕して中門を固めてゐるに不審を抱いて運平に命じて開門を申込んだ。名を問はれて石田はムツと顔色を變へて、石田治部少輔三成なるぞと意気高くである。清兵衛等の清正の家臣は、かゝる騒動中野心あるものが名を騙ることもあ

るから實否を訊すまでは開門出来ぬと云はれて、三成はまず腹にすへ兼ねた有様である。名乗りかけられて清正はヌツと三成の前へ立つた。

『前代未聞の大地震、某一に駆付て此處の固めをなすに、何奴などとは奇怪至極』三成の最初の言葉に對する、一矢を酬ひる。

『やア返すくも惜き雜言』

三成も黙つてゐられない。返へし言葉が清正の家臣等に奉行ともある者が今頃の出仕で役向きが勤まるかと愈々三成の旗色が悪くなつた。三成の臣連平はたまり兼ねた有様で刀に手をかけたものゝ、清正の一瞥に逢つて震へてしまつた。かうなつては三成も意地にも通

りた。清正の方では意地にも通さない。殺氣立つた氣色に見えた。徳川家康、前田利家の二人が丁度來合はしてこの小競合は事なく納まつた。家康利家とは清正は久方の對面て互ひの無事を祝し合つた。家康は清正のこの變事に第一に駆付けた忠誠をたゝへた。

『さりながら當時五奉行の石田殿、開門なくばそし許の、イヤそこ許の御御不念には致さぬ程に開門あつて然るべし』

『今徳川どのゝ仰せの如く我々兩人引受けて貴殿のに決していたさぬ、御疑念なくとも

清正どの開門なして御通しなされい』徳川前田の老職の言葉で清正も、否む事はな

らずかゝ加へて二人には秀吉への執成を頼まねばならぬので門を開ける事となつた。

主君の命で家臣の者は三成を嘲弄しながら門を開いた。三成も度々の雜言で氣色ばんだが家康や利家に制しられた。

『事を好まぬ斗らひに是非なく石田も打つて、御門の内へ入りにける。清正の心よ澄き透る心持ちであつた。讒言した意趣も家臣達の振舞で少しは晴らしたからであるが、此上の讒言もある事と互ひに戒め合つた。』

幸藏主が茲へ出て來て秀吉の心が解けたと知らした。清正は自分の耳を疑ふ様であつた『さればいのう、大政所さま淀殿が今宵早速駆付られしその功を申上我君さまへ御詫なし、先づお心はとけたれど、清正とも云はるゝものが、女の詭言で勳氣がゆりては、後日の恥辱と表向き徳川さまのお詫で御前へ御召に成り、御不審の廉々を御尋ねなされしその上にておゆるしなさるゝ思召し、今に御使者が參らふ程に、お悦びなされませ』

清正は元より家臣は此の一言を聞いて、天に

も昇る喜びであつた。

『是と申すも石田、小西が舌害より起りし事なれば、こりやかうなうては叶ひますまい

併し彼等は佞人故御不審の廉の申開きが』其儀はお氣づかひ下さるな、某御目通りいたし申開きは胸にござる』

幸藏主は清正の言葉で、安堵をした。『五年が間、朝鮮にて娘難辛苦致せしも、日頃信心こそし奉る高祖の五難に事ならず』

『一ト間處に立籠り、仇に月日を龍の口。』

『サその敷革の首の座に、既に直りし清正も』

『大政所の扱ひにて、日輪茲へ下りし如く。』

『身の浮き雲も吹晴れて。』

『又も武名のかじやくも。』

『由井ヶ濱邊に打寄する。』

『なみくならぬ法華經も。』

『これも利益で御座らうわい、南無法蓮華經』

清正は日夜信仰の七字の題目を高らかに唱へた。夜はしら／＼と明けて、清正の心中

緋の一片の雲もない。ふと見れば三成の臣連平が鐵砲で清正を狙ふてゐる。清正のあの恐ろしい眼ざしの一瞥に逢つて、連平は手出し

もならず逃げ失せた。幸藏主も顔見合はして

清正は朗かに大笑する。

盛

綱

の

研

究

平凡人の盛綱

高 安 吸 江

十月の中座は例年の通り成駒家等の大一座で、近松物の佐々木大鑑や宵庚申が出ると聞きました。お千代半兵衛の方は大正九年六月、同十四年二月にも演じて好成績であつた、所謂試験演習のものですが、大鑑の方はまだ誰もあまり手をつけて居なかつたと思ひます。年表をくつて見ても貞享三年の佐々木先陣即ちこの大鑑の外には、正徳二年の藤戸の先陣、寶暦九年の先陣浮洲巖などとあまりなじみの無い外題ばかりです。一般はやはり難波戦記に活躍する真田の佐々木により多く親みを持ち、名馬池月に跨がつて宇治川を乗りきつた弟の高綱に對して、備州兒嶋の海を馬で渡つた藤戸の先陣、本家本元の盛綱が是まで少しも顧られなかつたのも妙です。この大鑑は云ふまでもなく謠曲の藤戸をもととし、それに

その後日譚とも云ふべきものを附加して五段に作り上げられたのですが、今回はその第二段、藤戸の巻が出るそうです。貞享三年と云へば丁度近松の三十三歳の時で、此頃には木綿實はワキを習ひ、煙草切は笛を吹き、兄は大鼓、弟は小鼓をうちあかし暮す、と二休咄にも書かれて居る様に、能や謠は大流行ですから、彼も其影響をうけたと見え、初期に屬する他の作と共に、所謂謠かぶれ時代を示して居ります。それで到る所に謠の文句が散見し、原本の藤戸は云ふに及ばず、松風(淺瀬教え)もあり、頼政(先陣の段)もあり、井筒や小唄、殊に第四の蘆刈では、その名の如くに蘆刈が用ゐられ、その中で笠の段などは殆どその儘です。こんな事を一々述べては際限のないことですから、それよりも謠の藤戸を近松は

どういふ工合に劇化したか々考へる方が興味が多いと思ひます。

元來盛綱先陣の件は、平家物語、同長門本、源平盛衰記其他に出て居ますが、その本によつて記事が大分異つて居ます先づその時日にしても、東鑑には佐々木日記と同じく元暦元年十二月七日とし、盛衰記その他では同年九月廿六日となり、近松では元暦二年三月廿六日です。此月日は謡曲のワキの語に「去年三月廿五日の夜に入りて云々」から來たのでしやうが、それにしても元暦二年が少々變です。何故なら二年の三月廿四日には安德帝が入水せられた筈ですもの！次に藤戸の海上ですが、これが三町餘（東鑑）から四五町（盛衰記）五町ばかり（長門本）わづか廿五町ばかり（平家物語に大鑑）と種々になり、それに盛綱其日の出でたちとして、直垂は黄なる生絹（長門本、盛衰記）しけめゆひ（平家物語大鑑）鑑は黒糸絨（長）緋絨（盛、平、大）馬は黒（長）連錢（盛、平、大）郎黨は廿七騎（長）十五騎（盛）七騎（平）など、恰も講談師の出鱈目が想起される様な異同には、微笑させられるではありませんか。是等の點を見ますと近松は謡曲並にその原となつた平家物語に據つたのは明かで、此れは猶後に述べる事によつて一層よくわかります。即ち用心の淺瀬の案内ですが、先づ長門本には、彼浦の者を語らひ、そして居た白鞘巻を與へて淺瀬の有無を問ますと、其返答に

此渡りに瀬は二候なり、月がしらには東が瀬になり候は是をば大根川と申す、月の末には西が瀬になり候、是をば藤戸の渡りと申候。當時は西が瀬になり候ぞ。東西二の瀬の間、遠き巾二町ばかり候。瀬のはたばり二反ばかり候、其うち馬の足た、ぬ所二三反にはよも過ぎ候はゞと申ければ、扱は其淺さ深さをいかでか知るべきと問ければ、淺き所は波の立やう高く立候ぞと申ければ、さらば瀬踏して見せよといひて彼浦人を先に立てぞ渡りける。膝に立所もあり、股腰に立所もあり、むねわきに立所もあり、深き所ぞかみをぬらす程なる、巾二反計ぞありける。さて是より嶋の方は淺く候とぞ申し歸りける。

盛衰記では大體に於て長門本同様の記載ですが、猶淺瀬の所在を明白にするために「一人にあやめられぬ程に濔注を立て、得させよ」とまた直垂を一具與へたので、浦人もこんな幸福にはまだ出逢はなかつたと、大喜で小竹を切り集めて水面から少し引入れて立て、其印としたと書いてあります。

此れが平家物語になると、直垂、小袖、大口、白鞘まきなどをやつて淺瀬を聞き、裸體になつて實地踏査の後「下郎はどこ共なきものにて、又人にも語らはれて案内もや教へんすらん、我ばかりこそ知らめ」など、得手勝手な量見を起して可愛そうに、正直に教へてくれた彼男を刺殺し、首掻き切て捨てたとあります。淺瀬の模様は前のに比べて大分簡略され

て居ます。(それは謡曲で一層略され、近松では更に約められました)が、其れり浦人を殺してしまひました他の二つでは殺す所か、大に満足して歸つて行くのに、是は何といふ變り方でしょう。しかしそれなくては芝居にならぬから、殺す方の平家を本として謡曲の藤戸が出来ました。

藤戸はまた藤渡、藤門など、も書かれて居ます。能本作者注文には觀世二代目の大天才世阿彌の作となつて居り、世子六十以後申樂談義には、永正十一(一二七四)甲戌十月廿八日に南都雨喜びの能に演ぜられたことが出て居る位ですから其古さが推しはかれまじやふ。曲は盛綱が藤戸先陣の恩賞として賜はつた兒嶋の知行所へ初めて赴く所から始まつて居ます。松吹く風も長閑に浪靜なる春の湊に、一行を見てさめくと泣くのは、去年淺瀬を教へて殺された浦人の老母でした。その切なる情に動かされて、盛綱は終に當時を物語り、且其跡を懇に弔ふのが前段で、後段は能に御定まりの幽霊で、即ちかの浦人の亡魂が出て最後の状況を述べるのです。此仕舞がまた中々好評で、種々面白い皮肉な型が傳へられて居ります。扱此能から近松は何を仕立て上げましたか。炎帝の女が東海で遊で溺れましたので、發鳩山の精衛と云ふ小鳥が、西山の木石を取つて東海を填めやうとした事が山海經に出て居ます。是からヒントを得て近松は、藤戸の老母をしてその娘二人と共に、兒嶋の海をへ干して夫の屍をと

り出さうとさせました。殺されたのは息子でなくその良人で極度の悲哀は彼女の眼を奪ひ、その心を狂はしめたのです。能では一聲の出で雛子の位を無視せんばかりに、悲歎と無念とに亂れて、早く國守に遇て恨を述べたいと、焦り氣味の心を主とするのを習とする流義もある位で、故金剛謹之輔翁が胃癌を病でなくなる少し前に此能を演じました時、ワキの語を聞いて後へとてもの憂き身なるものを、亡き子と同じ道になしてはせ給へと、人目も知らず伏しまろび、我子かへさせ給へや」と兩手をひろけツカ／＼とワキへ迫り、拂はれて後へ退き膝つき右でワキを指し、安座して泣く型の緊張味は實に言語に絶し、流石の老巧柳田氏のワキもタヂ／＼であつたのを覺えて居ります。大鑑の方の老母は、夫の敵、今の國守盛綱が傍に來て居るとも知らず、夫の最期の物語をし、名主にそれと注意せられて一時は恨を述べますが、鹽焼ながらも侍にまさつた藤太夫を夫に持つた丈にか、悔悟の涙にくれる盛綱を許し、敵に迫る娘等を制する度量を有ち、其望を尋ねられては敵の恩をうけるを耻ぢ、唯御恩には死骸をあけさせ、跡を弔つてくれといふだけで如何にも立派な心かけです。

此れに引かへ頗る不感服なのは煮えきらない盛綱の態度です。第一場で兄廣綱に縛られた藤太夫の娘等を救けたのはよいが、元來好色者で美男ときて居るから、忽ち此二人の美

女と共鳴しやうとして、廣綱に見つけられる彼の醜態はどうです。それはまだ恕すべきとしても、許せないのは藤太夫殺害の理由です。廣綱に立聞きされたので、大勢に知らせず、我一人だけの事といふ自己本位からなのは平家物語と同じやうですから、それを悪かつたと氣付けば、相當の謝意を表すべきであるものを、變テコな理屈をつけやうとするので一層不快の感が起ります。母や娘に詰問せられ一人に告げたら、自分が習つた甲斐もなく、また教へた益もない、それで殺したが、全く恩は忘れぬ」と何といふ無茶な言分でしやうそれなら殺さずとも縛るとか何とかして、軍の終るまで隠して置けばよからふとは、妹の時雨でなく共誰でも云ひそうな事で、それに對して「それ位の事は知つて居るが、夜も明けたり、家の子若黨にも深くかくして居るのだから」と云ふ。まるで理由にも何にもなつて居ません。それに又盛綱程の武士が、是程の事を頼むべき郎黨を一人も持たないと云ふのは何とまあ憐むべき人間ではありませんか。

こゝにいふ風に考へて見ると、正真正銘の盛綱が是まで舞臺に出されなかつた譯も、多少想像せられます。今度の中座では無論鴈治郎の盛綱でありましやうが、天下の盛綱役者のやる盛綱でも、是はあまりに不徹底な平凡人に描かれて居りますから、潔癖な成駒家でなくとも、原作其まゝにはとても上演出来ないと思つて居たら、大森氏が加筆するとの事ですが、

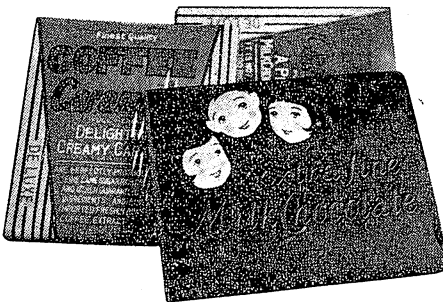
是は已むを得ますまい。唯問題はその程度如何で、丁度宵庚申の上田村で半兵衛の自害を止めない平右衛門の件をカットしたりするやうな亂暴な改悪は一切ヌキにしてほしいものです。幸にこゝして新に十二曲中に加へ得べき一幕が出来上つたとすれば、それは決して鴈治郎一人のみの慶びではありません。猶序ながら、寺子屋で「せまじきものは」を復活させた成駒家が、此度の上田村を原作通に演ずる事によつて、より完全なる宵庚申として範を後世に垂れしめたいといふ希望は、恐らく私だけではあるまい事を此機會に附加しておきます。

アングロス井ス
ミルクチョコレート
コーヒキヤラメル
チョコ キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)一六六一番



『佐々木大鑑』雑話

——世阿彌（謡曲）と近松（浄瑠璃）——

木谷蓬吟

『佐々木大鑑』は近松の若年の頃の作で、全體から觀ると、決して佳作とは云へない平凡な出来であるが、然かし盛綱の藤戸の先陣の一條だけを抜き出して見ると、立派な名編となつて光りを放つ。全體としては別に拾ふ價值はないが、一幕物として採り上げると、確に今日にも生命のある名狂言として推すことが出来る。

この何の根據は謡曲の『藤戸』であることは疑ふべくもない。『藤戸』の扮本は『平家物語』であることも確かである。

私が特にこの『佐々木大鑑』の盛綱藤戸先陣の條を推稱する譯は、作の内容價值にも無論感服しての事でもあるが、別に自分自身に願て、思ひ出の深い一挿話を持て居るからでもある。少々ばかり閑話を許して貰ひたい。

私は日露の戦役に二年の星霜を滿洲の戦地に送つた……これでも將校の端くれである……日常目にするものは、戦役毎

に死んで行く多くの兵士の悲惨圖である。例へば敵の最も重要な一陣地を占領する、世間は其代表的上官の何某を稱讃し、勳章は其上官に授けられて、獨り其上官のみの名聲が揚る。その占領戰に實際惡戰苦闘して戦死した多くの兵士の犠牲者に對しては、比較的世間は冷やかである。捷利の榮冠は獨り生き残つた上官にのみ酬はれると云ふ現象が無いでもなかつた。私は陣中に活字本の諸曲集を用意して持つて居た。たま／＼『藤戸』の一編を読んだ時に、眞に痛切に此感を深うした。一戦毎に殆ど夢のやうに果敢なく倒れて行く兵士の群屍、名もない人の子の犠牲。それに反して其統軍の上官の名は世に著しく謳はれ、偉勳者として名譽の榮冠を戴くのである。

『佐々木大鑑』や『藤戸』に現はれる佐々木盛綱は、即ちこの上官と同一線に立つ人物として描かれてゐる。

『一將功成り萬卒骨枯る』これが此作の肉である。

佐々木盛綱が藤戸の先陣に、馬で海を渡つたと云ふ稀代の武功の一面には、悲慘極る一犠牲者の哀話がからんでゐるのである。

源平備前兒島の合戦に、盛綱は先驅の偉功を奏す可く、ひそかに浦の男を説いて、海路の淺瀬を聞き出すことが出来た。然かし此秘密を又他人に洩れ教へられては功を一貫に缺くと考へたから、直に其男を刺し殺して浮洲の岩の彼方へ沈め、自分はその翌朝、教へられた海路を辿つて、見事に馬を乗入れて世にも稀な先陣の偉功を奏した。その恩賞として兒島の地を賜つたとある。

以上は『平家物語』の所載である、これを粉本にして謡曲の名作者世阿彌は『藤戸』を斯んな風に描いてゐる。(但し浦の男を殺したと云ふ記述は、韓信が蜀の間道を樵夫に聞いて之を殺したと云ふ支那の故事に似て居るが、ひとり『平家物語』にあつて『盛衰記』や『東鑑』や、同じ平家でも長門本にもないのである)。

『藤戸』では、盛綱が新領主となつて兒島を巡視に來ると、曾て殺害した一漁夫の母親が、我が子を殺した盛綱の無情を恨み、綿々として其非を鳴らし歎き狂ふ。功名心に燃える盛綱は、最初は素知らぬ振、さあらぬ様を装ふたが、老女の痛

言に動かされて遂に其實を物語ることとなる。後には、漁夫の亡靈が現れてこれ亦恨みを叙べるが、最後は成佛の身となつて退場すると云ふ仕組みである。そして前シテは母親、後シテは漁夫の靈、盛綱はワキになつてゐる。

功名にあせり氣味の、いかにも戰國時代の武人らしい盛綱や、極めて賤しい生活者の、漁夫の母子の眞剣切實な情愛など、流石に世阿彌の異色ある名作として戴く事ができる。

近松は更に、この『藤戸』を咀嚼して、盛綱をシテに、その性格をも理想化して近松独自の『佐々木大鑑』を生み出したのである。そして漁夫の母を老漁夫の老妻とし、待宵時雨の二人娘を配して色氣を添加した。

この盛綱は、世阿彌の『藤戸』の盛綱のやうな、専ら功名にあせる武將としてではなく、情味の饒かな花も實もあり血も涙もある情義に厚い大將として描化されてゐる。此點が世阿彌の『藤戸』と大に異つたところで、近松藝術の特徴を現はしたものと想へる。自分の功名が天下に揚る其裏面に、この悲慘な犠牲者の遺族が泣いて居る、それと知つた盛綱は、つくづくと武士生活のむじめさを痛感した。自分の爲めに何の罪もなく殺された漁夫の妻は、歎き目を泣き潰して現に盲目となつてゐる。二人の娘も狂亂同様の姿になつて泣き怨んでゐる。此有様をまざぐと見た盛綱は、(第十三頁)

掘出物の『藤戸』

高原慶三

とかく世の中のえらい人といふものは他人の忠告や、又世間の忠告なんか、耳に入れやうとしない。また、たとひその忠告を容れるにしても、自分がその説に聴服したといふと自尊心を傷ける……とても思ふものらしい。

白井さんが第一劇場で意固地になつて林長二郎を引續き御登用の事實——

また、鴈治郎に『伊勢物語』や『山の大判事』など例證的に演るべき狂言を世間が教へてゐるに拘はらず、それを馬の耳に風と聞き流すゆき方——

が、てうど世間の忠告を説服されることをいさぎよしとしないえらい人の態度ではないでせうか。

まづ、第一劇場の長二郎の登用、これは第一劇場の社會的聲價を失墜させる點からいつて、どうも白井さんの態度には同感出來ません。

私はある新聞の劇評に『第一劇場の生長には、お互に長い

目で見ようとしてゐる世間に對して、劇場經營者は、どう考へてゐるのだらうか』と、白井さんの反省を促しておいたのですが、こゝはやつぱり白井さんも普通の所謂えらい人心理に支配されて、『そんな輿論がどこにありますんやらう』といふ顔をしてゐられます。意固地のために意固地になるなんて苦勞人の白井さんにも似合はぬことです。但し、演劇は營業ですと仰有るのなら説は自ら別問題です。

が、さてこんどは鴈治郎の問題です。私は近頃鴈治郎に對して、その年輩、その相貌、その賞録からいつて、現在の劇壇にて九代目團十郎の地位に立つ人だと屢言しました。

で、ありますから世話物より時代物へ、二枚目から立役へモウ一つ突進むで實惡にまで、その藝域の轉換を奨めたのであります。松竹のモットーである『鴈治郎に殺される役と憎まれる役と、汚い役はさせません』といふやうな馬鹿々々しいことに災はされないうで、一つ皮肉に『七笑の時平』とか澁

味のある『大判事』などをやつて、華やかな甘い鷹治郎が、年と共に溢い實のある鷹治郎に大成して欲しいのです。

この説が間違てゐるか、間違てゐないかは『殿下茶屋聚』東間三郎右衛門と『反魂香』の吃又に大成功した一方に『妹脊山』の求女が思つたより拙かつたといふ點から見て明かではありませんか。松竹ではどうかすると鷹治郎が白い役をする時には鷹治郎の藝で賣るより、むしろ七十の親爺が前髪物やることだけにお客さんの興味をそ、らうとするやうですがこれはわるいことです。

鷹治郎の前髪物はいくら白粉の力で若くなり得ても、あの東西を通じて比類なき立派な顔と柄とが反て過ぎたるは及ばざるの感を抱かせます。

『太功記』の重次郎、『妹脊山』の久我之助と求女、『一の谷』の敦盛、などの時代の二枚目物は紙治や伊左衛門、忠兵衛等世話の二枚目物よりは餘程質は低下します。

と、いふ事で、今度は近松の『佐々木大鑑』の藤戸物語の盛綱を鷹治郎がやるんだそうですが、これは頗る面白い。

白井さんがわざと『伊勢物語』や『大判事』を知らぬ顔して、近松の時代物にまで突き進むで、『チヨイとこんな物をやらせて見ます』と皮肉に世間を見かへして見たところさすがは老膽、戦場往來の古強者の感があるぢやありませんか。希くば、原作の盛綱は大分色つぽい好色家(……といふのは風

流男の意味だが)になつてゐる。だから鷹治郎に打つけたといふやうなヘンな錯謬を起こさないで、單なる風流男……といふやうに解釋して、成るべく待宵、村雨と盛綱の好色事件は抹殺せられる方が、現代人の心持に同感出来るだらうと釋迦に説法しておきませう。とにかく『藤戸物語』は近頃の掘出シ物です。第一劇場の反感もこの『藤戸物語』で帳消です。

(第十一頁より)

五體を切り刻まるゝ如く『今替らるゝものならば我が命も惜しからず』と、直垂の袖を顔に押當て、群臣の見る目もはからず涙滂沱として泣きくづれる……と描いてゐる。

華々しい功名の武士生活の裏面に、さもあり得べき暗黒な痛ましい半面を描き出したのが、この作の力點である。

世阿彌の描いた『藤戸』の現實的盛綱も面白いが、近松の詩化した『佐々木大鑑』の盛綱には、更に深大な理想的内容味が加はつてゐる『藤戸』の盛綱に扮する俳優には、現代可なり其人があらう、然かし大近松の理想化した『佐々木大鑑』の盛綱に至つては、獨り鷹治郎の壇場ではあるまいか!

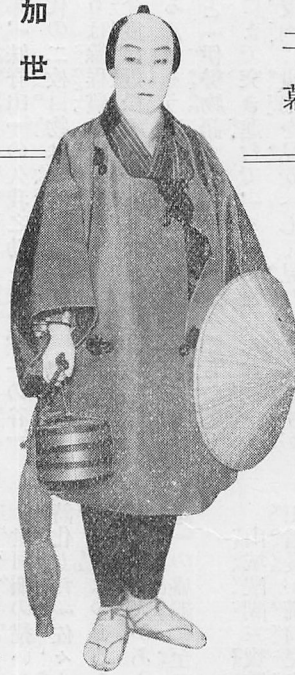


山城醍醐三寶院の庭園に、藤戸石と稱する巨石がある。織田信長が備前兒島から京二條城に寄せたものを、更に豊公が此三寶院に移した。盛綱が漁夫を斬つたのは此石上だと云ひ傳へてゐる。

座中の月十
申庚宵中心

二幕

加世
三癖



上田村之段

山城は上田村——庄屋に並ぶ大百姓島田平右衛門が家。

五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田の落し水、軒の玉水とくくござれ、繁くござ

れば名の立つに

下女のお竹、お鍋が縮くりも邪覓になる男共は野良仕事に、病人はスヤ／＼と寝てゐるので手はかゝらず、はかばか行つた、チト油を賣らうと、絲車、縮くりを片づけて奥へ行つて

しまいました。
上手の病室から姉娘のお輕が出て來ました

が誰もゐぬので、小言云ひ／＼圍爐裡に木をさしくべてゐます。と門口へ駕が着いて、ほろ／＼うかむり姿、二重まわりの抱帯のお千代が門口に佇む有様を、お輕は見つけて、妹が父の病氣見舞に來たと合點して喜びます、お千代には父の病氣は初耳です、病氣見舞でないとは何にに來たと、お千代は問ひつめられて詮方なく、早や涙聲です。
『アイ姉さん、恥かしや又去られて』
お輕は之を聞くと顔色を變へました。
『跡の月半兵衛殿は父御の十七年の申ひのため、生れ故郷遠州濱松へ、戻り次第道具に添へ、暇の狀は後から、まづ去ねと譯も言はず』

しかも唯ならぬ身重を姑御が手を取つて駕に無理矢理に乗せられたと、お千代はこらへられない口惜しさに泣き入ります。

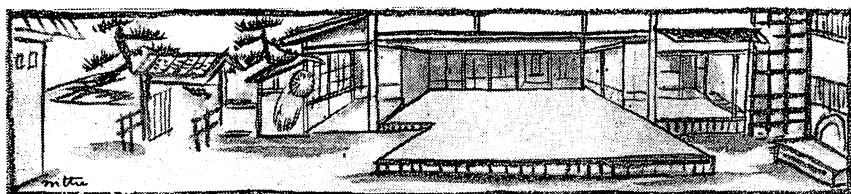
平右衛門の病氣見舞におなじ村の金藏がつと入つて來ました、戻り駕の咄に聞いた、お千代殿は去られて戻られたさうな、親仁殿に云ひ込んで我等うけ込むと遠慮會釋もない大聲、姉妹は心をひやすばかりです、奥の間から平右衛門がお輕を呼ぶので、金藏は又あすの事と見舞の詞を残して去つてしまひますお千代は姉の腔からおず／＼父の様子を覗きこみます。

『大事な、ツ、と來いツ、と來い、又も去られて戻つたな』

姉妹はぎつくりとしました。

『子に迷ふ親の心居ながら千里萬里も行く、ましてく／＼家の内、寝るに寝られず最期より何事も聞いた』

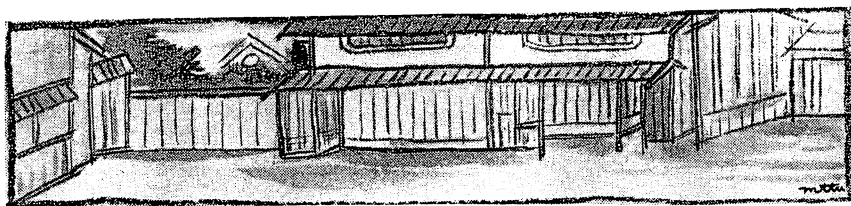
以前の自分なら重ねて去られるやうなら顔も見まい物も云ふまいとの我はあつたが、六十に足踏込んでなほその上に病みわづらひの身では案じられるのは我が子の事ばかり、何事も前世の約束事と思ひあきらめ、悔やみもせぬ、たゞ半兵衛の留守の内が合點せぬと、案に相違の父の機嫌に姉もお千代もほつとし



ました。
お千代は嬉しうに父の傍へよつて、撫てさすりの介抱、お輕は藥を煎じに聞爐裡の傍へ來ました。
八百屋半兵衛旅ごしらへ左手には土産もの菓を拵けていそぐと出て來て、案内の聲と共に庭へ通ります、お輕は半兵衛を見て、『去狀様よう御座つたと銀味の言葉浴びせました。』
『といへども何の氣もつかず、旅出その儘笠とつて沓ぬぎに草鞋の紐、心もとける。』
半兵衛はお輕の言葉も氣にとめる事なく、無沙汰の詫やら、遠州から今戻つたとの挨拶にも、お輕は顔をそむ

けた鼻あしらひです、半兵衛はその顔色を見て仔細はわからず、立つに立たれぬ有様、此時隔ての障子をあけて、藥を取りに來たお千代と半兵衛は顔を見合はして驚きと不審顔、言葉もかけずに障子閉め切つた、お千代の姿を見送つて、あきれ顔の半兵衛は聞きだした、空笑ひのお輕の様子、半兵衛は手持無沙汰にたゞ俯向いてゐるばかりです。
奥の病人の部屋では庭の障子を明けました平右衛門が、日永に倦いた退屈しにに柳の本を讀んで聞かせてくれお輕も此處へ來て聞くと、老の氣のいらだつた大聲。半兵衛は心づいて
『ヤツ親仁様御病氣か、ア、その御介抱に千代は歸つて居りましたか』
と安心の體で立上りかけましたが、お輕の振舞にそれなら、内の様子に聞耳を立てゝゐるばかり、お千代は父の好みの平家物語、祇王の段を讀み初めました、お千代には我身に當る節々、おのづと涙がにじむのです。
平右衛門はお千代を祇王にたとへて、必ず去つて給はるなとかき約束忘れたかと半兵衛に當て、老の一徹からのげし言葉つき、半兵衛は思はず膝をすり寄せました。
『サア何の約束忘れませう、決して去らぬ、

今こそ町人八百屋の半兵衛、元は遠州濱松にて山脇三右衛門が、武士冥利商賣冥利千代は去らぬお氣づかいなされますな、これは何かの取まらぐい』
お千代は去つた覚えはない、去りはせない、平右衛門につがひし詞もある、遠へぬ武士の性根を見せる、見て疑ひをはらして下されと半兵衛は脇差に手をかけました、平右衛門も今は疑ひはれて、千代を去つたのは姑お峰殿かと云ふのを半兵衛はさへぎつて、
『ハテ今更誰に罪をぬりつけませうぞ、ましてこの半兵衛は去りませぬ、在所よりかうして寄つたも、夫婦幾世のこれ因縁、自害は思ひ止まつて、これよりすぐに千代と同道、大阪へかへります』
半兵衛の言葉にお千代はいそぐとして歸る身仕度にしめ直す帯のきをさぐつて、平右衛門は病の床からにじりより、奥々も娘の事を頼み契の盃と酒のかはりの水で親子夫婦の水盃をします、二人は父の病の癒へのを祈りながら立上りました。
平右衛門は重ねて戻らぬ爲め祝ふて内へ門火を焚けとお輕に伝附きます。
『庭にこがるゝ下明えの、果ては夫婦が無常の煙り』



「灰になつても歸るなよ」
平右衛門がいましめの言葉。

「再び敷居は踏ませぬ
其一言をこの世の名残り、留まる名残り、行く名残り、長き名残り……」

——幕——

油掛町八百屋之段

大阪新報——八百屋伊左衛門。

丁稚の松藏は上りがまに居眠り、下女のおさんとおくにはのりかひものゝしんしを取りそろへてゐる、姑のおみねはそれらをねめ廻して、八方への氣の配りやうが嵩じた口八釜しさ。

甥の太兵衛が荷をかついで歸つて來ます、内へ入るなり伯母の口小言をたしなめますが、反つて伯母にきめつけられ、口答へすりやオ、コで打ちかけられます、店の藏ぎに藏から半兵衛が出て姑をとめました、母の手前、太兵衛をたしなめて註文の品をそれゝ届けさせます。半兵衛に取なされた太兵衛は横町の山城屋で逢ひたいといふ人が、待つてゐるとの言傳を、半兵衛にさゝやき伯母にはなほもへらず口をたゝいて出て行きます。

『オッ山城屋からとは何の用であらう、ちよつと行つてまいります』

半兵衛が出かける後から、おみねは呼とめて、山城屋へ行くのは合點ゆかぬ、氣にいらいて去なした嫁、遠州戻りに在所へより連れて戻つて從弟の處へ預け、商賣にかこつけ女夫こつそり嘸二人してわしが事をそしつて居るであらう、十五年世話した親の嫌ふ嫁に孝行つくし、親には不孝のありじよ、恩しらずと罵ります、半兵衛言譯すればする程養母の不機嫌に困つて居るところへ、西念坊熊野屋から石鐘の開眼、講中も揃つたと呼びに來ます、奥から主の伊左衛門が出て來て、共に行かうと云ひますが、おみねは往かぬと頭をふります、又やかましく言ふのか、と伊左衛門

はたしなめて出て行きます。
父を見送つた半兵衛は、二十二の年から御恩にあづかる身の上、お氣に入らぬ嫁なら自分と離縁して、世間に沙汰はさせない、少しの間蟲を殺して千代を入れ自分て去狀書いて暇やるとの言葉に、我耳を疑ふやうなおみねの様子です。

『サア其處が男の後見、貴人高位の娘でも、夫が去るに誰が何と申しませう、さうさへすれば千代でも、あなた様に恨みもなく、お慈悲ぶかいと一言云はせたい、十六年この方たつた一度の御訴へ證、老少不定の世の中、たとへ私が先だつても、如何なる跡のとひ用ひ、百萬遍の御回向より、開入れたとの御一言、智識長老のお十念をさづかる心。』

へとばかりにて、女房の親と我親と、世間の義理と恩愛と三すじ四すじの涙の絲、たぐりいだすが如くなり、母はにやりと笑顔して
眞實こめた半兵衛の言葉に、母はやつと、合點したものを、間に合ひ言ふて欺かすが最期咽笛を出双胞丁と、半兵衛と固く言葉をつがへて、下女のおさんを連れて去ります。
跡には一人半兵衛が、兎やせん角と胸せ

まり、覺悟もさすがきむらいの、其暗みの脇差やこじりつまりうき思ひ、お千代は重なる五月の、重き身ながら足元も手もかるく、と帶の下、小襦引あげちヨコ／＼走り

お千代がいそ／＼と出て來ます、姑が山城屋へ來ていつにないニコ／＼顔で早う戻との事、これも皆男のお蔭と、たゞもう夢心地のやうで、そのいぢらしい姿を見て半兵衛は涙をのみ込み、お千代の手を取つてじつと顔を見守るのです。

『お千代可愛や利發のやうでも、さすがは女こなたは母者人のお言葉を眞實と思やるのか』

と母の機嫌のよいのは一旦は呼かへし、其上自分の手から去る筈、しかし二人は死ぬる覺悟と打明けます、おみねはそわ／＼と歸つたものゝ二人の様子にいらだちます。

半兵衛は血を吐く思ひで

『女房去つた』

と大きく云ひ放ちました、さうして母前涙をかくしてお千代をお立てしました。

へ目まぜに宿の名残の涙、弱る心を見られじと、門口びつしやり見世ぐつたり、鳴るは六つは初夜か、時もじぶんも六々

に胸はわけなき五々八々最期近づくばかりなり。

あかね夫婦は生別れ、流石の母も挨拶なく。

『ア、／＼哀れな事を見るものぢや、せめて半兵衛が罪ほろぼし、御看經でもしてやりませう』

へ善惡でらす御あかしの、外に見る目あらめのたば、中にかくせし一尺四寸、是が冥途の案内者、魂こむる書置箱、地獄へ落つる極樂か、末は白菜の死装束くる／＼つむ毛氈もはや紅の血を見れば死損なひはせまいぞと、一心はすわれども、のうれん一重のあなたには、するどき母が鉦の聲。

半兵衛は書置をおいて、脇差をとり出した。

へ胸にこたへて身もふるひ、踏ど覺へぬし足はかけがねはずす手もわな／＼そつと出でたる門口に。

舞臺は靜かに半廻はしになります。大戸を下ろされた表口、半兵衛はそつと出て來ました。

『サア鰯の口をのがれた、サアおじや』とぐつと手をぎつて引き寄せます。

へと手をとつて、此世を去る、輪廻を去る迷いを去る。

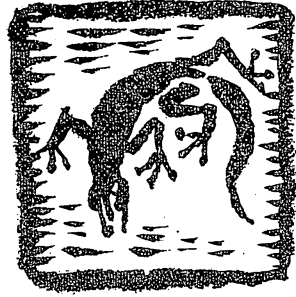
『一切の煩惱も皆去つた、心は境界に隨つて、轉じ變るとやら、そなたも千代を楓樂冥訓信女と改め、われも半兵衛を露秋禪定門と改めやう、もう思ひ置く事はない、但しこなたに望みがある』

お千代はたゞ闇から闇へやるお腹の子の事を歎きます、半兵衛も言ひ出せば泣く事と、今までは黙つてゐたと、二人は今更に聲を上げて前後ふかくの體、その聲がもれ聞へたか、奥からおみの／＼呼ぶ聲がします。

見つけられては一大事と、半兵衛はお千代の手を取つて

へけふは最期の羊のあゆみ、足にまかせて花道へかへり、ふりかへつて我家をふし拜み死出の旅路へと急ぎます、おみねは半兵衛を呼ひながら、跡をおわんとします。

終



かはつた『八百屋』

尾崎久彌

してゐて、剣劇流行の世の中には、懐しいものだつた。その『八百屋』が、私には風変わりだつた。

『宵庚申』に就ては、海音の『二つ腹帯』と比較して嘗て新『歌舞伎』に送つた事がある。でそれ以外で、別に纏まつて謂ふ事といつては、無い。唯、此頃ふと變つた『八百屋』『宵庚申』に據つたか『二つ腹帯』に據つたか不明であるが臺詞の大部分や、甥の太兵衛から『宵庚申』を借りてきたと思つた。を見たから、それに就て述べる。

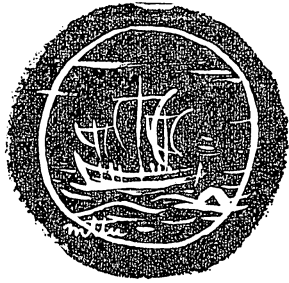
此の變つた、といふのは、自分の浅い経験からで、最近普通の八百屋は、凡て斯うであるかも知れない。私の見たのはつひ今月で、しかも名古屋の場末、無論安芝居であつた。名前も忘れたが、一頃名古屋に在つた源氏節芝居式女優と名ばかりな——芝居であつて、東京下りとは、いかに場末でも人を喰つたものだ。三樹屋何とかいふ男優が一人入つてゐた。前狂言は『奥州安達原』を初から三段目まで。切が八百屋の一幕だつた。拙いものだつたが、それでも丸本の臭が

此の『八百屋』には、半兵衛養父の存在が無かつた。死んだ事にしてゐた。さうしてその妻——半兵衛からは例の姑(養母)が、年がひもなく半兵衛に憂身をやつす、それが爲の葛藤にしてゐた。成程、この方

が、大衆には分り易くていゝものであらう。登場人物は、町役人ども、半兵衛の實兄と稱する侍、お千代、半兵衛、姑とは義理ある中の甥の太兵衛、よくある形の馬鹿だがお千代に味方する大きな小僧、などで、一旦、町役人ども姑に追ひ拂はれてお千代を連れて戻る。と半兵衛が来て、半兵衛の兄も来る。兄は、離縁はならないといふ。姑が、怒り出す兄を奥へ去らしておいて、外聞のため『私が暇を出します。お母さんには、恥をか、せぬ』といふ。喜んだ姑は『本當かい、うそなれば、これだよ』と、赤い繻袴の袖をちらつかせて、袂に入れた出刃を見せる。これで、私は咽を突いて死ぬといふのである。奥から出てきた兄は、これをお前にやるというて、姿は町人でも魂は武士であれとて、家に傳はる刀を渡して歸る。この所、兄のいふ意味は、見物にはつきり分らなかつたが、半兵衛は、これを自盡の意味にとつた。

半兵衛が、お千代を一旦連れ返つて、今度は自分から暇を出すといふので、姑は馬鹿小僧を便にやる。この小僧の役、お座なりだが、大向うに受けた。そのあと、二人きりとなつて、俄かに鏡臺を持ち出すやら、姑は化粧に氣はわく／＼時々、念を押すため例の出入を出す。色々な濡れ模様、見物大喜び。待つてゐると、奥へ引込む。あと、お千代が来る半兵衛に、きつぱり暇を出すといはれて、仰天する。復縁叶つた積りだからである。が半兵衛の眞意を聞いて、自分も死ぬといひ出す。身持ちである事も打明けた。半兵衛の義理に迫つたのを同情し自分も世をはかなんでの事のやうに見られた。と甥が現れて散々姑を搾り上げる。住吉邊で乞食をしてゐたのが拾はれ女中となつた。それが叔父の先妻の死後、つひ後妻に成り上つた。今また身の程忘れて、半兵衛殿への戀慕と洗はれて、流石の姑も一寸弱つたが、反撃中々止めないそのうち甥のため散々打据ゑられる。と甥の情で、灯を消し夫婦を逃がす夫婦走り去る、といふので幕だつたかと思ふ。はつきりは順序だてられてゐないかも知れないが、大體この筋を追うたと思ふ。くどく／＼これを持ち出したのは、姑のお千代虐めに、徹底した理窟を附けてゐた、それに變つてゐると思へたのである。元來此の『宵庚申』なり『二つ腹帯』なりの實説は、舅も健在で、その舅がお千代にである。すつかり舊派の『琵琶歌』であるが、そのため姑が他に預

けた。それが嫁いちめの筋に作り更へてしまつたのだと、傳奇作書の拾遺上にある。がこれなどは、うそか誠か、今になつて何ともいひかねるが、ともかく此の私の最近觀た芝居の『八百屋』は、此の實説に曰く、舅を姑に代へたものである。さうして、姑は、後妻、無論、半兵衛からは、第二の繼母、それもかうした不屈な戀を理由づけるため、姑の前身を、住吉邊の乞食にしたのは、徹底してゐると思つた。近松の『宵庚申』無論此の半兵衛へのわだかまりがある筈はない。海音の『二つ腹帯』にでもである。近松のは、甥の太兵衛を、姑の親身として、それからの半兵衛憎し、そのとばしりのやうにお千代は見受けられる。海音になると、これは近松よりもお芝居で、姑を強慾者になし、お千代より外に、ためになる嫁を貰ふつもり、そのためお千代をいびり出す、といふやうにある。で残る所は、私の觀た變つた『八百屋』の筋だけである。歌麿描くの或る繪本などに、無論此の八百屋を材料にしたのがある。その描寫に於ける姑の顔は單なる慾心づくや甥を思ふ偏頗な心からの憎しみではない。無論一種の強い嫉妬である。それを分り易くすれば、此の姑を寡婦にするも尤もである。芝居の本場へ、緞帳芝居の話をしたのではない。三『八百屋』の比較であつて、此の分り易いが卑俗なものにした『八百屋』も、元はといへば『宵庚申』から來たと思はれるもので、一考の餘地はあらうとの事ゆゑである。



宵庚申の人々

高谷伸

したりして止むを得ぬ破婚を見た千代さへ人が『風下に居るな』と嘲つた時代である千代にとつて三度目の結婚は生命をかけての物であつたのは言ふまでもない。それが姑との感情といふ、理屈の上では何の根拠もなく、事實では百の理論以上に強い力で破られて行くのである。近松はこれを相縁機縁といふ言葉で説いてゐるが、その底に運命の深い影が秘んでゐる。

金が敵の世の中に、とかくつまるは廓の金、それからくる心中は珍らしくない義理に絡んだ三角關係の果の心中も鼻についてきた。その時、享保七年四月五日の宵庚申に生玉馬場先の大佛殿勸進所の門前で夫婦心中があつた。近松にもせよ海音にもせよ題材を把むに敏な淨瑠璃作者が、これを見逃さう筈はない。宵庚申となり、二つ腹帯となつて、殆んど同時に世に問はれた。單に、家庭悲劇の珍らしさの興味だけだつたら、兩者に甲乙の無い筈であるが、近松の宵庚申の方が推賞されるのはそれが近松の最後の物であつたといふだけでなく、藝術的にすぐれた點があるからである。

三度目の結婚が破滅に導かれて行く千代の境遇は、慘いまでにあはれに書かれてゐて、しかもことさら、しい無理がない。今とは違つて『心ふじやうに身代を持ぐすし、た、すみもないやうに成り果て』た夫と飽かぬ別れをしたり『死別れ』

千代の心のあはれを、さらにしみじみ感じさせるのは、親平右衛門である『身の衰ふる程いや増しに案じらるゝは子の身の上、三度はをろか百度千度去られても、去らるゝに定まりし前世の約束と思ひ諦らむれば、悔みもせぬ憎うもない。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らばそれ、指もさせ、子の不憫さにはかへぬぞ』といふ父の慈悲である。さらに父の氣持をよく現してゐるのは、千代の去られたのが半兵衛の意志でないと知れ、共に大阪へ歸ると聞いて『歸らんとしうれしさに、親の病をいかとも言はず喜ぶ顔を見る親の心の内のうれしさを』といふ言葉である。自分が大病であれば、それを見棄て、去る娘なれば責めるのが理屈である。それに自分の病氣を忘れて娘の幸福を希ふ父の心、そこにも理屈以上の情愛が流れてゐる。とかく、理論に理論にと、傾きたがる現代に

較べて、理論以上に力の強い情愛といふものを把んでゐる所に、この作の價值がある。宵庚申の千代のよく書かれてゐるのを書く人は多い。しかし、私はそれ以上、この平右衛門の描寫を推賞するこのくだりを讀む度に、思はず目がしらの熱くなるのを感じ、近松の鋭さは、だと手を拍つこともある平右衛門やお千代の巧さがすばぬけてゐるだけ平兵衛は平凡である。八百屋半兵衛は稻野谷半兵衛とは逆に、武士から町人になつてゐるだけ難役である。この半兵衛に武士意識がでると折角の名作に疑ひを持つことさへある。原作でもこゝは難かしい。平右衛門に責められて切腹しやうとするなどは些かきざにさへ感じられる。武士意識は、寧ろ知らぬ顔の半兵衛の方がよいと思ふ、とはいへ『心中宵庚申』の中の巻上田村は何と言つても傑作である。大體が家庭悲劇であるだけ紙治や梅忠のやうに華やかさに秘ひ哀愁といふ感じは無いが深さは數倍のものがあつてゐる。見るよりも味ふ芝居である。原作は、上中下三段、下に道行がついてゐる。上の巻は當世流行の緊縮政策が濱松の家中に行はれてゐる所に始まつて半兵衛の弟小七郎の男色問題で終つてゐる。半兵衛はこゝで精進料理の巧みな献立を見せるだけで、本筋から言へば、半兵衛の旅行中千代を姑去りにしたといふ、法事のための旅行の説明だけである。中の巻が前に説く上田村、下の巻は靱の八百屋の内で、今度はこの上田村と八百屋が出る譯である。

八百屋での問題は娑であるが、西澤一鳳の傳奇作書拾遺上の巻には『八百屋の姑娑は虫も殺さぬといふ程の好き人なり、伊右衛門といへる老人もあながち大惡人ならねど、兎に角若い女奴にて下女雇女を孕せる事度々にて嫁お千代を口説事甚しければ姑にこれを告ぐれど、まさか男の半兵衛には此事もいひかね年月を過すうち半兵衛は用事ありて遠方へ行、長らくの留守中なれば舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか晝夜とも透間さへあれば嫁をくどく。老婆これを氣の毒に思ひ常盤町の伯母の方へ預け世間の人の問ふ時には速合の惡性よりとはいはれずよんどころなく嫁の身持家風にあはぬ故預けし拯答へけり。』とあつて宵庚申とは反對に伊右衛門が狎々爺になつてゐる宵庚申の姑にしても、帶屋の娑とは譯がちがふのだから、出及庖丁よう研がして置いたなどいふ言葉があつても、やはり相縁機縁を主にして、あくどくない方がよい。お千代の實家も相當富裕な家の方が、かへつてあはれである。近松が海音に勝つた些細な點まで考へれば、どの心中にも金の話のつき纏ふ中に、この作の貧乏けのないのも逆手の成功として擧げることもできる。無理な責道具はあれば邪魔になる。道行思ひの短夜は、八百屋だけに青物づくしで書いてあるが、道行行としてはやはり曾根崎心中に及ぶべくもない。何といつても、この戯曲の價值は、上田村で動かすことのできない確固たる位置を保つものである。

お千代半兵衛の

墓を尋ねて

南木 萍水

『心中宵庚申』で知られてゐるお千代半兵衛の墓は何處かにありさうなものと、或る物識りに尋ねて見たが、一向に便りがな
い、處かふと濱松歌國の『攝陽奇觀』の享保七年の條を見ると

四月五日 八百屋半兵衛お千代心中

宵庚申の夜、生玉馬場先南都大佛勸進所にて死す

法明 露秋禪定門 八百屋半兵衛 (廿七歳)

風覺冷薫信女 同 女房千代

辭世二首

いにしへの捨はや義理も思ふまし朽てもきえぬ名こそおし
けれ

はる／＼と濱松風にもまれ來てなみだにしづむざ、んざの

こと

近松氏の戯文心中宵庚申、紀海音の心中ふたつ腹帯、かぶき

狂言八百屋獻立などにて世俗よく知れり、新うつほ油懸町の
八百屋今に相談す、墓は八百屋伊右衛門、旦那寺下寺町稱念
寺にあり
と記されてゐる。

下寺町稱念寺といへば、下寺町の北の端から二軒目に當る寺
で、豫てから八百屋の婆の墓があるといふ噂を耳にしてゐた。

それで、もしやといふ念が浮むので調べて見やうと思つた
が然し、前記の法名は確實なものか、どうだか、この法名の出
所は、近松の宵庚申の最後の道行の中に、半兵衛の文句として
『そなたも千代といふ名を風覺冷薫信女と改め、我も八百屋半
兵衛を露秋禪定門と改め、息のあるうちより、早やなき人の數
に入れば』云々と書かれてあるので、歌國は獨合點で書出した
ものではあ

るまいか、
但し辭世の

二首は、海
音の二ツ腹

帯にも近松
の宵庚申に

も歴然と書
かれてある

から、これ



は正しく遺文と信じてよい、すれば法名の方も或は………と疑問に裏まねながら、兎に角探究するに限ると思ひ立つた。

珍しい秋晴れの午後、下寺町で電車を降りた明日は彼岸の中日といふ、どこの寺方でも相当忙しい書入れ日であつたから悠長な探墓なんかには或は暗剣殺かも知れないと思つたが、まゝと稱念寺の門を潜つた。

果して玄關には無數の老幼男女の下駄がづらり、本堂では已に讀經が濟まされたと見え取片付にかゝつてゐる同行衆は座敷の方で説教を聴いてゐる最中、無斷で本堂脇を裏手の墓地へ出た。

と見廻すと、形さまの墓が縦横に或は高く低く、配列されてゐる中を縫ひつゝ、香煙の残る匂を嗅ぎながら、もしや前記の法名にも出逢ひなばと、のみ取り眼で探墓したが、一向それらしいものを見當らない。

突當りは見上けるばかりの生玉の石垣で、その下には赤い萩の花が散りこぼれてゐた。その石垣に沿ふた小高い一劃には、無數の無縁石塔が一團となつて、それがだん／＼に高く、ほんの頭角だけを露はして建てられてあつた。



無縁墓、この中だ、定めてこの中かもしれないと直覺したものに、到底文字が讀め相にもないので、諦めて踵を本堂へかへした。

改めて住職に面會を求めると、當年六十二歳の老僧、恰度説教を終つて、法衣を脱いでゐる折柄、快く逢つて呉れた。そしてこんな話を聽せて呉れた。

私は小僧の時から約五十年を、この寺に過してゐる。先住職が芝居好であつたから、よく小供の時にお供をして竹田の芝居を観た。或時、八百屋の場で稱念寺と書いた提灯を持つて登場した役者のあつた事を臆氣に覺えてゐる。だから八百屋の婆さんの墓は無論この寺にあつたもので、小供心にその墓の格好も頭に残つてゐるが、さあそれが今では無縁となつて、あの無縁墓の中に入つてゐる筈だ、

今どれかと一寸指摘する事は困難だが、ある事は慥にある。八百屋の遺族は、明治十五年位までは居りました。谷町の内安堂寺町南へ入つた東側で、三谷仁助といつた大工でしたがこの人の宅へ毎年盆になると住職の供をして行つたので覺えてゐる。この遺族もやがて行方知れずになつてから、この墓も無縁となつて仕舞つた。古い過去帖はあつたが、先年この

上の生玉焼けの時に火が近かつたので、壇家の人々が荷物と共に持出して呉れたが、それッ切り何處へ紛失したものか、行方不明、それで古い事は一切分らずに閉口、位牌ですか？それに就て不思議な話があると聲を落した。

昨年丁度今頃、或晩に私が寝てゐる枕元に十二三歳の童子らしい骸骨が立つて、頻に私の手を握つて起さうとするので、右の手を延べて取放さうとした時、夢が醒めた。妙な夢だと思ひながら二三日すると、玄關と座敷の取合ひの上の方から雨が漏るやうなので、早速大工を呼びにやつて調べさせた。大工は天井裏へ登つて蠟燭の灯で向ふを見ると、黒い

團りのものが置かれてあるので、不氣味になり私へ知らした私も初めはぎよつとしたが、よくよく認めると、それはこの寺始まつて以来の位牌が堆高く積まれてゐたのであつた。前夜の夢を思合せて、この位牌を天井から取出して埃を拂ひ、現に本堂裏に安置してある。さあこの位牌の中に尋ねてゐられる法名が出て来るかも知れぬ、位牌があつたとすれば石塔もある筈だが、これは一寸簡單には行き兼ねる。何しろ彼岸で忙しいので、これが済んだら、ひとつ機縁として調べて見ませう。

こんな話で、私の張つてゐた弓蔓は多少たるんだが、然し、一縷の望は絶えてはおらぬ。果して前記の戒名の位牌が出て来るや、否や、この原稿を書くまでは消息を得ない。

八百屋半兵衛の養父先は新うつほの油懸町、現在の何處に當るかといふと、明治の町鑑によると、

信濃橋通り一筋北の町を西儀堀半丁西より、西は永代濱までとあるから、市電信濃橋の交叉點の北西に當る譯である、

八百屋の遺族はこの町に永く住んでゐたものらしい。文政十年に死んだ歌國が、現に今に相談すと註を入れてゐる位だから天保以後或は幕末まで永住してゐたには相違なからう。

住職の話による末族が三谷仁助、この三谷の遺族が何處かに歴然としてゐれば、或は何等かの便を得るかも知れない。

「ギブス」固煉齒磨



本品を使用すれば幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出来、
何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであります。毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます。
本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

- 大形 形 壹圓 金七拾錢
- 大形 中味 壹圓 金六拾錢
- 小形 形 壹圓 金四拾五錢

ロンドン パリス
デ・エン・スト・ダブリー
日本代理店
ギブス株式會社
株式 横山 商店
會社 東京豊後町三番地

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

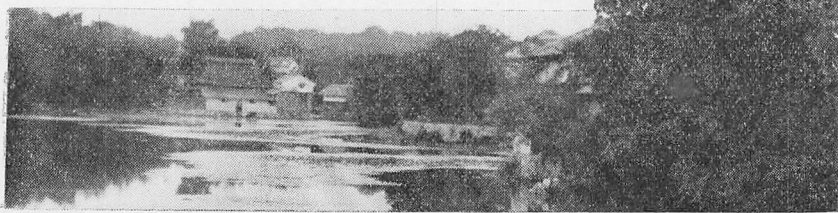
電話土佐堀

(44)

長

三四四
〇九九
八四四
三一〇
番番番

説 實 て就に申庚宵中心

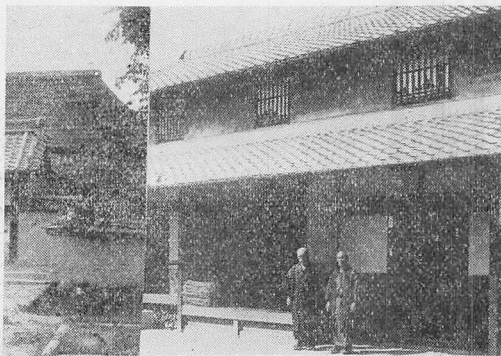


院本に、劇に、近松作の『心中宵庚申』は既に皆さんの熟知するところでありますが、事實物語としての『心中宵庚申』は、餘りにも知られてゐないと思ひますので、簡単にその概略だけを申上げておきます。

お千代といふのは、當時の山城植田村（現在京都府相樂郡稲田村字植田）島田平右衛門の二女として、生來非常な美貌であつたと言はれてゐます。この島田といふ家は昔から妙に男子を生んだことはなく、殆んど養子を以て家名をついて來たので、今、その昔の島田家の分家である島田喜七氏の家も代々養子になつてをります。お千代の姉といふのは、實の姉妹でありながらこれは又どういふわけか大變な醜女であつたと言はれてゐます。所で、この容貌の相違はその心にまで噴ひ違ひを來

したものの、姉は至つて嫉妬深い、慈悲の心も知らぬ我儘なのに引かへる。妹のお千代は温順そのものゝやうな性質であつたさうです。この二人の性格の相違、容貌の相違から常に姉妹の中は面白くなく、お千代はあらゆる苦痛をも堪へしので、そのため身心共にすくなく、とかく病弱がらんであつたやうであります。このことは、両親としても苦勞の種であり、姉よりも前に、お千代を他へ縁づけさせんとしたけれど、貞淑なお千代は姉に先だつて縁づくことを承知しないので、やむ無く両親も姉に養子を迎へることになりました。元來島田家は太陽し屋として、資産も當時の近郷近在に並ぶものゝない程有してをり、一方庄屋として仲々巾をきかしつゝゐたものであります。

養子を迎へると共にお千代を縁づけさせんとしました。だが、どうも縁の遠いものと見へて、其縁はあつてもうまく行かず、やつと縁づいたと思つても間もなく歸つて來る。それが三度にも及ぶので、村の陰口にもものぼる。姉はそれ見よがしにつらくあたる。お千代はもとより両親もほとほと困じ果てゝをりました。傳へ聞く所によると、お千代がかく其縁に恵まれなかつたといふ裏面に、彼女が強い神



家の門衛右平田島

經病に煩はされ、且婦人病に悩んでゐた爲とも言はれてゐます。

四度目に縁づいたのが半兵衛の許であります。この時は、全くお千代も死を賭して家を出たさうです。事實もあるべきこととせう。半兵衛との仲は至極圓滿でありましたが、御承知のやうに姑との間が面白く行かない。このことに就ては、一説には男がお千代の美貌に迷つて横戀慕をしたため、お千代は絶へず苦しんだと言ふ様にも傳へられてゐますが、色々な點を綜合して、かういつたこともあつたかと思はれます。劇で見ると、姑は悪人になつてゐますが、ほんたうは今ほとけと言はれた程温しい人であつたやうであります。

お千代の死をえらんだ原因は、これらの點から考へて、實家の兩親の許には歸れず、姑に對しては顔が立たず、夫に對しては申譯がない、しかも男からは絶へず、激しい要求がある。應ずることは、餘りにも自分の心が許さない。應じなくては益々家内が騒がしくなる。事ここに窮して遂に夫に苦しい事情を打明け、享保七寅の年四月宵庚申の夜生國魂神社の境内で親子三人が短い一生を終つたのであります。

尙劇では、二人の間に子供がありませんが、事實は子供(三歳といはれてゐる)があつたので、來迎寺の境内にお千代半兵衛の骨と共に子供れの骨も埋めてあります。(半兵衛の名戒は通月融心信士、お千代は聲應貞現信女、子供は離身童子)

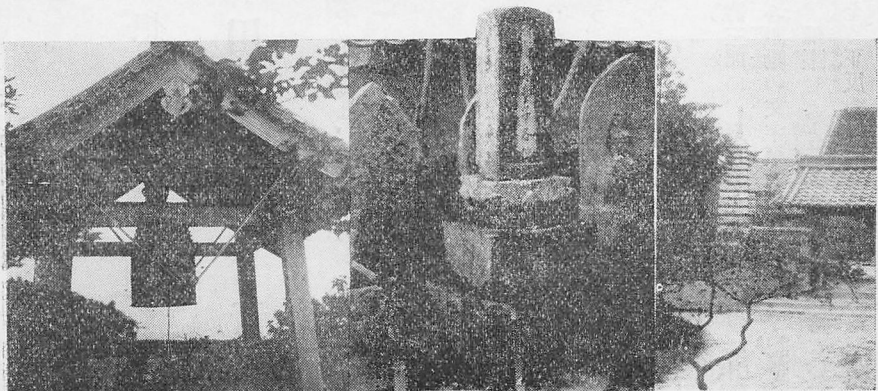
お千代半兵衛の石塔と神經病 一つの頃か分りませんが、お千代が神經病で苦しんでゐたので、この石塔をかいで、煎じて吞むとよく利くといふので盛んにかきに來られた爲、今日では元の石塔はまるで石のしんばかりとなり、小さくなつたので、これを中に入れて祀り、その代りに別に石塔をつくつてお祀りしてあります。

お千代鐘について

千代の死を悼んで、近在の人々が各々喜捨してやがて鑄造されたのがこの鐘で、餘韻が靜かに長く響いて行くあたり、言ふに言へぬ哀感を覺ゆるものです、恰もお千代の靈魂が村人の美はしいまごころに應へるかやうに鐘の音は女性的な音色であります。

毎年の大晦日の夜に百八つの鐘を打ちに村中の青年が集りますが、この大晦日の夜にお千代鐘を聞くと、いかな借金取でも、靈感に打たれて、そのまゝ立歸るといふ話です。

墓のある紫雲山來迎寺は大軌電車西大寺接續の奈良電車沿線新祝園驛西南三丁にあります。



鐘代千お

墓の衛兵半代千お

寺迎來



『鴈治郎の眼』を語る

——大阪劇壇に對する感想——

富田泰彦

——お、思索の秋。お、追憶の秋、彼れほどに、いつくしんだ歌舞伎の夢は、日一日と消されて行く……、そのなかに鴈治郎の眼のみは、不斷の春のやうな魅惑をもつて、猶輝いてゐて呉れる。私の感激に、打たれた魂も、いつか甘美な酒壺の底から、跳ね上つて來た。お、成駒家の眼！お、歌舞伎の眼！！

×

——ものの、魅力を感じない人ほど、悲しむべき憐れさはない。『人生は愛にして、その生命は精神也』とゲーテも叫ぶ。精神の貧しき者には、眞の藝術價值を精算し得る處か、永久に觸るゝとは出来ない。『歌舞伎は我國の傳統藝術である』と云ふ人。『成駒家の芝居は、矢張立派だ』と云ふ人。『映画は世界の第一藝術である』と云ふ人。『活動は譯もなく面白いや』と云ふ人。各自に觀照の標準や尺度も違ふから止むを得ない。

——だが、金色に耀やく日輪は、誰にも明るい——魅力あるその瞬間、『お、日よ』と、何人も歡喜に、燃え立つ心を抑へるとは出来よう……？。

×

『若し鴈治郎の持つ魅惑の眼の喪ふた時には、諸君が一鉢何うする』斯う考えたげでも、眞の好劇家ならば、もう既に心は暗然と打ち顫へてゐよう。桔梗のやうに、濕つほくうなだれてゐるに違ひない。

×

——第一劇場の坂東壽三郎に、東京の文士達が贈つた引幕に『脚下を見るな』と云ふ激励の文字があつたやうに、記憶する蝗のやうに奔放不羈に、飛躍せよと云ふ意味かは知らないが、『鴈治郎の場合』は、全く正反對に、しつかりと大地を踏みし

めてゐて貰ひたい。否俳優ばかりではない。観客も、無論興行者も『脚下を見直して貰ふ』必要がある。

×

——『脚下を見よ』若しくは『脚下を見直せ。』と喚びかける私の言葉は、常に劇壇のみではない。日本の現状！、それ自體が、文化的危機に瀕してゐるのではないか。ジャズと云ひスピードと云ふも、結局は『混濁』と『拙速』との薄ッぺらな文化ではあるまいか。

——日本人の感覺は、決してさうした粗雑なものでは、満足出来ない。私達の祖先は、もつと教養のある、含蓄のある藝術に育まれて生長して來た筈なのだ。動くものならば何んでも鷄呑みにすると云つた藝ではなかつた。靜的な能樂は、猶國粹藝術として、嚴存してゐる心強さよ。

×

——歐羅巴の藝術は、既に一步古典へ還れと、廻はれ右をしてゐる時、日本では新興劇團の新しい旗幟とする、左傾劇を上演して、暴力團に怒鳴り込まれたと云ふ椿事が、昭和時代の東京劇壇に惹起されてゐる。是れが村山座ならば、差しづめ、幅隨隨長兵衛や、水野十郎左衛門などが飛び出しかねまじき、昔の芝居情景なのだ。是れをしも時代感覺に觸れた演劇だと云ふのなら、餘つ程觸れてはゐまいか……、慥に精神に異狀が

ありすぎる事實だ！

×

『……………で一鉢お前の結論は何處にあるのだい。』
『結論？ 判つてゐるぢやないか、鴈治郎の持つ魅惑の眼さ。彼の眼の開いてゐるうちは、歌舞伎は決して、暴力團や異端者などに一指だも觸れさせて、たまるもんかい。』
『は、ア、ん、では鴈治郎の眼は、今の歌舞伎を支持してゐるでも云ふのか……………？』
『當然さ。端的に云つて終へば、鴈治郎は歌舞伎の最後の人なのだ。』

×

——その歌舞伎を支持する最後の人たる、鴈治郎を我が大阪に持つてゐる、郷土的偏見を捨て、も、何れだけ大阪の好劇家の生活を豊にしてゐるか知れない。是れは強ち今日の問題でなくとも、明日への問題として大阪人は省察しなければならぬ

×

——今日猶團菊を神様のやうに、尊敬してゐる東京人なのである。その團十郎にしても、その菊五郎にしても、生前、悉く、好評だつたとは云へない。随分穿つた半疊も入つてゐる。それでも東京人は、東京の、否我劇界の誇りとして、常に兩優の藝の宣揚にと努めた。斯くて團菊の天才的ひらめきは、いよく、

周囲を壓した。全く最負の恵みの有難さは——。』その口上招きも、決して空文ではなかつた。

——それなのに、大阪劇場は何うか、その團十郎をも凌駕せん實力を持つてゐた中村宗十郎は、今やその聲價を追慕するものがあるか、先代多見藏、先代延若、瑠寛、雀右衛門等等、明治初期の名優は……。

——私のイメージは、こゝで蠟涙のやうに、重たく落ちた。さうして、ほやけた。

——元祿の昔近松を生んだ大阪！、昭和の今に鴈治郎の生きてゐる大阪！、近松の文藻は近代的テンポにも、禍ひされずに猶恒久性を持つ。近松役者としての鴈治郎の舞臺は現實のものとて、幾度となく藝術的機縁をつくつては洗練されて行くさうして歌舞伎の夢の彩は、久遠の未來へと織り出されて行く……。お、鴈治郎の眼は、その傳統の羅の中に微笑みつ、交錯して居る。

——『大鑑』の佐々木盛綱に『宵庚申』の八百屋半兵衛に、それから何……？、何……？。

——鴈治郎の眼のあらん限りは、盡未來までも續いて可い。續かねばならぬ。さうして續かせねばならぬ歌舞伎愛好劇の眼

と何處まで續く……。

『アラ!!』と笑つては不可ない。理智で笑つてかゝるとは止めよ。傳統と古典との情趣に、心から融け合つた眼と眼とを合はして、傍見をしてはならない。

——お互は日本人なのだ。而して大阪人なのだ。その自覺の下に、歌舞伎を觀賞し、鴈治郎を最負にするとしよう。

——秋の靜寂は、いつか私達の心境にも迫る。

——遠き影を追ふ人々の靈魂も、もうジャズでは踊れまい。それは飽滿したのではない。餘りにも生命がなさすぎる一瞬の興奮？——『感激』ではない魔藥の壺を捧げる無智な享樂者よ。

——お、鴈治郎の眼！、お、歌舞伎の眼!!

——而して好劇家の目ざめる秋に……。

十月の浪花座第一劇場

足輕三左衛門の死

吉田 絃二郎 作——六場

第一幕 第一場

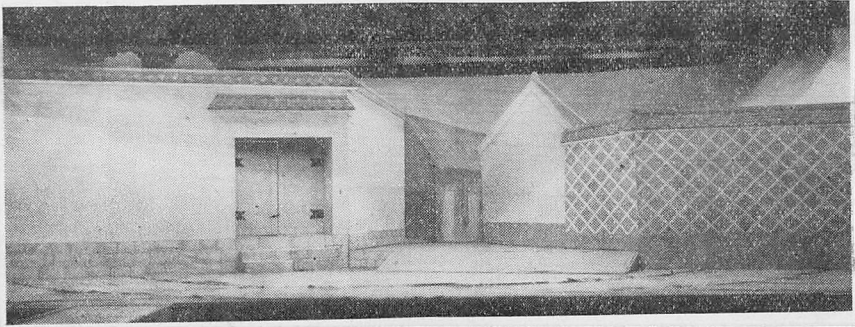
兵藤三左衛門の家である。
京都から歸つたばかりの三左衛門は旅の疲れを盡して休めて居る。母おしんが謡曲扇で蛇を追ふ。其處へ隣家の娘おたねが、重箱に入れたものを、三左衛門の亡父の命日の爲に持つて来る。
入れ替つておたねの父傳七郎釣竿をかついて黒鯛釣りに誘ひに来るが、三左衛門は應じない。
『あなたはいつものんきです。今にも天下がひつくりかへらうと云ふ今日、私達にはとても波の音など聞いたら居られない……』と云ふ事から話は深入りして母

おしんの老いたる心を戦かせる様な言葉が出される。
『感情や私情に捕はれてる場合ではありません』
其爲には大恩ある稻垣先生をも犠牲にして顧みない彼である。
『だが人間が果して理窟だけで動くものだらうか。存外感情の爲に動かされはしないか。』
傳七郎は剣をうつ。
『時代は波だな。其波に乗つて皆が動いて居る。それがどんな結果を持ち来すかは誰も知らぬ……』
一抹の不安な聲を残して傳七郎の老ひたる影は海の方へ去る。夕闇が迫る。

二人の同志が来て、三左衛門を伴つて去る。

同 第二場

濱の臺場、火薬庫内である。
蠟燭の灯。
グロテスクな影を投げる四五本の柱。
数名の足輕達が凝議して居る。
斬奸狀が讀み上げられる。
連判……
奸賊を斬るのだ。
稻垣森之進初め佐幕派の巨頭を斬るのだ。
泣いて馬糞を斬るのだ。
泣いて馬糞を斬るのはいい、泣いて馬糞を斬るのはい、がいつたい稻垣森之進は果して佐幕黨なのか。
先刻から、水に浮いた油滴の様に一人ぼつりとして居た遠山真吾は闇い聲で云ふ。
大義親を滅すや黒白を論じて居る場合ぢやない。實行、實行、理由は後でつけられる……俺にはお前達の云ふ事が判



らない……

遠山は一人限り無く寂しい。

外は雨風が劇しい。

偵察の同志が歸つて來た。

期は至れり。

人々は劍を抜いて寢刃を合せた

心は躍る、しかし。

遠山は一人寂しい……

同 第三場

闇い邸町。

二三の月をもる灯が沈んで居る

家老稻垣森之進の首を斬つた三

左衛門等は夜を秘かに逃れて行く

……

稻垣の遺兒、兒太郎が齒嚙みし

て後を追ふ……

第二幕

京都桂川の土堤である。

今朝、御門の戦ひのあつたと

云ふ日、大勢の避難民が兵火に紅

い京都の空をあふいで戦ひて居る

銃聲。

群衆が四方に散る。

敗軍の長州兵が隊伍を亂して行

き過ぎる。

三左衛門と遠山とが出る。

戦ひ疲れて居る。

遠山は益々、當初からの疑ひに

蟲ばまれて居る。

三左衛門は尙其希望を捨てない

——さ、早く行かう。馬鹿な事

を考へないで本隊と一緒に今夜淀

を下つて大阪へ行くのだ。

——俺はお前が羨ましい。お前

は何時迄も夢を見て生きて居られ

るのだ。あの尊い三ツの首を鴨川

に捨てられて顧みもされず、銃を

持たされて殿りを命ぜられて、何

一つ報はれもせず十七人の同志の

大半の生死も判らなくなつた、今

尙お前は自分の夢を信じて居られ

る。

これから長州に行つて足輕並に

こぎ使はれてる内には槍の一本も

立てさせるつもりだらうが、俺は

もう貴様にはだまれぬぞ。貴様

の夢のお相手は厭だ。

——ぢやあお前は俺一人に責任

をかさうとするのか。

——さうぢやないか。十六人の

者はみんな貴様の夢の犠牲になつ

たんだ。

——何ッ。

三左衛門が刀を抜く……

長州の一隊が来る。

二人は其後から従ふ。

流弾、遠山を貫く。

一度去つた三左衛門はやがて再

び戻つて来る。

遠山はそれと知ると狂つた様に

叫ぶ。

『寄るな。寄るな。貴様は俺を殺

しに來たんだ。今朝から傷ついた

味方の兵が幾人殺されたか俺は知

つてぞ。敵に味方の機密を知ら

れない様に殺しちまふんだ。貴様

も俺を殺しに來たんだ。あの隊長

にいひつけられて來たんだ。大め

長州の大め。大め。

三左衛門は遠山に飛びかゝつて

舊友の首を締め、其首を斬つて袂



に包む……

京の空に兵火が黒い……

第三幕 第一場

兵藤三左衛門の家。
色づいた桐の葉が落ちる。

蟲が鳴いて居る。

おしんは六年の時日めつくり
増えた白髪も重たく不變相絲
繰り車をまはして居る。

今宵もまた黒鯛つりに行きがけ
を傳七郎は立ち寄つて三左衛門の

うはさや、劔術の稽古ばかりして
居る稻垣兒太郎初め納所新九郎、

熊野四郎五郎等のうはさをして去
る。

其後に、今は簀を取つたおたね
が、赤子を負つて話に来る。

三左衛門の亡父の長崎土産の蘭
薬が、死を暗示する不安な會話の

中心となる。

おたねは聲をひそめる。

——それに小母さん。此頃から
時々、此處いらを二三人づれで見

廻つて居る人達があるのを御存知で

すか。

——えゝ知つてますよ。此間も
何か大きな物音がしましたので行

つて見ますと黒い覆面をした男達
が七八人裏の森の下にしがやんで

居るではありませんか。

闇い不安が二人を包む。

子供が眼をさますので、おたね
は寝かしつけに歸つて行く。

夕闇が迫る。

道中姿の三左衛門が秘かに歸つ
て来る。

——よく達者で戻つて来て呉れ
ました。

おしんはいそゝと酒肴の用意
をする。

夢に破れた三左衛門との間に寂
しい話が交はされる。

疲れ切つた姿である。

傳七郎が現れて、おしんを呼び
出し、既に手の廻つた事を知らせ

て去る。

何も知らぬ三左衛門は、奥の寢
所から水を呉れと云ふ。

——あゝ、今直に……

おしんは、家の前後に迫つた数
人の黒い影におびへ乍ら決心して

先、刺薬を水に注いで薬を入れて
奥へ入る。

刺客等は屋形の前後に、物の怪
の様に立つて動かない……

同 第二場

既に薬は利いて居る……

二人は意識を失ひかけて居る。

母子は眠るがやうに安らげく。

永きねむりの夢を……

秋は深く落ちる木の葉の物音、
總てにあはれを偲ばせて行く何處

からともこくおたねの子守唄が聞
える。

——おたねさんですか……本當
におたねさんだ……

——おやすみなさい……

——お母さん……

桐の葉が落ちる。
降るばかりの月光の中に覆面の
武士の拔身がきらめく。(幕)



十月の浪速座第一劇場

心中みつ鏡

門脇陽一郎作——三場

第一場 街道

中川七太夫と其娘織江とが人を待つて居る。

酒の上の悪い七太夫が、酔に乘じて同役に興へた拜領の太刀を美男の家臣白石武平をして奪ひ返しにやつたのを待つて居るのである。『彼奴の事だから心配はない。何人居やうと無事、必ず切り抜けて来る男ぢや』

『しかし、父様。何も私をおやりになる約定はなさらずとも……』織江は輕身の彼の妻になる事は思つても厭なのである。

『心配する事はない。人を殺めれ

ば土地には居られぬ身體だ』七太夫には心構へがあるらしい。武平は命を果し、希望にもえてかけて来る。

『わしは満足に思ふぞ』七太夫は喜ぶ。

『私も満足でございます』武平は織江を見上げる。

『したがり目は禁物、向ふ三ヶ年間は、決して立ち歸るな。これを當座の路用として身をかくせ。何、織江の事なら心にかけるな。一度そちに興へた上はそちの妻ぢや。例へ三年が五年でも、必ずそちの歸りを待つぞ。これ織江、武平に

何とか言へ』『武平様、嬉しう存じます』役目を果した武平は、織江の此の一言を何よりの恩賞と、後髪をひかれる思ひをして故郷を後に去つて行く。

第二場 中川邸

三年の後である。

中川七太夫は、もと刀を奪ひ返す爲に使つた武平の事は殆ど心にもかけて居ない。其機嫌として先づ、武平の父親に詰腹を切らせて殿の前をすませた男である。今では娘織江に、志文右衛門と云ふ聲を迎え二人の間に一子さへもまうけさせて居る。

丁度今日は孫の誕生祝ひの宴をまうけた庭で、今、招かれた賀志文右衛門の同役達は、宴後の席で碁を圍んで居る。

一人、赤井は、三年前の行轍を發きたて、高々と罵る。

『家來の忠節を盗む奴ぢや。頼んで残して行つた其父親に詰腹を切

らせる不いさ者だ。武士の風上にもおけぬ奴を父ぢやと仕へる貴様志文は、我々の面汚しだ』七太夫は醉顔威猛高に現れる。一座は白けて、人々は赤井をなだめて去る。

七太夫の息主水は、再び盃を手にした父をいさめる。

『三年前の不首尾を再びお繰返しなさるお心意か。きつぱりとお斷ちになつたお酒を、どの顔で召上げるのか』

娘織江は其間に入つて父をとりなすので主水は怒つて去る。

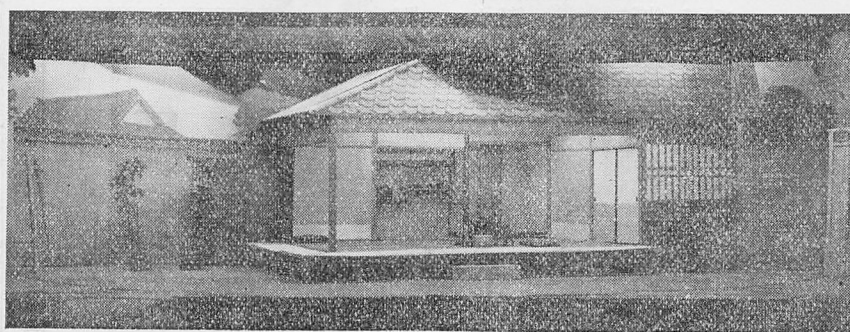
三年の追放から立ち歸つた武平が入つて来る。

父の憤死を知り、主人の違約を知つた彼は恨み骨髓に徹して居る

『わしはお前を信じて居る。そちは忠節を賣物にする様な人間ではない』

七太夫の迷口上に對して、武平は決然と叫ぶ。

『賣物にはしない。が、代償をも



とめる」

彼は抜き打ちに七太夫を斬る。

織江が来る。

志文右衛門が来る。

二人共に斬られる。

主水が来る。

『親の敵……』

『あなたにはヤツぱり私は敵なの

か……うたれて上げませふしか

し三日の猶豫を願ひたい。三日目

の夕、丸山の旗亭でうたれて上げ

ませふ』

武平は言ひ捨てると風の様に其

場を外して去る。

第三場 丸山の旗亭

櫻が咲いて居る。

おぼろに物悲しい春の宵である

うたる可き生命を、三日延ばし

て逃て来た武平は、最後の一時を

一管の尺八に思ひをこめて奏して

居る。

彼の情婦おゑんは、冷たい武平

の情を恨みつらみする。

『どうでもあなたは一人で死なし

やんすか』

『うむ、一人で行く。俺丈けの命

ぢやないか』

『厭ぢや。厭ぢや。妾もあなたの

後を追つて死にます』

『馬鹿な事を云ふな』

尺八の音はふるへ乍ら、ハラ

／＼と散る櫻の花の間をぬつて、

おぼろの闇の向ふに流れて行く……

おゑんの心はつらい哀愁にひし

めく……

驕音。

主水を先に、数人の同志が斬り

込んで来る。

『待つて居た、さ、うて』

しかし主水は刀を向けて叫ぶ。

『尋常に立ち合へ主水も武士だ。

抜け』

白刃はひらめく。

影は飛ぶ。

花は散り、春の氣は亂れる。

武平の水際立つた切先に、群が

り寄つた刺客は端からば／＼と

斬り倒される。

亂闘。

火華。入り亂れた中で、おゑんは一太

刀あびてばつたり倒れる。

ひつそりした。

深い沈黙だ。

刃こぼれた刀を持つて武平は

おゑんの側に歸つて来る。

『しつかりしろ』

『あ、武平さん』

『大丈夫だ。皆やつつけた。見る

刀がのこぎりの様になつた』

血刀をすかし眺めるおゑんの微

笑の上に花が散る。

『もうとても駄目だ。此深手では

覺束ない。よし。道伴れにしてや

らう』

『では伴れてツて呉れますか』

『うむ、望み通りに……』

花が散る……

花が散る……

二人は微笑んで見交す。

おゑんの胸許にかざした武平の

切先がチラときらめく……

十月の浪花座第一劇場

馬

の

背

長谷川伸作——二場

第一場 仙翁嶽の裾

秋色に彩られた深く険しい山を思はせる。

小猿が一匹、チヨコナンと枝にとまつて居る。老樵仙藏が其後に笑ひかけ黙々と行き過ぎる。

静かな山景色である。

此静寂を破つて米澤藩から送られる夫殺しの女囚を受け取りの爲仙藏役人三名が小者並に馬方清六に送り馬をひかせて奥の路山を出て来る。儀山公の詠歌

山間の霧はさながら海に似て
濤かと聞けば松風の音
の事から、今通つて来た踵合せ

の難道を話し會ひ、今受け取らうとする女囚の品定めに移る。

『死刑囚なんぞと云ふものはとかく風評倒れの醜女だ』

『さらし者を見たが、ついで良い女は無かつたもんだ』

『さう云ふしたゝか者だから、若しや逃走でもされては役目の落ち度といふもの。御同役、援からぬやうにしませふ』

此時彼等の心遣ひを高らかに笑ふ者がある。見ると、馬子の清六である。

『お役人方、お武家様にも飛んだ御苦勞がございますな。其から見

ると身も軽い心も軽い私等風情は一向に呑氣なもんでございます』
『しかし、此囚人を取り逃したとなると、貴様もやはり、お仕置きを逃られぬぞ』

『なあに、それに援かりがありますものか。いざとなつたら身體一つで突つ走りまされ。もとゝ此身體一つが資本なりや、これ以上出世の希望も無い私等に何の難作があるもんですか。此馬だつて借り馬だ。首をそつちへ向けて、尻を二つ三つ引つばたいとけば一人でのこゝ手前ンちへ歸つて行きまされ。いやなにこれや冗談ですなあに人殺しだか何だか知らねえが、荒縄で馬の胴中にがんじがらめに縛りつけときや、まさか馬語共逃げ出しもありませんめえよ』

『貴様にも似合はない、それやいゝ考へだ』
『なあに、これで昔は度々御手敷をかけたもんで……へゝゝゝ囚人の身になつて逃げ道を考へ、其上

で役人の身になつて其逃げ道を封じる工夫をすれば、なあにこんな事あ譯ありませんよ』

それで、女的事から地道に立ち戻つたと云ふ清六の昔語り緒がほぐれかける時、花道から米澤藩の役人が囚人籠を守つて出る。夫源右衛門殺しのおたきは、籠を出る。と大地へぐつたりと座つてしまふ。

其凄艶は人々を驚かせる。

『そんなに急がないでお呉れ。何ぼ殺される女にしても、少しはいたはつてやつてお呉れよ』
馬にかき上げやうとする小者等を尻目にかけて彼女らは仲々動かうとしない。

『殺された者が苦しいか殺す方が苦しむか。お前さん方には判るかい』

さうした哲學めいた事も云ふ。
『駕籠を馬に乗り替へて、其次は娑婆を地獄に乗り替へるんだねえ……へん、殺したくつて人を殺す

もんか。殺すやうには誰がしたか……」

馬に乗せられ胴中に縛りつけられる迄氣付かなかつた清六を見るとおたきは急にハツとして叫ぶ。

『おや、お前は……』

『潮更、知らねえ女でもねえが俺はお給金かせぎの送り馬が取り口だ。さ、しめるぞ』

『あ、痛い。畜生』

清六は平然と口を取つて行く。

一行は、おたきの狂つた様な叫びを守つて、山路の奥へ、奥へと分け入つて行く。

旅人二人其道を出て来る。

急に奥が騒がしくなる。

『それ、今の一行に異變があつたんだ。かゝり合ひになつちや話らねえ。早く行かう』二人は去る。

米澤藩の役人があはてゝ駆け出して来る。

おたきを乗せた馬諸共、清六が踵合せの谿谷へと落ちたのである

第二場

踵合せの谿谷

馬は死んで居る。着物を引き裂きすり傷だらけのおたきと清六が居る。

『可哀想に、馬は死んちやつたねえ』

『第一の天運だ。さあ、後の運試しだ逃げたる處迄逃げやう何を愚圖くしてゐるんだ。こんな處に何時迄も居たら、また奴等に取つかまるぞ』

清六の勢ひに引きかへ、おたきは益々冷たく落ちついて行く。

『逃げたけりや、勝手に一人て何處へでも逃げてお行き。妾あ助けて呉れとお前さんに頼みやしない』

『頼まれはしないさ。しないがお前に此罪を犯させたのは此俺だから生命を投げ出して一か八かあの崖から落ちて来たんだ……』

『お前の後生を安樂にしたに爲に切れない心を振り切つて江戸へ行つた。俺なんだが、それがこんな罪のものにならうとは思ひもしなかつた。さあ、逃げて逃げられ

ない事はあるまい。行かう』

『妾は生命を粗末にして居る女だよ』

押問答の末に、大方役人が投げたであらう小柄を得物に、囚人の女と馬方とが、此深い谿間で情死しやうと云ふ事になる。

仙藏親子が通る。

其後で、一たんかくれた叢から轉がり出た清六は既に咽喉をきき切つて息も絶え絶えである。

『よく思ひ切つてやつたね』

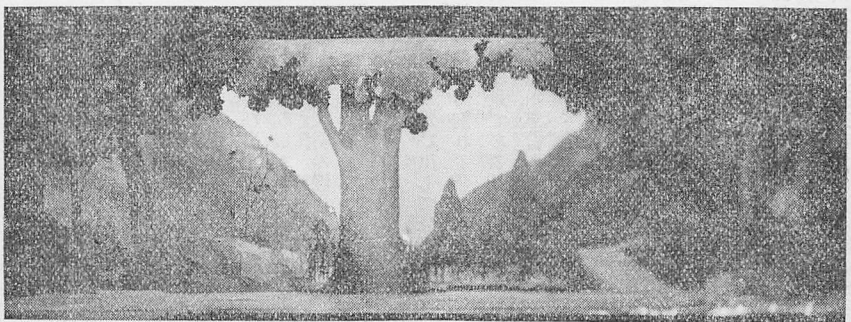
おたきは叫ぶのである。

『だが其双物はお前一人て持つてお行き。妾はお前と一緒に死ねないのさ。ホ、ホ、捨てられて江戸に逃げられた仇敵をやつと討つたのさ』

清六は秋の枯草の中をのたうち乍ら落ち入る。それを見定めたおたきは

『清さん、地獄で逢はうよ』

と合掌し、死に場所を求めて谿谷をさまよひ出る……



『日清談判』演出覺書

野 淵 昶

金子洋文氏の『日清談判』はその演出者によつて幾通りにでも演出され得る脚本だ、新派の人々が從來の型をそのまゝ守つて演じても相當面白いものが出來たりさうだ。殊にこの脚本の持つ舞臺技巧と叙情的な雰囲気はこれ等の人々にも充分活かす自信があらう。

例へば作者が第一劇場の爲めに特に書き加へてくれた第二景だ。月下の街を戦死した品村軍曹の二人娘が、月琴を弾きながら流して歩く或る家のお神が涙ぐみながら金をめぐむかと思ふと、軍ごつこして居る子供達が出て來て二人を罵倒したり石を投げつけたりする。發狂軍人が出て來て腕白子僧を追ひ散す。第一景以來品村家に同情を持つてゐる道具家大川がやつて來て口惜し涙にくれて居る姉妹をなぐさめる——よくある筋だ。筋と舞臺技巧とだけに口いていへば、金子氏の作としては寧ろ甘すぎるほど甘いものだ。これは第四景の町端れの丘の場についてもいひ得るのである。この二場面などは新派の人々の演技でも或程度まで入つて行けるだらう。

がしかし『日清談判』が表面かなり甘く見える相貌をそなへて居ながら在來の新派の脚本などとは勿論全々變つた味を持ち、日清戦役當時の東北の小都市を材

日清談判 (四景)

(他にプロローグと

三つのインターローグ)

——こちらは第一劇場放送室であります。
ラウドスピーカが叫び出す。

——戦争は………此怖ろしきテロルは………
科學に奉使されたる此文明の慘逆は………

戦争の呪詛が叫ばれる。

進軍喇叭がおこる。

號外賣りが左右から飛び出して狂舞する。

赤と黃の第二の幕が割れる。

土藏の前にした風景である。

平擡で戦死した品川軍曹の家である。

封印された諸器具——貪慾な債鬼の群——

賣り立てが初まる。

美しい踊衣装がひろげられる。

三子が飛び出す。

——これ、私の物よ。お母さんの大事な形身

よ。

——ほら此通り、此品物に此紙がはられると

個人の所有を離れてお上のものとなる。

——私のものです………私はお金を借りたお

料にとつて居ながら現代の句を高く放つものは、やはり時代の尖端に立つて居る作者のイデオロギイである。この戯曲を書く意圖である。もつと正直にいへば、『日清談判』はこの作者の意圖によつてあぶなく救はれて居るのである。

その意圖とは何であるか？

戦禍の憎悪だ。戦争の呪咀だ。人間の好戦心への挑戦だ。

この戯曲の底にこの意圖が渦巻き、たぎりたつて居るのだ。品川の二人娘と發狂軍人は戦争の生んだ犠牲者だ。それらをめぐつて人々の好戦心がいかに横暴なる跳躍をするか？、物心のつかない子供達まで戦争の味方となつて二人の處女に肉迫するのである。これに對して三人の犠牲者達の反抗の聲が寧ろ弱きにすぎる憾みがする位だ。

私がこの戯曲を読んで遺憾に思つたのは作者のこの意圖がどうかすると叙情的な雰囲気によつて打消されさうになることだ。そんなものを吹きとばして表面へ噴出してほしかつた。もつともつと強い絶叫になつて怒號になつて表はれてほしかつた。しかしそれは私の慾だ。

私がこの戯曲を読んで第一に胸に來たのは勿論作者のこの意圖だ。そして私がこの戯曲を演出する意圖もまたそれではならないと思つた。叙情的な雰囲気は捨て、しまつてもかまはない。時代の考證など史學者や風俗學者にくれてやつてい、更に日清戦争も或點まで忘れてかゝつてもかまはない。何よりも先づ人間の發生以來、無數の犠牲を喰つて猶ほそのあくなき貪慾な殘虐を未來にふるはふとする、テロル戦争を舞臺に放り出せばいいのだ。人間の好戦心、戦争の犠牲を舞臺に持つて來ればいいのだ。

『日清談判』が一つの寓話か或はお伽噺になつてもいい。戦争その者が舞臺を占

ばへなどありません。

三子は狂亂して封印を破る。

追つて出た姉の不三子は只おどくする。

債鬼等は激昂する。

「お待ちなさい。私が買へばいいでせう。」

大川と云ふ男が入る。

「お嬢さん心配しなさんな。私がきつと取り返してあげます。」

賣り立ては進む……………二人の遺子の哀愁の前で。

月琴……………

槍……………

一人の發狂した軍人が飛び込んで来る。いきなり槍を奪つて踊り出す……………

日清談判破裂して

品川乗り出す東艦……………

槍を債鬼等に擬して彼は叫ぶ。

「武勳赫灼たる我戦士の家を土足で以て蹂躪するとは何事だ……………遺恨重なるチャンチャン坊主、皆ごろしにしてやる。覺悟しろ。」

と追ひ廻し、追ひ込む。

群衆の凱歌と發狂軍人の悲鳴の様な笑ひのうちに舞臺はまはる。

領してくれ、ば私達は日清戦争に對する呪咀を必要とはしないからだ。

×

一つの戯曲を演出するにあつていつも第一に私の考へることは、その戯曲を自分がどう解釋するか、またそれをどう表現するか、何に力點をおくかといふことである。そして自分の解釋によつて表現の形式を割出し焦點を考へて演出に着手するのである。一つの原作は演出者が變れば當然その演出の形式が變つて來なければならぬ。そして最初にいつたやうに『日清談判』はその變る程度が演出者によつて非常に大きい戯曲だ。

が、私は自分の解釋と意圖どほり演出を進めたのである。

×

先づ第一に演出意圖の感銘の度を強くする方法として、自分でいろいろなものを書き加へて見た。この作者に對する私の日頃の敬意は原作に加算したり削除したりすることは殆どせなかつたが、場面轉換の間、第二の幕の前に、或はラデオで或は影繪や幻燈で、或は葬式や廢兵の通過で、作者の意圖を強調する場面を作つてみたのである。そしてかういつた形式は作者金子氏とは縁のないものではなく、同氏の『爭議と動物』などの近作ではこの種の技巧がしばしば用ひられてゐる。

寫實をはなれた戯曲の演出の際の私の癖だが、今度も前の『マツ』の演出にかつたやうな前舞臺を本舞臺の前につかつてみた。そして本舞臺と前舞臺の前に第二の幕をひいた。前舞臺のフレイムは號外をはりつけ、その前には左右に大砲を對立させて第一の幕が開いた瞬間、先づ觀客が戦争を感じるやうにした。

或寂れた街路。

講和談判調印の號外が飛ぶ。

不二子と三子は家を追はれ、今は門づけをして居る。

日清談判破裂して……

戦争どつこの子供等が大勢出て二人をこづきまはす。

發狂軍人が出て來て子供等を追ふ。

大川が来る。

お嬢さん。一度踊つて五圓です。破格なんです。随分探しました。池鯉亭の戦勝祝賀會の踊りです……

戦争で父を失つたみぢめな二人の姿を皆さんの前にお眼にかけませふ……

三子の言葉を、發狂軍人は繰り返して叫び高々と笑ふ。

辯士が現はれる。

一寸幕合を拜借して御覽に供しますば歐米最新流行エレキ應用原名シルエツト……

黄海大海戦……

玄武門乗取り……

第三場池鯉亭の園遊會に移る。

招待されなかつた發狂軍人が飛び出す。

皆さんは私を狂人あつかひにする。而し

次に前舞臺に置いた擴聲器で演出者の意圖を觀客に傳へるラヂオをつかつたのは、日清戰役を一つの寓話的手段として戰爭そのものを現代の觀客の前に曳きづつて來たいがためだ。過去の夢を追ふのではない、現代の觀客に強く訴へんがためだ。

それから同じく擴聲器で進軍ラッパを放送する。それがすむと兩花道から號外賣が威勢よく躍り出して來る。戰勝氣分が觀客席に充滿するところで、第一景の場面を始める。

×

第一景を始め、舞臺裝置は表現派の樣式をとつた。俳優の演技も出来るだけ寫實を離れてもらつた。照明も小道具のかざりかたも皆な一つの意圖の下に統合してもらつた。

第二景はかなりセンチメンタルな場面だがそれから通れるため移動背景を採用してみた。三軒の家を流して歩く姉妹を動かさずに家を手から下手へ移動さすのだ。この暮切れには戰爭の犠牲者三人をならべて、ホリゾンツトへ幻燈で『この人々を見よ』のタイトルを映して強調する方法を採つた。

第二景と第三景の間に辯士（解説者ではない）を出して黃海海戰と原田重吉門破りの場のシルエツトと戰死者を澤山映した幻燈の説明をさす。その説明の途中で第三景の幕が開いて辯士の歩いて行くところをスポット、ライトで追ふ。そしてそこに戰勝に酔ひしれたブチブル共の醜態を曝露して行く。その中には後で祝勝演説をやる町長の藝者相手の痴行も見せるのだ。

第四景の群衆シーンは集團演技であつたといはせたい。一番骨の折れるかはりに

それは此頭に入つてる彈丸の爲です。どうか此彈丸を抜いて下さい……

彼は叫ぶ。

不二子と三子の余興の踊りである。

終ると三子は倒れる。

人々の動搖の中を發狂軍人は彼女を抱いて

叫ぶ。

醫者はいらん。俺が醫者だ。……

舞臺まはると葬式の列が通過する。幕。

第三のインターローグである。

幻燈のタイトルで

負傷兵が四人舞臺を通過する。

最後の幕が割れると

牧歌的な町外れの丘

夕暮れの川と海とが見渡される。

子供等の聲で

雪の進軍、氷を踏んで

何處が河やら道さへ知れず

……

と聞へて來る。

發狂した軍人が彼等の先頭に立つて出る。

全體止れッ。左向け、休め。……氣を

付け、捧げ銃。

其前を國を追はれて去る不二子と三子が、

一番うまく行きさうな氣がする場面だ。全劇場員の外に三十名程エキストラを迎へてもらつた。

第三景をぶんまはして、戦死者の遺物を送る寂しい葬式の場面を新に書き加へて見た。萬歳の聲が聞える。酔つた男達が冷かな眼で葬式を見下してゐる。この場は相當効果がありさうだ。そしてこの場と第四景の間に幻燈でタイトルを出して廢兵を四名見物に挨拶させることにした。廢兵にものをいはせたかつたが、檢閲にひつか、りさうでそれだけは止した。

×

以上は原作とちがつてみたところを書いたにすぎない。しかしこれによつて、私の演出意圖を分つて戴くことは出来るだらう。

かういつた演出法の是非については勿論議論の餘地が澤山あるだらうが、たゞ私は自分の一番表はしたいものを表はすことに一番努力したつもりだ。

×

(九一七一朝)

追記

竟に初日を開けた。劇は、大體自分の意圖通りに行つた。

だが、檢閲監は、案の定第三のインターローグ廢兵の通過をカットせしめ、剩さへ隨所に演出上の制限を加へた。

自分はすべて檢閲監の命令通り、黙々としてそれに従つた。——何故ならば、

檢閲監の制限に依つて豪もその演出効果を損じないと信じたからである。否、

制限前以上に効果を出せる確信を持つてゐたからである。

宜なる哉、自分のその確信は今立派に裏書きされてゐる。

大川に送られて現れる。

——可愛らしい小さい人達、あなた達は今日迄親切に私達を守つて呉れました。大きい人達

が私達を嘲笑つて侮辱したのに……私

は皆さんにお願ひします。皆さんが大きくな

つたらどうぞ此世から怖ろしい戦争を追ひ出

す爲に闘つて下さい。

一同は別れを交す。

——皆さん。私たちが大きくなつたら、戦争を

なくする爲に働きます。

子供達の聲が、赤い夕焼空に彈撥する。

戦争が續くぞ。いつまでも、いつまでも

戦争は續くぞ。

發狂した軍人の狂つた聲である。

空は眞赤だ。

——さやうなら、勘吉さん、さやうなら、小

さい皆さん。……大川さん、さやうなら……

去り行く二人の背後から發狂軍人は高らかに

叫ぶ。

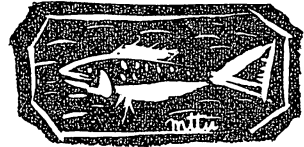
品川軍曹殿萬歳！

さうして彼を音頭とした可愛い、聲の軍歌

が彼女等を送るのである。

雪の進軍水を踏んで

何處が河やら……



歌舞伎と大衆劇

鴈治郎と第一劇場

京 極 利 行

(中座の部)

近松物

鴈治郎は近松物に没入したら、これは近年ことに喧しく、の優を愛好する眞の批評家間に論議されつゝあることだ。だから、この點からすれば今月の鴈治郎への狂言立て「佐々木大鑑」「心中宵庚申」の二つともに揃つて近松物であることは、當を得たことと云へる。

この内で「宵庚申」の方は既に度々上演されたもの、又その上演の度に好評を博しても居た狂言で、云はゞ、今度の配役(鴈治郎氏の半兵衛、福助氏のお千代、魁車氏のおかる、薙女氏のおみね、市藏氏の平右衛門、長三郎氏の太兵衛、鰐

十郎氏の伊右衛門)を一覽すれば、舞臺を見ずとも、その舞臺成績は相像出来る程に磨きのかゝつて居る既成品だ。

興味は「大鑑」

そこで、何んと云つても今度の近松物での興味の多いのは「佐々木大鑑」だ脚色はこの一座の座つき作者とも云へる唯一人者の大森痴雪氏、舞臺監督は近松研究家として世間に大いにうたはれて居る木谷蓬吟氏、主演者は中村鴈治郎氏、この三つの顔が揃へば、もうそれだけで興行價値は相當に備はつて來て居るのだ。だが、僕等、若輩が興味を持つのは、この脚色、監督、演技、斯うした三つの方面でそれらの一流と許せる前記三氏がお揃ひになつての仕事として、「大鑑」を

如何に現代に復活させて呉れるかの點にあるのだ。もつとも今度上演されるのは原作の二段目の切、だけであるらしい。

この二段目の切でも勿論であるが、この「大鑑」を通じては母の渚、その娘の待宵と時雨姉妹、この親子三人の方が面白く、又性格もはつきり書かれて居て、佐々木盛綱に對しては、主人公でありながらも、狂言廻しに扱はれた形があつて書き足りないやうに思つて居る。然し、まだしも佐々木としては第一段目とこの二段目とが活躍出来るやうに書かれては居る。とりわけ渚は、淨瑠璃で語られる場合にしろ、舞臺に上ほす場合にしろ、原作に従へばなかなかの大役で、健康時代の歌右衛門氏、モ少し考ひ込むだしの梅幸氏、老役を演る氣になつた鷹治郎氏、まア現今の既成劇團では、この三優にでもやらすより外には、一寸理想的の配役もないやうで、しかもこの三優にしたところが、前記のやうな特殊のコンディションが實現されての時のことだ。

だから、鷹治郎氏が進むで、この老役に乗り出せばともかくだが、それは不可能のこと、又鷹氏のいつまでも若く見へるところが寶物であるらしい松竹さんであつてみれば、なんは大膽であつても、そんな冒險事には手もつけれまい。事實、それ御覽じろだ、盛綱は鷹氏、渚は福助氏、待宵は扇雀氏、時雨は成太郎氏と決定したらしく、原作に従へば鷹氏の盛綱は扇雀氏の待宵、成太郎氏の時雨をボツトさせる程の御

美男武者で、福助氏の渚は、待宵、時雨の母親なのだ。なんと面白い年齢バランスが、舞臺に年齢のない俳優諸君の上に持ちあがつてきたことか。

主人公は？

この二段目の切は謡曲の「藤戸」が換骨脱體されたものに相違ないのだが、舞臺人物として活躍するのは彼の母娘三人で、盛綱はこの三人から道理攻め、人情攻めに會つて、ちつとそれを齎へて居ねばならぬ役どころ、たまに言葉を出せば自分のした行爲の辯解と、その行爲に對する自責觀念から脱れる爲めに母娘に妥協を求める條件の提出ばかり、だからこの辯解と解決條件とを、成程と観客に理解させやうとすれば随分と腹を專一にしたモタレ役。まさか、實盛や熊谷のやうに——物語らんと座を構へて——他の登場者を物語の道具に使つて、バツタリとツケ入りの大派手な物語も出來ますまい。また、萬一さう出来るやうに脚色演出してでもあれば近松原作も羨ましいものとなりかねますが。

あの自分ばかりが動くことの好きな鷹氏が、斯んな縛られた専門みたいな役どころに廻つて、何んとか自分の動ける手順を見出さうとする爲めの努力の跡、また福助、扇雀、成太郎の三氏がこの鷹氏と云ふ大物にぶつかつてこゝを先途と攻めか、つて来るのを、どうした腹で受けてやるか、あれだけ

の名手となれば、それも容易な事だとは思ふが、何んにしても、従来の鴈氏の舞臺態度では、事をこわすより外には結果しないと推察される原作が原作だけに、加ふるに脚色と舞臺監督は、大森、木谷の押しも押されぬ両先輩大家、お若くあらねばならぬ鴈氏、等々、斯うカセが揃つてくると「大鑑」を期待する興味は、僕等若輩にはかなりのものがあるのだ。

（浪花座の部）

壽三郎君

「足輕三左衛門の死」「馬の背」「日清談判」この三つに壽三郎君が出演するとしたら、第一劇場の中心人物として選ばれたる同君も第三回公演で、はじめて自己の野心を充分にのばせるコンデイションに到達したと云つてよい。「三左衛門の死」にしろ「馬の背」にしろ、壽三郎君が従来手がけた新作の成績からすれば、きつと成功すると思へる。まア安心して任せておいて、その出来榮へを樂しむで待てばよいものだ。僕は「日清談判」の、同君はたしか狂人の軍人に扮すると聞いて居たが、これが事實なら、この役に非常に興味をもつて居る。

何んせ、金子君の原作があつたものだけに、壽三郎君がこの脚本の持つ味に副へる程の、何にがなしに近代的感觉の

匂ふものを持つて居るか、どうか、この點には興味を湧かざるを得ない。身についたやうらしいものは比較的薄いし、演出者にも従順ではある同君のことだが、問題になるのは原作の描く世界と、壽三郎君が、と云ふより、あのゼネレーションのブル階級なら、誰しものが生きて來た世界とはどうしても、背なか合せになるより外はないものがありはしないかと思はれる。「マツ」を扱ふ態度とは、どうしても、はつきりした認識のもとに働きかけねばならぬものではないだらうか。壽三郎君一人とは云はぬが、この劇團も「日清談判」に成功すれば、これは掛け値なしの成功だ。ほつこうしつゝ、ある未組織階級を觀客對象とする劇團として轉生の見込みもある、若しかしたら所謂新興劇團よりも、より早く成功するかも知れない。だが「日清談判」にすらも成功せぬやうだつたら、もう今後は、目前の利益にのみ走つて居る興行師のお抱へ役者として、大入能率の點で最高位を占める。其の日稼ぎの劇團として確立する様に精進した方がよいかも知れない。とにかく、未組織階級をめあてとした脚本として「日清談判」は大衆的價値の大きいものだ、それを如何に上演して見るか、第一劇場も、よい試金石を引き當たものと云へる。

第一劇場私語

森 ほ の ほ

A デュウ三郎の第一劇場は……

B ア、ちよと待つた！君も江戸ッ子ぢやないか。デュ三郎と言ひ給へ。デュウなんてモツサリして「やぢやアありせんか」だ。

A のつけからさう揚足を取られちや二の句が接けませんよ。

B 處で、僕の言ふことは何んだつけ……

A 私の行く先はどちらです？か。まるで壽三郎の第一劇場のやうだな。ハ、ハ、ハ、ハ。

A まアさう茶化さずに……その第一劇場も第三回を續けてやります。

A 疾うに知つてゐるよ。狂言も聞いてゐる……

B どうも早いな。しかし白井氏も大乗り氣のやうですね。

は大衆文藝の方だな。

A 『マッ』はどうでした？

B 兎に角、珍なものだ。何かしら新しいものを喰べさせるといふ第一劇場なるもの、宣傳には爲つてゐる……一字題の狂言ばかり揃へて見せたのなども、全くこゝから出發するのだらう。

A 今度は『足輕三左衛門の死』と『馬の背』が呼び物になるでせう。

B 私もその二つが見たい。だが、二つとも東京の役者達がお先へ手懸けてゐるのが厭だな。成るべく東京で出してない物を演つて貰ひたいんだがなあ……

A 全くです。役者達も演り榮えがあるのでせうし、第一その方が意義がありますね。

B その筈さ。自分が言ひ出しべだもの……左團次の自由劇場や、長十郎の心座などとはワケが違ふ――。

A 全くです、出發も違へば、目安も違ひます。だから出し物も、その目安で立てゝるのでせう。

B 田中君の言ふ通り、藝術至上主義でもなく、大衆文藝でもなく、といふ處に標準を置いてゐるのだらうが、『痕』や『母』

B 『足輕三左衛門の死』が東京で上演されたのは、去年の八月歌舞伎座で猿之助が『膝栗毛』を演つて大當りを取つた時だ。その時は、どういふものか『明治維新のころ』と改題されたのさ。

A あなたは観られたのですか。

B 見る機会が無かつたが、猿之助の三左衛門、友右衛門のその母、八百藏のその友人遠山、左舛の寺小屋の師匠、芝鶴のその娘……いづれも評判は好かつたやうだ。舞臺裝置は小村雪岱氏だつたからこれも好かつたに違ひない。

A 『馬の背』は誰が演つたのです？

B たしか八百藏、小太夫達の一座かと思ふが、覚えてゐない作は去年の一月『演劇改造』へ載つたのださうだ。これも評判は好かつた。殊に作評の方が好かつたんだ。

A 僕の友達の一人は或る雑誌へ『大衆の興味をしつかり掴んで、しかも新鮮味を失つてゐない。なだらかな對話と、周到な用意は敬服する。第一場の幕切に花嫁を出して來るあたり』の技巧は、一寸真似られない。』と書いてゐました。

B 私も友達の話で聞くと『三左衛門の死』はいかにも吉田絃二郎氏好みらしい、静かな、ちんまりした、そしてセンチメンタルな作品のやうだ。三左衛門が親友を自分の手に掛けるのと、母親が催眠藥で親子心中を遂けるのが、どうも拵へ物らしい感が残る。尤も原作を読んだのではないから口幅つ

たいことは言へないが。

A それではあなたは、二つとも読んでないのですか。随分怠けてゐますね。

B さう眞つ向からやられては一言もない。だが、芝居を観るのに、先づその脚本を読んで置く方が可いものか、どうか、これは一寸問題だよ。

A 讀まない申譯に、うまく通けますね。

B さういふ譯ぢやないがね。私は考へるのに、シバキを研究するのには、豫めその狂言の脚本を精しく讀んで。舞臺上の効果を考察して置くに越したことはない。併し、舞臺の上に作品が脚光を浴びて、如實に醸し出される新鮮な興味に接しようとするには、寧ろ脚本を讀んで置かない方が可い。これは遁辭ぢやない。私の持論だよ。

A つまり處女性味を享け入れようといふのですね。

B さうですよ。興味は正にその方に多い。これは今までの體驗でさう言へる。

A 話が第一劇場からは大分遠くなりましたね。狂言の選定や役者の組み合せや、かなり世間の非難はあるやうですが、僕はまア『長い目』で見てやりたいと思ひますよ。

B さうです。役者も、仕打も、見物も倦きないことだ。第一劇場を本當に愛するのなら。本當に育て上げるのならね。

第一劇場・長二郎

門脇陽一郎

近來僕は非常に勞れを感じてゐる尤も今日迄四十年ものらくらと生きて來たのだから勞れるのは當然だがそれにしてもこの先五年なり十年なり生きて行くのは可成だいくつだ。生活ばかりでなく作品の上にも勞れが目立つたるみが見える。僕にはそれがよくわかる。がしかしどうする事も出来ない。歳だ。四十と云へば誰しも欠伸の一ツもしたくなる歳だ。四十にして不惑と云ふのだから、それ迄にとつしりと根を張つて、枝葉を茂らせて、ほつ／＼老境に入つて行く歳なのかも知れない。だがいくら勞れたつてお年寄りの仲間にはいり度くない。これでもまだ青年のつもりでゐる。青年も青年、二十歳位な青年の氣持が、しぢう内に働いてゐるのだ。だからこそ、四十にして初めて白髪染なるものを用ひても見た。白髪のふえるのは淋しい。朝毎に櫛の齒のこる抜毛は淋しい。由來僕は髪の毛が赤いそして縮れてゐる。そのために子供の時分にはよくベツをかゝされ

たものだ。その赤毛と、そしてご年配の白髪と——まるで冬枯れの草原でも歩いてるやうだ。氣持の勞れはいくらでも隠せるだがしかし鉢の勞れは隠せない。そこで白髪染めだ。おかけで鳥の濡羽然とかぶさつてゐる。せめて頭だけの青年だ。それでいゝ。カフエーへ行つても眞先に帽子を脱ぐぞ。そして云ふぞ見る。この若さを。

その若さだ。

も一度その若さを呼び戻したいと思つて僕は今懸命につとめてゐる。若い人達のものなら好んで讀む。文壇の中堅、新進、そんな人達の作品を手當り次第亂讀する。どの作を見ても彼等の若さがすばらしい力で紙面におどつてゐる。作品のいゝ悪いではないのだ。たゞ僕はその中から若々しい情熱を探し求めてゐるのだ。二日酔ひのふらくした頭で、千疋屋の店頭に立つた時のすばらしい香氣はどうだ。ブンと鼻を衝いておそひかゝるあの果物の新鮮な匂ひはどうだ。僕の求めてゐるものはその匂ひだ。その新鮮さだ。

老人のどこにその新鮮さがある。老大家の圓熟ぶつた作品のどこにそれだけの感激がある。僕等はもううまい料理には食ひあきてゐるのだ。まづくてもいい。ナマでもいい。手なれた板前の造つたうまい料理よりも、山から掘出したばかりの松茸と手づから焼いて、むしつて、生醬油をつけて喰ひたいのだ。土からもり出た若々しい匂ひだけを味ひたいのだ。

翻つて劇場を観る。
と又しても欠伸が出る。

そいつをグツと噛み喰えて、さて一度自分の周囲を顧みる
とどれもこれも勞れてゐる。さういふ自分も勞れてゐるそこで
又しても欠伸だとかしなくてはならない。どうかしてせめて
自分だけの感激をつくり度い。僕は二十年の劇場生活を通じて
常にそののみに描いて来た。そして次々に新しい何物かを捏
ち上げて、勇敢に戦つて来た。そして勞れた。ひどく勞れた。
僕にはもう第一線に立つだけの氣力が無い。だから勢ひそれを
何かに求めなくてはならない。

さう思つて大阪へ来た。

そして第一劇場の初日を見た。

そして僕のものぞんでゐる。そのすばらしい情熱にぶつかつた
のだ。脚本の撰擇や、芝居の巧拙を云ふのではない。そんな事
は物識りに任しておけばいいのだ。僕の云ふのはその新鮮さだ
地殻を破つてふき上げる力だ。第一劇場誕生の理由はそれだけ
でも澤山だ。大阪劇場にこれだけのセンセーションを捲き起し
た事、その事だけで當事者は意を安んじて可なりだ。

さて——與へられた紙数が盡きる。

拙作『心中みづ鏡』について云はして貰はう。

云ふ迄もなく長二郎のために書いたものだ。映画で評判の『か
ど火』に材をとつたもので、その點から云つたらはつきり僕

の創作と云ないかも知ない。が、然し映畫人としての長二
郎が持つ色と線、その線と線、舞臺に移し度と思つて骨を折つた
そして長二郎のいのちとする殺陣と色氣を十分に取入れた
積りでゐる。時は元祿、

所は京都、散る花びらの
なかで、美男長二郎の扮
する若侍白石武平が石
河の扮する藝妓おゑんと
心中する。と云つただけ
で既に一幅の繪だ。その
繪を、ろをねらつたのが
『心中みづ鏡』だ。春の
夜のもの憂い氣分がいさ
さかでも舞臺にたゞよへ
ばそれでいゝとしなけれ
ばならぬ。幸ひ、演出
には僕の日頃畏敬する田
中總一郎兄が種々苦心し
長二郎を補導してられる
ので其の點にも僕は、大
いに意を強ふしてゐる。

(四、九、二四)

大阪 TSK 物名
……煮田ふんこ
華乃渡 商登標
美味しくて
軽便でお安く
経済的だす
目丁二通南區西市阪大
店商合川元廣發

東西舞踊の感想

永田 龍雄

わたしは過去の大阪の舞踊界に關しては殆んどくわしいことを知らないのであるから、ごく極限をした今日の大阪の新しい舞踊界に就てだけなにか書かせて貰はうと思ふのである。大阪で生れた新しい西洋風の舞踊は東京にくらべて衆團的に非常に健全な發達をして居る、東京はその點で大阪の後塵を拜するやうなしまつである、東京には個人としての舞踊藝術家はたくさん居るが衆團的に大きな舞踊團體がないことは甚だ寂しいこと、言はねばならぬ。

まづ松竹樂劇部の生徒たちの團體であるが、このなかには甚だすぐれた舞踊家が居る、飛鳥明子などは技巧から言つて申し分のない女性である、東京には飛鳥ほどの熱のある女性舞踊家は居らぬと思ふ、きくところによれば飛鳥は模茂都座平君の嘗ては手鹽にかけた舞踊家ださうだが、非常に叙情的な味に富んだ熱のある踊手である、且、甚だ技巧に富んだ才能をその肉體に盛つた踊手である。

松竹座の振付家としての江川幸一君もその舞踊的修練の年月の割から言つて甚だ巧みな案舞家と言はねばならぬ、わたしは常にこの人の案舞の才に敬服をして居るのである、松竹座は嘗てはマクレッツオワのやうな世界的のすぐれた露西亞舞踊家を聘してその生徒の養成をしたことがあるが、そのおかげでもあらう生徒のうちにはかなりいゝ踊手が育てあはれて居る。

大きな舞踊團體はどうしても資本家の背景が無くてはできないので大阪はその點さすがに恵まれて居る、松竹座の樂劇部でも寶塚の歌劇團の舞踊團體でもすべて資本家のおかけで生まれた舞踊の大きなグルウプであつて、これらの存在はわたくしども東京人の羨ましく思ふところである、松竹座でも寶塚でも、とにかく新しい時代の人をよろこばせるに足るレヴエウの演出をして東京を風靡して居ることは何としても偉いしごとだ。

河合ダンスの女性たちも實に技巧の練磨がかかつてきた、美貌だがどことなく纖弱な感じを與へる駒菊よりもほんとのテクニクをもつたのは男性部ばかりをもつて居た里三だきくところによると何か里三に不平があると見え郷里岡山に戻つて居て大丸鬚で納まつてると言ふことであるが、彼女を離すことはまことに惜しいこと、言はねばならぬ、河合ダンス

で難すべきことは衣裳色彩などの點が甚だ卑俗なことである
もうすこし清楚でよからうと思ふ。

大阪のかうした舞踊團の踊手の病根はなにかと言ふと、舞
臺に於ける踊手の配列の相互の間隔布置が精確でなく亂れて
居ることでは甚だ注意すべきことのやうである、泰西舞
踊の形式でこの科學的精神を忘れてはこまるのである、松竹
座樂劇部寶塚ともに踊手がをどりつゝあるうちに配列がとも
すれば亂れがちになる、これは改たむる要があるのである。
關西の新しい舞踊界では何事につけ榎茂都陸平君の息吹の
かゝらぬものは恐らく無いと言つてもよいほどであらう、そ
れほど彼は天分のすぐれた振付家で西洋のことにすぐわしい
頭腦のある振付家である、東京の花柳壽輔、若柳吉三郎はと
もに榎茂都君に匹敵すべくもない。

東京でもし榎茂都陸平君に肩をならぶ振付家を求むるな
ら、それは青山圭男君であらう、青山君はかなり古くから舞
踊藝術のために黙々として働いて來た人だ、二人ともに織い
感情の所持者で詩の要素がかなりある、青山君はピアノに對
する趣味もあるので榎茂都君とこれは好一對である、青山君
は現在水谷八重子の一座の舞臺に出演をして居るが俳優とし
ての天分よりも案舞家としての天分が深いやうに察せられる
大阪では、なぜ個人的に新らしき舞踊家が誕生しないので

あらう、不思議なことにわたしは思ふ、新しい劇團もかなり
あるのに舞踊家がでてこないことはどうあつても片輪のやう
である。——大阪の劇界でも舞踊家としての俳優が林長三郎
に限られて居ることはまことに不思議千萬のこと、言はざる
を得ぬ、なぜ菊五郎、三津五郎、猿之助級の舞踊家が生れて
居なかつたのであらう。

大阪名物の四廓のをどりも最近では地方が東京化し新しいも
のには東京の畫家が招かれて背景を描きにゆくと云ふ風で、
まことの大阪の風土色を失ひつゝあることは憂めたことでは
ない、東京の新橋演舞場の春秋のをどりが關西の模倣を専ら
にして居ること、共に甚だ面白くない風潮である、その點京
都のをどりの本格的に古くてもどつしりとして左顧右眄し
ない堂々とした態度はさすがである。

林長三郎の舞踊家としての肉體及び動作は變化物に適した
人のやうである。ほんとに恵まれた肉體の舞踊家ではなく梅
幸のやうな柄を小さくしたところのグロテスクな味のある舞
踊家のやうに思はるゝ、十月は逍遙博士の『金毛狐』を梅幸
はやるさうだが、わが長三郎もかうしたものをてがけてもら
ひたい、最近見た彼の新舞踊『淺茅ヶ宿』はどうあつても感
心のできないものであつた、あの新舞踊は舞踊臺本がわるい
のである、(九月二十二日東京にて)

劇壇その日

九月七日 新装なつた辨天座の第二週興行に諸口十九等の實演團が出演、ユーモア劇『素晴しきジャンプ』一幕を出す。

九月九日 樂天地新潮劇お目見得狂言は作九日限り本日より二の替り初日を出す。狂言第一『開城前の大石』壹幕第二瀬川春郎作『二人の愛兒』四幕。

九月十二日 道頓堀松竹座に日米パッシングシヨオ、リーグ協會が新組織出演。演物は服部秀作『東西妖婦風情』三景。顔振れは波多横、町田金嶺、ジョウジ桑、ヴアジニヤ、砂田駒子等である。▲角座 新聲劇『銀蛇番十郎』は本日を以て打ち上げの豫定の所記録的盛況満員賣切の爲三日間日延べとなつた。

九月十四日 辨天座は本日より五日間短期興行を爲す。諸口十九の演物は『正岡合資會社』三景瀬川春郎作。▲今夕鶴見祐輔氏來阪、田中總一郎脚色にて第一劇場により浪花座に上演中の『母』三幕二十七場を觀劇した。

九月十五日 角座の新聲劇は三日間の日延べ興行の後本日『銀蛇番十郎』を打ち上げた▲京都夷谷座は大阪辨天座に引き續いて改装新成し本日開場した。▲浪花座の第一劇

場は諸種の意味の人氣をあふつて居るが、本日、所演『痕』の主演林長二郎總見の爲とあつて、遙々東京より六十有餘人の美々しい御令嬢連が來阪同座を賑はせた。

九月十六日 松島八千代座は熊谷、久保田、山九州等の新派大合同劇二の替り狂言を本日を以て打ち上げた。

九月十八日 角座は新聲劇二の替り狂言として長谷川伸原作、島江鏡也脚色の『日染月染』五幕十一場の初日を開けた。

九月十九日 松島八千代座は本日松竹專屬大歌舞伎の初日を開けた。狂言並に顔振れは以下の通り『伊賀越道中双六沼津の場』葛綠蜘蛛振舞『小幡小平次』三幕。右團次、德三郎、延太郎、右文次、右若、若橋、石田十郎、蔦雄、よしの達雄、關三郎、德二郎、德藏、家右衛門、成三、右三三、石田三郎、駒之助、大吉等。▲辨天座は本日より笑葉の高時で新舞踊『高時田樂舞』を上演。

九月二十日 樂天地は新潮劇三の替りお名残に狂言『落伍者』光の世界への初日を開けた。

九月二十二日 中座大歌舞伎本日を以て打ち上げる。▲浪花座第一劇場第二回公演を本日を以て打ち上げ閉場後終演式を舉行し賞揚式があり、今回は社長賞の榮冠に價する優秀者なく單なる拔擢賞として左記三名に

金一封が授與された。
坂東豊三郎(痕)戸山俊治、岩本繁(何れも船)

九月二十六日 辨天座にOKコーラス舞踊團が本日より出演。スターは當年三才の濱田ニナ子と七才の濱田リラ子、平野松三の補導である。

九月二十九日 天満八千代座は『切られお宮』三場『残れる母娘』八場の外題で、熊谷、山田、久保田等の大新派劇の初日を開けた

十月一日 中座の總配役 麗治郎半年ぶりの出演に人氣を煽つてゐる關西大名趣速揃ひの大歌舞伎は本月初日を出した。狂言は一番目新歌舞伎十八番の内『桃山譚』二幕中幕近松門左衛門作木谷蓬吟舞臺監督『佐々木大鑑』一幕新作大森痴雪作並舞臺監督『錢五三人兄弟』三場二番目近松門左衛門食滿南北脚色『心中宵庚申』三幕大喜劇『としま』常磐津連中『卯の花』清元連中『ぶり網』長唄連中でのその總配役は左の如し

佐々木三郎盛綱、八百屋半兵衛(麗治郎)徳川家康、母清、當主喜太郎、女房千代(福助)萬歳(右團次)甥太兵衛、才藏(長三郎)大政所、妻おきね、漁夫(吉三郎)加藤清兵衛、守山右馬允、漁夫(八百藏)女中おきん漁夫(成笑)手代清七(成三郎)四宮源八、丁兒松藏、漁夫(扇)女中おくに、漁夫(鷹之助)下女お竹、漁夫(魁童)白石新右衛門、手代定七、漁夫(升藏)井上大九郎、漁夫(政治家郎)幸藏主、錢屋次男佐八郎、姉おかる

茶屋女房おかつ(魁車)松の丸殿、漁夫(延太郎)下女おなへ、漁夫(右若)齋藤瀧平、小頭吉松、漁夫(美鷹)人足富藏、漁夫(市昇)長命寺三郎、漁師八藏(右左次)小頭德松(延郎)漁師六藏、西念坊(齊五郎)石田の臣運平、手代仁三郎(應正)木村又藏、野淵十郎、漁師孫兵衛(九國次)百姓金藏(箱登羅)姑おみね(延女)豊臣秀吉、島田平右衛門(市藏)加藤肥後守清正、錢屋の三男要藏(延若)石田治部少輔三成、姉川小太郎、番頭兵衛(橋三郎)妹娘時雨、漁夫(成太郎)番頭次郎兵衛、養父伊右衛門(蝦十郎)前田利家、錢屋五兵衛(長太夫)淀殿、姉待宵、娘お千賀(扇雀)

同日 第一劇場の總配役 浪花座は第一劇場が出演第三回公演を出す演し物は第一は、吉田絃二郎作『足輕三左衛門の死』第二門脇陽一郎作『心中みつ鏡』第三長谷川仲作『馬の春』第四金子洋文作『日清談判』でその總配役は左の如し。
足輕三左衛門、馬方清六、發狂した軍人壽三郎、三左衛門の母おしん、仲居おるん、不二子(三好)藥妓富、馬に乗った花嫁(若宮)傳七郎の娘おたね、娘綾江(六條)藥妓よし尾(香取)藥妓おゑん、おたき、三子(石河)白石武平(長二郎)遠山眞吾、寒河江、醉漢(山口)木村辰九郎、中川七太夫、傘森町長(進藤)轟甚四郎、赤井三郎助、日柄、古物商甲(吉田正)友部圭右衛門、巡查(前田)稻垣兒太郎、祝賀會委員(眼童)息主水

辯士岡村愛光(高田)野村勘策、志文右衛門(元安)古物商乙(豐之助)三百代言須藤、(山中)古唐傳七郎、安平彦之允、越永(吉田豐)古物商大川(藤村)

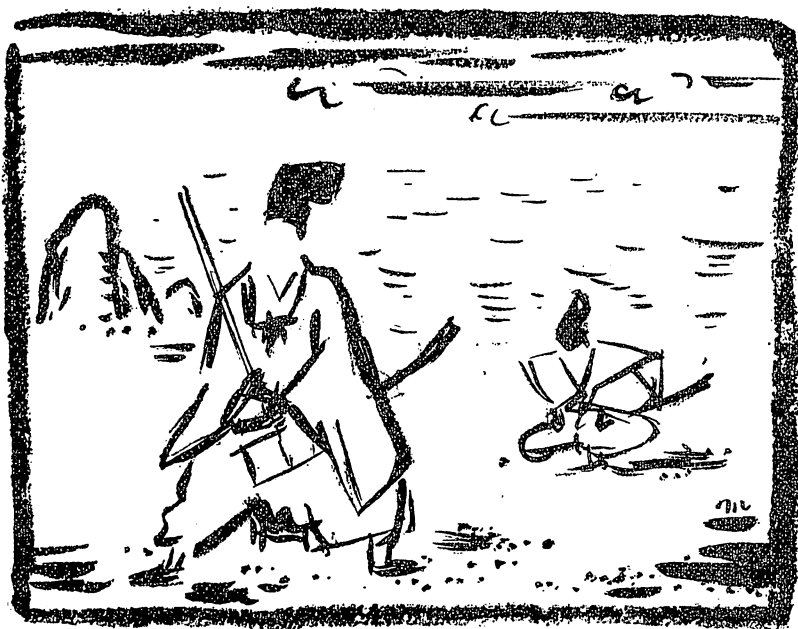
同日 松島八千代座の總配役 我童、右團次、大吉、長三郎、扇雀等の大歌舞伎十月興行は晝夜二部制にて開演晝の部は一番目『伽羅先代萩』中幕所作事『勢獅子』二番目『世話情浮名横櫛』夜の部一番目『鬼一法眼三略巻』新作『後の梅川』中幕『戀娘昔八丈』大喜劇『姫山姥』を出す、その總配役は左の如し。

乳人政岡、紺川勝元、向疵與三郎、遊女梅川、城木屋庄兵衛、番頭丈八(我童)蕨頭蝶藏、奴虎藏實へ牛若丸(長三郎)妻沖の井、横櫛おとみ、遊女鳴戸瀬、尾花才三郎(霞仙)鳴田十三郎、渡邊民部、藥妓おまん、泉屋惣十郎、おうた(駒之助)奴林平、藥者おみつ、越後屋お清、母およね、卯之助(藥妓おみつ、秘小はぎ、仲居おてる、澤湯姫(我久之助)藥者おこう、召使お竹、奴四良藏下女おさん(我久三郎)三原三左衛門、福徳屋萬次郎、奴三平、手代清藏(松壽)子息松若(達雄)藥者おまつ、息女皆鶴姫、遊女千代蔵(山とし)足利頼策、荒獅子男之助、和泉屋多右衛門、辰巳屋新七、たばこや源七實は坂田藏人(德三郎)傾城高尾、妹松しま藥者おふく、下女およし、妹白菊(福太郎)鶴喜代君(義直)笹野才藏、下男權助、奴兵門、料理人伊平(關三郎)藥者花江(松若)熊

井源吾、奴陸助(右文次)脇谷新吾、山名宗金、番頭、太田十郎(右田三郎)榮御前、笠原淡海、佃屋喜藏(秀郎)渡邊外記左衛門、鬼一法眼、棧屋治太衛門(大吉)娘おこま、萩の家八重桐(扇雀)妻八汐、仁木彈正、駕頭鶴藏、奴智恵門、丹波屋八右衛門(右團次)

同日 家庭劇の總配役 十月の角座は松竹家庭劇が歸演、晝夜二回開演で第一『吸取紙』第二『愛の訪れ』第三『夜寒』第四『萩の下簾』第五『赤い家青い家』の五種を上場その總配役は左の如し。

寄席の下足番三郎、西田讓治、海野茂助(十舌)寄席の三味線ひき松太郎、西田一郎丸西藤兵衛(天外)寄席の三味線ひき助次郎亭主長吉、番頭儀助(十次郎)社員楠、支那そばや(一郎)高須泰三、乳母おげん、叔父喜助(天照)平塚屋清兵衛、洋食屋安五郎、陸軍將校、社員吉村(致雄)近所の夫久保(三郎)通行の老婆(紫鳥)萩原國太郎、伴源太郎(富士島)峠大川(銀彌)上野兵造、職人猪之助十九郎、橋本彦一、番僧寛紹、若者清吉(八四郎)うどんや出前持、寺男伊平、若者芳松(時彌)友人山本啓吉、西田三郎(賀川)老僧寛澄、柳家小まき、西田甚太郎(小綾)娘おしほ(東)久保の妻松子、女おしげ末娘安子(春日)妻よし子、連れの女おきぬ(二葉)妻みさ子、女中おいね(桃谷)女房おたき、妻枝、女房おしか(鈴木)妻純子、丸西妻きた(如月)母お久、女房おかつ(米津)



十月の中座上演

近松門左衛門原作

佐々木大鑑

藤戸の段

處 備前國——藤戸の浦
人 佐々木三郎盛綱

母 渚

姉 娘 待 宵

妹 娘 時 雨

家臣 姉川小太郎

同 野洲十郎

その他家臣、郎黨、浦の男女、童

佐々木大鑑 藤戸の場

本舞臺正面一面の海原、中央上手寄りに大きな巖組、よき所に磯松二三、すべて備前國兒島の郡藤戸の浦の體。
この前に淺黄幕をおろす。
波の音にて幕明く。

佐々木の家臣野洲の十郎、高股立、高札を持ち、上手より出て高聲に觸れる。
十郎 いかに皆々健かに聞き候らへ。この國の御主佐々木殿の御入國にてあるぞ。何事も訴訟あらんものは出罷て申し候へ。この旨心得てよからうぞ。

ト、三度觸れて揚幕へ入る。
〽老の波越えて藤戸の明暮に昔の春のかへれかし。

ト、淺黄幕を切つて落す。鹽焼藤太夫の後家渚、盲目の體にて岩の上に身をよこたへ、下には娘待宵、時雨の姉妹愁歎の科にてすまふ。

〽さるにても、身は仇浪の定めなくとも科によるべの水にこそ、濁る心の罪あらば重き罪科もあるべきに、よしなかりける海路のしるべ思へば三途の瀬踏みなり、母は盲目のたちもやらず、四邊をさぐつて、

渚 やれ子供よ、大方この海を酌乾しやつたか、父様の死骸が見へたらば、ちやつと母に知らすのぢやぞ。これまだか、え、何で油斷をしやるのぢや。

〽岩を叩いて責め立てれば

時雨 いえ、油斷はなけれど、あれあのやうに汲んでも、さし来る潮が、

渚 え、それが油斷、父様は戀しうないか。見たふないか。母は戀しい慕はしい。目こそは見えね、抱きよせて、
〽老の妹背のさめ言、積りし愛さを語らんに

さ、その柄杓かしや。あれ、あの岩の少しこなたの水の深みに、
〽夫の死骸はあらめとて、浮洲の岩を上り降り、正體もなきその有様、はらはらは抱きとめ、

待宵 なあ母様、氣狂ひぢやとて人さんの笑はしやんすが羞かしいどうぞ鎮まつて

二人 下さりませ。

渚 なに、氣狂ひぢやとて笑ふとか、笑はば笑へ

〽狂女が心の若紫の、藤戸の沼も、波も潮も盡きせぬ海を汲め

ト諸共に
え、早ふ汲みやらぬか。

待宵 あい、ほんに親子が思ひでもいつかこの海干渴にならう。

時雨 姉様。

待宵 妹。

〽海よりも尙干しかねる、鹽焼衣エきて見よがしのやつさあ、
潮を汲まふよ汲めどもさし来る憂涙。

ト、漁夫の子供數名、上手より走り出てからかふ。姉妹はこれを叱ることあつて子供等は岩蔭に隠れる。

待宵 不惑な母様。

時雨 戀しい父様。

二人 なふ父様。

渚 藤太夫殿を返せ、夫を返せ。

〽返せ、と呼べども浮洲のいはず答へず、これは如何なる因果ぞやと、波打際にかつぱと伏し、三人一所に纏れ合ひ、流涕焦

れ咲きける。

ト、このうち下手より男女数名の浦人出て、またからかはうとする子供等を制し、笑止氣に三人を眺める。母子は愁歎の科よろしくあつて、どゞ手を取り交はして泣き洗む。

〽秋津洲の波靜かにも治まれる、源氏の御代に時を得て備前兒島のつかさ守、佐々木三郎盛綱が、けふぞ入部の島巡り、船も道ある浦づたひ、藤戸にこそは着きにけれ。

ト、このうち姉妹は母をいたはつて島蔭へ、大勢の浦人は土下座して迎へる。

佐々木三郎盛綱、家臣姉川小太郎その他大勢を随へ、揚幕より出て花道よき所にとまる。

盛綱 源平兒島の戦に藤戸の先陣仕りし御恩賞とて賜ひたる、今この國に入部の初め、過ぎし合戦の跡訪へば、海は霞すみて浦波の音もしづけき朝ぼらけ。

小太郎 去歲は兵船浮べたる沖とも見えず海士人の釣のたつきの漁舟。

家臣一 矢叫びならぬ涼松の風はかなづる大平樂。

家臣二 その樂の音も我殿が、けふの入部を祝ひのしらべ。

家臣三 民に施す仁政の先づ第一に爭論公事あらゆる訴訟の理非をわから治めとらせん思召しにて。

家臣四 要所く高札を立て、御領國內限もなく、手に手を分ちて觸れ傳へ。

小太郎 正邪を質す御仁慈を、遍ねく申し諭せし故、名將賢者の御

領主と、國を擧げての歡喜のさま、殿にも嘸かし御満悦に。

皆々 ござりませう。

盛綱 お、面白の浦の眺めよなう。

〽空も心も暢びやかに、行くや眞砂の渚みち、老女は何の會釋もなく

ト、盛綱の一行本舞臺にかゝる。

渚は柄杓を持つて岩蔭を出て、姉妹の支へるもかまはず、盛綱の前に立つ。

渚 さあゝ娘達、早ふ精を出しやらぬか。お、殿方も一緒に海を

かいて下されい。そこなお侍衆も手傳ふて下されい。あの浪の底にのやるげな、私や夫が戀しうござる。昔が戀しうゐるわいなア。

〽またさめくと泣きゐたる。姉川小太郎進み出て、

小太郎 こりやゝ狂女。侍に汐汲めとは近頃推參千萬な。其處のき居らう。

〽と、耻しめける

渚 當代は侍ぢやとて心穢く頼みにならぬ。はて涙まぬとなれば頼まぬまでよ。これ娘達よ。

〽早ふくゝとあせり立つ、

盛綱暫しと押し止め、

盛綱 おるかなりこりや狂女。いかに涙めばとてこの大海

〽乾るべきことのあるべきや。

近頃以て愚痴の至り、向後心を取直せ。亡きものゝ菩提の弔らひ

某はくゞみ得きすであらうぞ。

情の言葉に涙を拭ひ、

諸様かは存じませねど、ありがたいその言葉、したがいいかなるお慈悲お情よりも藤太夫殿に今一度逢ひたうござる。

盛綱ふと聞告め

盛綱 藤太夫とはそちが夫か。

渚 はい、私が夫の藤太夫は鹽焼ながら侍に優つた、それ故にこそ命を失ひさつしやれた。

盛綱 やれ待て女、そちが夫は武士にもまさる心ざま故命を失ひ、この藤戸の水底に。

「さてはと胸にあたゝには深くつゝみし家の子郎黨、處のものゝ聞く耳や見る眼はやみの渚はそれともいざ知らず。

渚 去年此所に源平が軍があつた時、佐々木の三郎盛綱と云ふ人、

先陣せんとて我が夫に淺瀬をならひ高名し、終に源氏の勝ちいくさ、昔が今に至るまで、馬にて海を渡すこと稀代のためしも夫故

「いかなる恩をもたぶべきに思ひの外にさはなくて、

殺して海の千尋の底に

「いふを小太郎遮つて

小太郎 あゝ音高し、こな氣狂ひめ。あれにおはすこそ當國の御主

佐々木三郎盛綱公、廉忽申すと命がないぞ。

待宵 え、そんならあなたが

時雨 佐々木の殿。

渚 なに、あれなるが三郎殿ぢやと、おゝ盛綱殿。

「親子三人縋りつき、

時雨 父様返しや。

渚 夫を返しや。

待宵 何の科で父様を。

「左手右手に縛り伏し、人目もわかず歎きしが、姉妹は涙をおさへ目と目を見合せ、

ト、隔つる家臣を掻きのけ三人は盛綱に縋つて泣く、やがて姉妹はきつとなる

待宵 女とこそは生れうづれ盛綱と聞くからは、

時雨 大名とはいはしはせぬ、親の敵、

二人覺悟しや。
「鹽柄杓に仕込みたる太刀を手々にするりと抜き一文字に飛かゝ

れば、

小太郎 狼藉者め。

渚 やれ待て子供よ。恩あるものさへ殺さるゝにそなた達が恨みを

なさは又どのやうに憂き目を見やう。其時母は何となる。鎮まつてくれ。これ子供達。

「暫しと身をまがく、

盛綱家臣を押止め

ト、郎黨等を姉妹と渚を引据へる。

盛綱郎黨を止める。

盛綱 怨むも道理悲しむもことわり。さりながら血を分けし汝等や二世を契りし女房よ。藤太夫が不便さは盛綱が身に止めたり。思

へば藤大夫こそ我爲めの正八幡菩薩、恵みによつて後代まで、名譽の高名致せしこといつの世にかは忘るべき。ゆるしてくれ、親子のもの。

へと、仰せに待宵詰め寄つて

待宵 それほど恩ある父様を、なぜ命をば取られましたぞ、ミア殿様、佐々木殿。

色を變へてぞ申しける。盛綱三人に打向ひ

盛綱 その仔細つづきに語つて聞かすべし。近ふよつて聞き候らへ

さても去年三月二十五日の夜半なりしが、

月まだ遅き浦傳ひ、處の男を一人近づけ

この海を馬にて渡さんやうやあると尋ねしに

さん候、御覽せよ月は一つ影は二つみつ潮のより来る浪のわ

かれこそ川瀬のやうに浅くして

月頭には東にあり、月の末には

西にあり、有磯海あなかしこ、人に語らせたまふなよ。めで

たく先陣ましますと、怒にこそ教へけれ。

おゝ婿し、有難し、是八幡の御告げと

伏拜みく

家の子若衆にも深くつゝみて唯二人浅みのほどをよつく見極め歸

りしが

その時それがし思ふやう。彼は下筋の筋なきもの、武士の道は

知らずして、味方は素より敵方にかくと語らんその時は我等がならひし詮もな

く
教へし道もなきことぞ
大事の合戦、勝利の爲め、不忠ながらも力なく、其まゝ討つて
捨てしぞかし。

ト、盛綱は語りつらき體。

姉妹は屹となる。これにて盛綱も氣を取直す。

早東雲も明け渡る、源平けふを限りの合戦、敵がたのみの海原
を乗あげ乗り下げ乗りおろし、さつと陸路に打あかり、宇多天
皇の末孫佐々木の三郎盛綱、藤戸の海の先陣と、天も響けと呼
ばはれば、すはや續けと三萬餘騎、さしもの難所を打渡り、敵
を滅しなびく世の

盛綱 この喜びも彼故なれば、其返報には汝等を親とも子とも思ふ

ぞかし。唯何事も前生の、定業なりと思ひあきらめ、望みもあら

ば何なりとも叶へ得せん申すがよいぞ。

聞いて渚は怨みの涙。

渚 今の親子に何の望み。唯見たいは夫。見せたいは父の顔。藤太

夫殿の亡骸を洗められたほどのあたり、それを聞かせて下さりま

せ。

盛綱 あれに見えたる浮洲の岩の少しこなたの深みに、

渚 さては噺に少しも違はず、あの岩の上に我夫を、

連れて行く波の

待宵 氷のやうなその刀で、
時雨 胸のあたりを刺通し、

刺貫かざるれば

待宵 氣も

時雨 魂も

消へくとなる所をその儘海へ押入れられて

渚 千草の底に沈めなされたか、

三人顔を見合せて、わつとばかりに泣きければ、追が勇武の盛

綱も、腸ちぎに斷つ思ひ。

盛綱 一將功成り萬骨の枯るゝためしを目のあたり見るも無惨のこ

の有様、そののみならず入部の初め、慈悲仁政を施さん爲め、訴

訟あらんものは訴へ出よ。正邪をたゞし善惡を裁き得きすと觸れ

させし、その國主たる盛綱が

心を理非の二筋に裁きかねたるな面き、せつなさ。

我が手にかかし藤太夫に今代らるものならば此命も惜しからず、

推量せよや親子のもの、

直垂の袖を顔に當て御落涙の體を見て、因果は父御一人なり、

なふ墓はしの亡き人やと悶え伏してぞ歎きしが

渚 そのお言葉を夫と共に承はるものならば、どのやうに嫁しう

ござらうぞ。國の守でないならば、親の敵と娘共にやはか討たせ

て置きませうか、たとへ望みがあればとて、敵の恩を受けること

は、水屑となられた我夫の思ひの程も恥かしい。唯御恩には藤太

夫の死骸を上げさせ弔らふて下さりませ。

盛綱 飽くまで感じ入り

夫といひ娘といひ、親といひ子といひ揃ひたる賢者かな。此

上は望みに任せ、藤太夫の死骸を上げ、千部の經を供養して追善
型の如く行ふべし、こりや小太郎。

小太郎 ハツ。

盛綱 親子のものを所の名主に預け置きよく、勞り侍らうやう、

其方確かと取圖らへ。

小太郎 畏まつてござりまする。殿には一先づ御歸城を。

盛綱 一切有情殺害三界不墮惡趣。

ト、盛綱海に向つて合掌する。

待宵 とは云へ盡きぬこの怨み

時雨 親の敵の

渚 これ。

ト、二人立かゝるを渚とめる。尙も向はふとする姉妹を小

太郎が遮る。

盛綱 ゆるさせ給へ。正八幡大菩薩。

ト、姉妹に向ひかゝる體。

ト、藤戸の浦の濱の眞砂は盡くるとも、涙はつきじ怨みはつきじ、

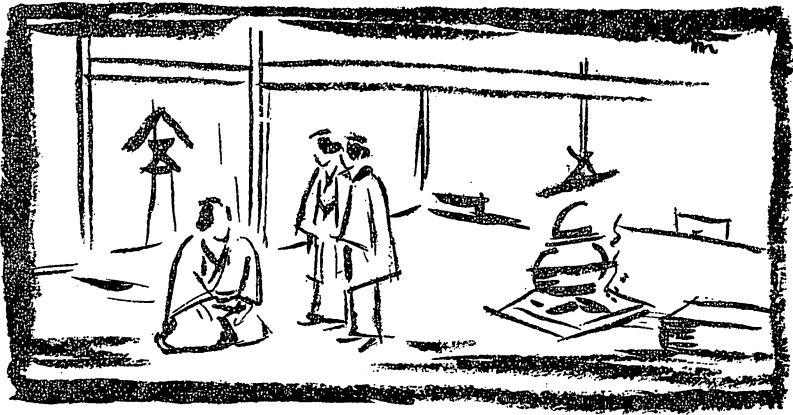
物のあはれの

ト、盛綱は家臣を随へて花道へ。渚親子は小太郎に促され

て上手へ去りかけ見返り見送る體にて幕に包まれる。後三

重、盛綱思入れあつて揚幕へ入る。

— 幕 —



十月の中座上演

錢五三人兄弟

大森痴雪作

場 割

第一場 河北湯の埋立場

第二場 錢屋の臺所

第三場 宮の腰の街路

時

嘉永年間——同年秋——五年春

處

加賀國宮の腰

人 物

- 一、錢屋五兵衛 八十余歳、隱居
- 一、喜太郎 錢屋の當主五兵衛長男
- 一、佐八郎 同次男、喜太郎順養子
- 一、要藏 五兵衛の三男

- 一、おきは 喜太郎の妻
- 一、お千賀 喜太郎の娘
- 一、次郎兵衛 錢屋の一番々頭
- 一、市兵衛 要藏附の番頭
- 一、仁三郎 手代
- 一、孫兵衛 指江村の漁師
- その他

- 隱密
- 手代
- 小頭
- 人足
- 漁師
- 女中
- 丁稚
- 町の男女等

第一場 河北湯埋立の場

舞臺の中央から下手へかけて稍廣き板張の小舎、簷近くに『河北湯新田設作場』の高札を立て、小舎の上手は錢屋の定紋をつけた幕が張られ、その上に加州の連山が見えてゐる。(後に幕を外すと河北湯の水面が見える)小舎には大きな爐を切り、自在に鍍子が懸けてある、壁には埋立場所の設計圖を掲げ、よき所に帳場を設け、机その他が置いてある。平舞臺のところゝに雜草が茂り中に色づいた櫛などが交つてゐる。

秋老けた日の午後。

帳場を預る手代工事を監督する小頭その他が昂奮した體で話してゐる。手代の一 それは小頭のいふ通り漁師達の仕業に極まつてゐる。一日かゝつて植えた粗朶が一晩のうちに自然に浮上るやうなことがあつて堪るものか。小頭 漁師達は湯が埋まつて魚がゐなくなつたら自分達の稼業がなくなると思ひ詰めてゐるのです。手代の一 本統に仕様のない馬鹿な奴等だ。

や、小旦那が歸つておゐでなすつた。

上手から要藏と手代の二、小頭の二その他数名の人足が出る。

要藏は激しく昂奮してゐる。馬鹿な奴等だ。彼奴等は河北湯埋立を何と思つてゐるのだ。お國の爲めといふことまでは分らなくつても、自分達の益になることだけは分らなければならぬ筈だ。

下手から番頭市兵衛と小頭の三等が出る。市兵衛 どうだつた。

市兵衛 あちらの方は一層ひどうございます粗朶を抜くばかりか、埋めた土まで突崩してあります。

要藏 よし、今夜から嚴重に見張をつけて、埋立場を荒しに來る奴は見つけ次第に引捕へて、弄り殺しにしてやれ。

市兵衛 それは餘りに手暴ふございます。要藏 構ふものか、お國の爲めにする埋立の際けをする奴は國賊だ。

上手から小頭の四が走つて出る。小頭の四 村の奴等が大勢指江村の土手下に集つて騒ぎ始めましたぞ。

小頭の一 押して來るらしいか。

小頭の四 さうらしい。旦那様油斷をなすつちやいけませんぞ。

要藏 持場へを嚴重に番をするやうに手分けをして早く皆にひつつける。

小頭の一 畏まりました。皆は慌しく上手下手へ馳せ去る。

要藏と市兵衛とが残る。要藏 彼奴等は一生水の上に漂ふて暮すのを仕合せだと思つてゐるのだらう。可惡さうな奴等だ。だが、憎い奴等だ。

市兵衛 然し困つたことでございますな。大きな、騒動にでもなりましたら。

要藏 なアに、内實は親爺様と俺の仕事でも表向きはお上の指圖によつてする埋立だ。漁師や百姓に何が出来来るものか。

市兵衛 兎も角も私がつくり様子を見届けて参ります。

市兵衛は上手へ走り去る。下手からお千賀と女中二人と丁稚とが出る。

千賀 伯父様。要藏 千賀さんか、よく來たな。

千賀 一度埋立場を見せて頂かうと思ひまして、あの、今向ふて人が走つたり、驕いだししてゐましたが。

要藏 なに、何でもないので。

千賀 道々あちらの埋立場を遠くから見てきましたが、今にあゝして此の潟がみんななるのでございますか。

要藏 (聲意氣に) さうとも、もう直に私の力て周圍七里の河北潟には水の代りに美しい稲の波が寄せるやうなるのだ。

千賀 まア。

女中と驚異の眼を見交す。

女中の一 小旦那様、あちらにも埋立場があるのでございますか。

要藏 あるとも、その幕の後に出ると思へる三人とも見て来るがいゝ。

女中の一 島渡拜見させていたゞきます。

三人は幕の陰へ出る。

二人は小舎へ入る。

暫らく沈黙が續く。

要藏 千賀さん、お前お父さんからか、お母さんからか何か聞きはしなかつたか。

千賀 何をてでございます。

要藏 私と千賀さんのことに就いて、聞いてゐるだらう。

千賀 えゝ、でも、そんなことは………

千賀は羞かしうに俯向く。

要藏 そんなことは……さうだ、そんなことは人間の道に外れるといつて兄貴は……あなたのお父さんは二言といはず跳ねつけた。それは……それは私も知つてゐる、だが私は、千賀さんと私が伯父姪の間柄になんぞ生れたことを怒まずにはゐられない。

千賀 伯父さん、もうそんなことは。

要藏 いひ出してしまつたのだから、序でにもう少し聞いておくれ。私は千賀さんのことを忘れるために、遊びもして見た。妾も置いて見た。その妾を出来るだけ可愛がつてやつたら、自然と千賀さんのことを忘れるだらうと思つたのだが、だが、そんなものを無理に可愛がらなければならぬ自分の身の上が腹立たしくなるばかりなのだ。

千賀 どうぞもうそんなことを。

要藏 まアお聞き、そこ一隱居が、河北潟埋立といふ大仕事を思ひつて下すつたのだ要藏しつかりやれ、世間は素より、兄弟達

にも貴様の胸を見せるのはこの時だ。出世も望みもこの仕事の出来不出来によるのだぞ。と隱居は私を勵ましてくれた。千賀さん、祖父さんは私の心をよく知つてゐて下さるのだ。あなたのお父さんは總領で錢五の家を相續し、中の兄さんは順養子で大兄さんが隱居をすれば三代の錢五になる。残る三男の私はどうでも別に家を興さなければならぬ。それには持つて來いのこの大仕事だが、私の本心は出世よりも何よりもつと／＼深い望みをこの仕事の中に籠めてゐる。千賀さん、覚えてゐておくれ。夜も晝もなく一心不乱に働いてゐる私の心の底には、どんな思ひが隠れてゐるかといふことを……。

千賀 私はどうしたらいいのでございませう何だか悲しい怖ろしい氣がします。

要藏 千賀さん。

手を取らうとしてわづかにやむ。

上手から市兵衛と小頭二、三、その他が囁きながら出る。

同時に幕の陰からお千賀の女中二人と丁稚が出る。

市兵衛 旦那様。

要藏 どうした。

市兵衛 大勢寄せて来ます。あなたが爰にゐらしては事が面倒で、萬一お怪我があつてはなりませんから、早くお嬢様と御一緒に新宅へお歸り下さいまし。

要藏 大丈夫だ。むかふが腕づくで来るなら、こつちも腕づくで追拂ふまでだが、なアに唯騒ぐだけで漁師達に何が出来るものか。千賀さん、男達に案内をさせるから、騒ぎの鎮まるまで下の番舎へ行つて待つてゐておくれ。決して案じることなどはありはしないから。おい、お前供をしる。(手代の一に命じる)

千賀 では伯父様、氣をつけて下さいませうに。

お千賀と女中と丁稚は手代の一と人足に譲られて下手へ去る。

要藏は番舎から脇差をとつて指す。

他もそれ／＼兇器をとる。

上手から指江村の漁師孫兵衛を先きに大勢の漁師が手に／＼竹鎗を持つて出る。

漁民は口々に錢屋を罵る。

同時に下手から小頭人足等が出て、双方身構へる。

孫兵衛 漁場を潰す錢五は俺達の敵だ。敵の片割の彼奴等から先へ打殺せ。

忽ち亂闘が始まる。

揚幕から喜太郎と佐八郎が出て双方の間に割つて入り、喜太郎は佐八郎の手から五百兩の金を取つて漁民の足許に撒きちらす。

漁民等は驚いて頓に氣勢が押ける。

喜太郎 爰に五百兩ある、皆取つてくれ。

市兵衛 大旦那、亂暴者にそんな大金を……

喜太郎 馬鹿をいふな、竹槍一本には殺されるものと殺すものと二つの命が籠つてゐる。その命が惜しいから貰ふのだ。村の衆、人の命と自分の命とを考へて思切りよくその竹槍を私に賣つてくれ。

佐八郎 皆が騒ぐのも儲けの有無がもてではないか。儲けづくなら金で話がつく。命を捨て合つては元も子もなくなつてしまうで

はないか。

孫兵衛 竹槍は賣りもしやう。だが俺達の漁場の始末はどうしてくれるのだ。鵜が埋つて魚がゐなくなれば、俺達の稼業はあがつてしまふのだ。

皆、口々に喚く。

喜太郎 待て。口々に騒がずと、一應引取つて誰なりと總代を出すがい。穩かに話しあへば此方の手違ひも其方の思違ひも直ぐとけるのだ。

佐八郎 錢五は村の衆の爲めをこそ思へ、決して迷惑をかけやう氣遣ひはないのだ。決して思ひ違ひをしてはならない。

喜太郎 さ、その金を持つて村へ引取り、話の出来る人を總代にして私の所へ遣はしなさい。

孫兵衛 皆、錢五の一家があゝいふから、一應總代を拵へて掛合ふとしやう。乗るか反るかはその上のことだ。なア異存はなからう。萬事俺の肚にある。俺に任せてくれ。

漁民等は各々に、何か云ひ立てる。

やがて納得した體で鎮まる。

では兎も角もこの金は指江村の孫兵衛が預

つて踊る。

半纏を脱いで、それに金を拾ひ収める。

下手から三四人の人足が繩をかけた旅商人姿の幕府の穩密某を引立て、出る。

要藏 その男はどうしたのだ。

人足の一 此方の騒ぎの隙に、埋立場の見取圖を書いてゐた怪しい奴です。やい、貴様は何のためにあんなものを書いてゐたのだ

某 決して怪しいものぢやございせん。私は岡山の旅商人で、珍らしい理立の様子を書きとめて國への土産話にしやうと思ひましたので。

要藏 嘘をつけ。その言葉は岡山訛とは違ふ貴様は穩密だな。

穩密といふ言葉に皆驚く。

孫兵衛 此方に係り合ひのないことだ。皆引揚げやう。おい、後の方から退いたく。

皆上手へ去る。

それに紛れて某は逃げやうとして引据へらる。

要藏 いや、怪しい奴だ。痛い目を見せて

白狀させろ。

人足等が打たうとすると、某は態度を一變する。

某 待て、無法を働いたら後悔するぞ。いかにも岡山の商人と云つたのは偽りで、俺は幕府の役人だ。内密の御用があつて北國のある國へ行く途次。

喜太郎 黙れ。幕府の役人などといふ方が眞ッ赤な偽り。これ、この男を本宅の藏へ打込んで嚴重に張番をつけておけ。

人足の一 よろしうございます。さ、歩け。三四人して穩密を引立て、揚幕へ去る。

佐八郎 佐八郎は四邊を見廻し市兵衛、その幕を皆脱がさしてくれ。

要藏 兄さん、なぜ幕を脱がすのです。麗々しく錢屋の幕などを張廻して派

手の上にも派手にするお前の遣り口が一層村の者達の氣持を悪くするのだ。

要藏 村の奴等にまで遠慮してこの大仕事が出来ものですか。

喜太郎 いや村ばかりぢやない。すべて仕事といふものは、表面を地味にして實益の上

ることを第一としなければならぬ。佐八郎のいふのが尤もだ。幕を外してしまへ。

市兵衛 へえ。

人足等に残らず幕を外させる。向ふに廣々とした河北潟の水面が見える。

佐八郎と市兵衛は人足等を持場へに去らせる。

喜太郎はデツと水面を眺める。水鳥が訝々と啼く。

喜太郎 木枯の果てはありけり海の音……定水の匂が思ひ出される眺めだ。俳諧の寂は爰にある。

要藏 (ちり／＼した心持で) 大兄さんは風流人だから、白い水の色などがいゝでせうが私にはこの河北潟が何千石の黄金色の稻の波に變る方がどんなに、氣持が知れませ

ん。佐八郎 何千石の米になるまでに、注ぎ込む金が多すぎと思ふのだ。都度／＼のお上の運上と理立の莫大な諸人費、それは皆本家から出るのだぞ。

要藏 私は自分の道樂にやつてゐるのぢやあ

りません。隠居の指圖によつてやつてゐるのです。お國の利益を考へてやつてゐるのです。元々親爺様が腕一本で築上げた身代を、親爺さまの了簡に従つて費ふのだから、誰一人苦情のいひ手はない苦です。

佐八郎 苦情をいふのではない。だが、その親爺様の御了簡が何所にあると思ふ。唯、お前が可愛いからだ。

要藏 それはそうかも知れない。大兄さんは本家、中の兄さんは其順養子、残る私の出世の爲めに親爺様が仕事を捨てて下さるのは當然です。

佐八郎 そのお慈悲を知つてゐるなら、猶更大事の上にも大事をとつて、事が成就するやうに心がけねばならぬ筈だ。

要藏 心がけてゐますとも。だが、愚味な漁師の騒ぐ位は大い仕事にはありうちのことで驚くには當りません。

喜太郎 有りうちだと云つて捨てゝ置いたら仕舞ひにはどうなと思ふ。要藏錢五の商賣は一筋や二筋ではないぞ。要藏 その位のこととは知つてゐます。兄さんの怖がるのは、加賀様に見て見ぬふりをし

てゐられる海の上の商賣の事でせう。

佐八郎 これ、何をいふのだ。(四邊を見廻す)

喜太郎 今の怪しい男も穩密と見た故、わざとさうでないにして藏へ押籠めさせたが、この始末一ツでもどれだけ心をつかはねばならぬか知れぬのだぞ。

要藏 兄さん達は、私が錢五の家に疵でもつけるやうに思つてゐるんですか。御心配御無用、要藏もそんな馬鹿ぢやない。まア見てゐて下され。こんな埋立てをやる位はほんの手初めて、今に海の上にも乗出して親爺様に負けぬ大きな仕事もやつて見せます。聞けば外國の黒船が日本にやつて来たり、オロシヤの船が松前を荒したりするさうだ。船持の働く時はこれからですよ。

佐八郎 要藏、お前はそんな大膽なことを。兄さん、親爺様は要藏が可愛い餘りに、若い者へ怖ろしい御恵まで吹込んでおしまひなすつたのです。今度のこの仕事も初めに親爺様を邪が非でも止めなかつたのが残念です。

喜太郎 今更悔んでも仕方がない。乗出した

船は行く處まで行かせなければ。

佐八郎 その途中の波や風が怖ろしうございます。

要藏 心配は御無用だといつてゐるんです。氣の小さい人達に何が分るものか。

佐八郎 おのれ、兄に向つて……

双方意氣込む。

喜太郎が止める。

下手から五兵衛が手代の仁三郎を隨へて出る。

要藏 おゝ、親爺様。どこへおいでなさるのです。

五兵衛 埋立が存外排取らぬと聞いたので見廻りに來たが、漁師達が何かごてゝいふさうだな。

要藏 はい。

喜太郎 騒ぎの處へ來合はせましたので、漸う取鎮めて穩やかな話にする手筈にして置きました。

五兵衛 御苦勞。細かい稼業の漁師達が案じるのも無理はない。いつかいづれは何かいつて來るだらうと私は心待ちにしてゐたのだ。河北湯が新田になつて米が獲れる

までの喰繋ぎ料をやることにすればいゝのだらう。喜太郎、佐八郎、お前達二人で然るべく捌いてやつてくれ。

喜太郎 承知しました。いづれ向ふから總代が來ませうから。

五兵衛 要藏、むかふの埋立場を見たが、あんな手ぬるいことでは駄目だぞ。第一金のかけやうが足らぬ。雑用にも無駄のないやう、精々儉約をしなければならぬが、肝腎の所に金を吝むやうでは埒があかぬ。

喜太郎と佐八郎は顔を見合す。要藏は満足の體。

要藏 それは私もよく承知してゐるのですが兄さん達の納得しない金は出所がないのですから。

五兵衛 ハ、……何をいふのだ。筋の立つた金を出し吝むやうな錢五の身代ではない。あゝいふ風の當りの強いところは一氣に仕上げてしまはぬと直ぐ波に崩されてしまふ入費を怖がつてどうなるのだ。うんとかけて一息にやれ。

要藏 承知しました。金をいとはずに思ひ切つてやります。

佐八郎 親爺様。一體あの埋立はいつまでに出來上るお見込みなのでございます。

五兵衛 そんなことが分るものか。末々お國の爲めになるし、錢屋のためにもなる仕事と見込んだからかゝつたので、何時までに埋めてしまはなければ新田が出來ぬといふのではない。埋めれば埋めたげづゝ新田になつて行くのだ。

佐八郎 今の所では費用と出來る新田との釣合が取れません。

五兵衛 初めから釣合が取れる仕事なら貧乏人でもやる。案じるな。錢屋にはそれ位の埋合せをする商賣が外にある。その積りで要る金はさッさと出してやつてくれ。よい。か。それからの、私の方にもちと金の入用が出來て來た。たんとは要らぬ二萬兩ほど隠居へ届けてくれ。

喜太郎 二萬兩……承知致しました。

佐八郎 帳合の都合がありますが、それは何のお入用で。

五兵衛 それか、それはやつぱり埋立に就てだが、まア差當り隠居分として置いてくれ精しいことは後でいふ。

五兵衛はそつと要藏を見る、下手から手代の一が附添ふてお千賀の一行出る。

千賀 お祖父様。

五兵衛 (さも可愛さうに) おゝお千賀。お前も要藏の埋立場を見に來てゐたのか。

千賀 祖父様、先刻は怖いことでどうしやうかと思ひました。

五兵衛 さうだつたか。はゝゝゝ私はこれからあつちを見て歸るお前も一緒に來るがいゝ。

千賀 えゝ、お供を致します。下手から昇夫か駕を擔いで出る。

仁三郎 御隠居様、駕が参りました。

五兵衛 八十は越してもまだこれ位の所を見廻るのに駕には及ばない。お千賀、お前乗るか、いやか。要藏、この埋立が手際よく成就せぬとお前の望みも水の泡になるぞ。油斷するな。

要藏 はい。屹と見事に仕上げて御覽に入れ

ます。

五兵衛 よしゝゝ、行かう。喜太郎、佐八郎、金は頼んだぞ。

五兵衛、仁三郎、お千賀、女中、丁稚等上手へ来る。

喜太郎 佐八郎、親爺様のお心がよめたか。

佐八郎 はい、もう此上何にもいいません。上手から孫兵衛が出る。

孫兵衛 約束通り私が村の總代として来ました。

喜太郎 こんな所で相談もなるまい。氣の毒ながら私の宅まで来て貰はう。

孫兵衛 村のための相談なら何處へでも行きます。

喜太郎 佐八郎、歸らう。

佐八郎 私は少し考へたことがありますから後に残つてよく要藏に話してやらうと思ひます。

喜太郎 さうか、親爺様や皆の心盡しを取違へぬやうによく云聽かしてやつてくれ。では行きませう。

喜太郎 喜太郎と孫兵衛は揚幕へ去る。

佐八郎 要藏。市兵衛も爰へ来るがいゝ。今となつては私はもう何にも小言などはいはない。此上は埋立が一日も早く成就して、親爺様のお心をやすめ、お前の出世が出来るやうに一家一門が骨を折るより外はない

市兵衛 仰しやる通り、爰までやり出した仕事が成就しないでは錢五のお名にかゝはる次第でございます。

佐八郎 そこでどうしたら仕事が着々と拂取るか、けふまで莫大な入費の割に仕事の進まないのは漁師達の隙けがある爲めばかりとは思へないが。

要藏 兄さん、あなたが本統にその氣になつて下さるなら私も本統のことをいひます。西が吹くと波が荒いの埋立に使ふこの邊の土は極くやわらかいので直にさらはれてしまふには困り切つてゐるのです。

佐八郎 ふう、土に石灰を混ぜたらどうだ。

要藏 石灰を。

佐八郎 先年親爺様が買込まれた石灰が田の肥料に使ふことが御法度になつた爲め幾戸前も持腐れになつてゐる。あれを土に混ぜたらどうだ。

市兵衛 成程至極の思ひつきでございます。

石灰を混ぜれば屹と土が固まります。

要藏はちつと考へてゐる。

節約になるか知れない、なアさうではないか。

市兵衛 さうでございますとも、是非藏を開けて戴きませう。小旦那様、左様ぢやございませんか。

要藏 さうだ。さうだ。兄さん藏の鍵を此方へ渡して下さいまし。

佐八郎 よし、いつでも渡してやる。

要藏 市兵衛、善は急げだ。今から直に兄さんと一緒に本家へ行つて鍵を買つて来てくれ。

市兵衛 宜しうございます。

要藏 兄さん、有難ふ。あなたのお蔭で面倒なしに埋立を仕了らせる考へがつかしました。

佐八郎 それは何よりだ。私もどんなに嬉しか知れぬ。では市兵衛直に行かう。

市兵衛 お供致します。

二人は揚幕へ去る。

要藏は小舎を出て湯を眺める。

上手からお千賀が出る。

千賀 伯父様。

要藏 千賀さん、一人でどうしたのだ。千賀 祖父様が一人で رفتて伯父様を招んで

来いとい仰しやつたのです。

要蔵 私を千賀さんに。

千賀 先刻の二萬兩のことで話があるから直ぐおいでなさるやうにと。

要蔵 さうか。ではあの金も私に費はす爲めだつたのか。

千賀 祖父様は何よりも一番埋立のことを心配しておいでなさるので、私でも先刻のやうな騒ぎがありますと。

要蔵 いやもうその心配には及ばない。千賀さんも安心しておくれ。私はこの河北濁の魚を一尾のこらず殺してしまつて村々の紛紜の種を絶してやるのだ。

千賀 どうなさるのでございます。

要蔵 あの石灰蔵の中には異國渡りのアイゴ油が入れてあることを知つてゐる。あれを流し込めば濁の魚はみんな死ぬ。

千賀 まあ……

要蔵 魚がゐなくさへなれば漁師の争ひもあるのか。

千賀 でもそんなことをしては……。

要蔵 なアに、なアに、お國の爲めだ。何千石の新田を作る大仕事の爲めだ。

千賀 伯父様。

要蔵 (千賀のゐるのも忘れたやうに) 待つてゐろ。今に貴様達の泣面を見物してやる。濁を見やつて得意さうに笑う。

—— 暗轉 ——

第二場 錢屋の臺所

舞臺は一面の板の間、中央に北陸特有の大きな爐を切り、天井から吊るした大鍵を架け渡した太い竹に幾個の小鍵が下げられ、さしくべられた薪の焔の上に巨大な罐子がたぎつて居る。この上手には大きな長方形の籠と大黒柱、正面は障子の出入と板戸の物入、更に上手の壁に高窓下手側は屋形井戸と調理場その陰に脊戸がある體、第一場から數月後早春の雪降る日。

番頭次郎兵衛と漁師の孫兵衛が落つかね體で下手から出て爐の傍に座る

次郎兵衛 で、お前さんはお城下で確に調べて来なすつたのだな。

孫兵衛 調べた所ぢやない、現に私の知合ひの家にもさういふ病人が澤山出てゐるんです。

次郎兵衛 ふう、河北濁の魚が腹を返して浮上る。それを喰べたものは吐いたり下痢したりするとは思ふなことだ。

孫兵衛 何しろ魚は手觸みに獲れるのだから金澤のお城下から近在へも、安い値でどん／＼賣りに行けば所の者も惣菜にして喰うといふ譯だから忽ち四方八方病人だらけさ中には死んだものも少くないのだから村方ばかりか金澤までがやかましく騒ぎ立てるのも無理はありません。

次郎兵衛 だが、それが埋立の爲めなぞとそんな道理があらう筈はない。

孫兵衛 所が誰いふとなく錢屋が濁へ毒を入れたのだと……

次郎兵衛 え、何の爲めに……

孫兵衛 濁に魚がゐなくなりや漁師仲間がいざこざの種もなくなる。さういふ考へでやつたのだと、今ぢやお城下でも大評判で、皆錢屋を敵のやうに怨んでゐます。さうなると埋立にかゝり合ひのない悪い噂まで云立てゝやれ錢五は加賀様百萬石のお臺所を勝手に切盛してゐる。お預りの船はたつた二艘だのに何百艘といふ持船には皆加賀様

の船印を立て、材木や米の買占をやる。
次郎兵衛 孫兵衛どん、あゝ恐ろしい噂だ。
困った取沙汰だ。

孫兵衛 この様子ではどんな騒ぎになるかも知れない。私もあゝいふ騒ぎが縁で内々錢屋さんの味方になつて我村初めよそ村へも仲裁役をして來たが、今更ぬきさしもなら

ず困り切つてゐるので。
正面から女中が出る。
女中 孫兵衛さん、どうぞ奥へ。
孫兵衛 さうですか。では番頭さん。
次郎兵衛 今の噂を精しく旦那様へお話をし
て下さい。

孫兵衛 え、え、する所ぢやありません。
孫兵衛は女中に導かれて奥へ去る。
上手から佐八郎が出る。

次郎兵衛 若旦那、湯の魚の一件をお聞にな
りましたか。
佐八郎 聞いた、だが湯へ毒を入れるなどと
そんなことのある筈はない。埋立を固め
る爲めに漬藏の石灰は出してやつたが、其
灰汁ぐらゐで魚が死ぬとも思へないではな
いか。

次郎兵衛 さうでございますとも他國へ參れ
ば皆石灰を農作に使つてゐる位でございま
す。

佐八郎 そんなことから錢屋々と目指され
出すと、錢屋の土臺にいつどんな龜裂が這
入つて來ないともいへぬ。私はそれが何よ
り恐ろしいのだ。

次郎兵衛 加賀様は年來のお間柄で異國對手
の海の上に商賣まで見て見ぬふりで通つて
ゐますが、ひよつと江戸から手でも廻りま
す。

佐八郎 それにつけても埋立場へ引捕へたあ
の怪しい男を僅かの油斷から逃してしまつ
たのが何より心懸りだ。

次郎兵衛 藏を破つて逃げた跡を調べました
ら、在荷を残らず掻き搜して居りました。
然しあの藏は雜藏で心配な品は一つ這入
つて居りませんから大丈夫でございます
が彼はやつぱり江戸の隠密に相違ございま
せん。

佐八郎 親爺様は十七八の時分率公してゐら
れた木谷康左衛門さんは加賀で一二十の富
豪だつたが、天明の饑飢に米を買占めたこ

とが隠密に知れてとう／＼磔刑になつたと
聞いてゐる。

次郎兵衛 え、若旦那、縁起でもないことを
仰有いますな。鶴龜。

数名の手代が慌しく下手から出る
手代の一 大變でございます、お城下の者や
村の者が大勢要藏様の新宅へ押かけたさう
でございます。

佐八郎 え、要藏の所へ。

手代の二 皆魚を喰べて死んだり病人が出來
たりした家のものださうでございます。

奥から喜太郎と孫兵衛が出る。

喜太郎 皆早々駈つけて要藏に怪我のないや
うにしてくれ。次郎兵衛、若いものばかり
では不安心だ。お前行つて裁いてくれ。

次郎兵衛 宜しうございます。

喜太郎 待て、隠居の方も心配だ。半分は親
爺様の方へ行け。

次郎兵衛 畏まりました。

次郎兵衛と手代等は下手へ去る。
孫兵衛 かうして錢屋の臺所にある所を見附
からうものなら事だ。旦那様御免蒙ります。
孫兵衛は逃げるやうに下手へ去る。

喜太郎 日本一の錢五が私の代になつてこんな騒動を惹き起して親爺様に申譯がない。
佐八郎 兄さんのせいぢやありません。皆要藏の奴が悪いのです。

喜太郎 私は親爺様の大き過ぎるほど大きいあの氣性を知つてゐるから自分は風流の道に隠れて商賣嫌ひと見せかけ、成るべく危い商賣から手を引かうとしたが、私の力では勝氣な親爺様をどうすることも出来ず、とう／＼こんな騒ぎになつたのが返す／＼も残念だ。

佐八郎 親爺様はあんまり要藏を可愛がり過ぎたのです。

喜太郎 可愛がられるのも無理はない。要藏は親爺様そつくりの氣性に生れついてゐるだが、まだ若い、大仕事をさせるには早過ぎた。

髪も衣紋も亂れ雪だらけになつた要藏が慌しく下手から出る。

佐八郎 おゝ要藏。

喜太郎 怪我はなかつたか。

要藏 怪我なんぞ、大丈夫です。

佐八郎 今店のものを駈つけさせた所だ。

要藏 兄さん、世の中はなぜこんな馬鹿者の寄せ集りでせう。國益を思つて皆の爲めにする仕事の邪魔をしたり、魚にあたつたのまで私のせいにして亂暴をする。魚を殺さうが殺すまいが、死んだ魚を賣る奴も賣る奴なら買ふ奴も買ふ奴だ。

喜太郎 要藏、では濁の魚はお前が殺したのか。

要藏 え。

喜太郎 殺したのか、どうして殺した。何を入れて殺した。

要藏 石灰藏にあつた、アイゴ油を入れてやつたんです。

佐八郎 え、アイゴ油を、私の許しも受けずに持出したのか。

喜太郎は要藏を引据へて激しく打つ佐八郎は驚いて止める。

喜太郎 事もあらうに、アイゴ油を流し込むとは、廣い濁の魚さへ殺すほどのアイゴ油なら人間にも害をするといふ事がわからないのか。大馬鹿者とは貴様のことだ。こんなことで錢屋の家名に疵がつかうとは不孝者め。(突飛ばす)

要藏 仕事の手違ひや思惑外れは誰にもある大馬鹿者は世間の奴等だ。なアに、出来たことは出来たことだ。隠居と相談して立派に埒を明けて見せる。兄さん達の厄介になるものか。

喜太郎 これだけのことを仕出來して置きながら、おのれ。

又打たうとする時、妻のおきはとお千賀が奥から出て止める。

きは あなた、そんな手荒なことを。

千賀 どうぞ願ひです。伯父様を免してあげて、千賀が一生のお頼みでございます。

喜太郎 お千賀、お前はそんなに要藏を。縛る娘を引寄せてちつと見る。その眼から涙がこぼれる。

要藏 お前のお父さんは私を、獸のやうに憎んでゐるのだ。この心のうちを何も彼も知つてゐてくれるものは千賀さんと親爺様だけだ。隠居へ行く。こんな所に居られるものか。(行きかける)

千賀 伯父様。

要藏 伯父！ そんな嫌な呼び方をしてくれらるな、要藏といつてくれ、千賀さん。

千賀は聲を擧げて泣伏す。
要藏は下手へ走り去る。

佐八郎 待て要藏、兄さん、捨てゝは措かれ
ませんから。

喜太郎 行つてやつてくれ。

佐八郎は下手へ去る。

きは 世間といふものさへなかつたら……

要藏さんもお千賀も可憐さうでございます

泣く、喜太郎はお千賀を伴ふて奥へ
去れと命じる。

おきはお千賀を勞りながら去る。

次郎兵衛喘ぎながら下手から出る。

喜太郎 隠居は無事か。

次郎兵衛 ヘエ、騒ぐなと仰しやつて、お佛

壇に向つて靜かにお勤めをしておいでにな
ります、もし旦那様、改作奉行の安田様が
今朝卒かにお役御免になりましたさうでご
ざいます。

喜太郎 え、安田様がお役御免に。

次郎兵衛 今度の埋立は御隠居様と安田様と
御相談の上で出来ました仕事でございます
が、その安田様が卒のお役御免とは御當家
にとつて容易ならぬことゝはお思ひになり

ませんか、私はそれを聞くなり宙を飛ぶ氣
でお報らせに戻つて参りました。

喜太郎はちつと考へる。

決心の體で、

喜太郎 次郎兵衛、奥藏へ入れてある、海上

取引の諸帳面を一つ残らず焼くか捨てるか

たつた今お前の手で始末を下され。

次郎兵衛 旦那様、萬一の時のお覺悟をなさ

るのでございますか。

喜太郎 さ、早く。

次郎兵衛 畏まりました。

これも決心の體で上手へ去る。

喜太郎は又洗思する。

やがて覺悟がついた體で立かける、

下手から佐八郎が出る。

佐八郎 兄さん、私は今から金澤まで行つて

参ります。

喜太郎は佐八郎を見詰める。

喜太郎 奉行所へ名乗つて出るつもりか。

佐八郎 兄さん、家と手を繋いだ改作奉行の

安田様もお役御免になりましたぞ。

喜太郎 それも今聞いた、然し部屋住のお前
では駄目だ私が行く。

佐八郎 飛んでもないことを。兄さんが行か

れたら本家はどうなります。

喜太郎 本家だから私が行く。私が出ねば親

爺様や要藏を助けることは難かしい。商賈

は豫々お前任せにしてあるのだから、お前

さへ居れば錢五の店はどうともなる。

佐八郎 返すくも私は要藏の奴が憎い。彼

奴……彼奴一人の爲めに。

喜太郎 要藏を憎むな。親爺様を憎むと同じ

ことになる。與つたものは滅びる。御佛の

教への通りだ。運だと思へ。

佐八郎 いかに通ても、教への通りでも。

泣く、喜八郎立上る。

兄さん。せめて嫁さんやお千賀に。

喜太郎 未練の種だ。後でよく云聞かせてや

つてくれ。

二人は涙の顔を反向ける。

下手から手代仁三郎が走つて出る

仁三郎 旦那様。大變でございます隠宅へお

奉行所から。

佐八郎 え、捕方が来たか。

喜太郎 親爺様はく。

仁三郎 繩を打つて番屋へ引くと申して居り

ます。早くおいで下さいまし。

喜太郎 しまふた。遅れたか。

佐八郎 兄さん。

喜太郎 弟。

二人は下手へ馳せ去る、仁三郎も續く。

—— 暗轉 ——

第三場 宮の腰の街路

冬から降り重なつた雪に埋もれた街の十字路、下手に宮の腰の港の一部が見え、上手に角家の一部と土蔵が丈餘の雪に包まれてゐる。雪は尙ちらちらと降つてゐる、第二場と同じ日、夕暮時。

土手から錢屋五兵衛を乗せた駕が數名の組子役人等に護られて揚幕へ去る。

雪簑を被つた男女が出てその護送を眺め、大部分は駕の後に尾いて去るやがて上手から喜太郎と佐八郎が繩にかゝり役人組子等に引立てられて出る、その後、次郎兵衛が隨ふ。

喜太郎 次郎兵衛。

次郎兵衛 へい。

喜太郎 親爺様もこの雪の中を歩いておいでなすつたのか。

次郎兵衛 御隠居様はお上のお慈悲で駕でおいでになりました。

喜太郎 さうか。跡の萬事はお前に頼んで置くぞ。

次郎兵衛 はい。

喜太郎 佐八郎。私はお前を残して置くことの出来なんだのが何より残念だ。

佐八郎 いゝえ兄さん。かうなつたらなまじ残るより、一緒に行く方が嬉しうゐます。二人は歩き出す。

やがて佐八郎は立止まる。

佐八郎 次郎兵衛。

次郎兵衛 御用でございますか。

佐八郎 今朝南部の店から廻つて來た、百三十五兩と銀で八百五十匁の帳合がまだ、つた、直ぐ入帳にあげてくれ。

次郎兵衛 あゝもし、御心配の中にそんな些細なことなぞどうぞ後々の事はお心置きな。

佐八郎 いや、商人が狼狽て帳合ひを忘れた

と云はれては日本一の錢五の家を預る私の耻になる。頼んだぞへ。

喜太郎 その心懸けのお前があつたればこそ私はけふまで風流を楽しむことが出來たのだつた。佐八郎改めて禮をいふぞ。

上手からお千賀が止める仁三郎を振り切りながら出て役人に纏る。

千賀 お役人様。どうぞ、お父様の代りに私をお願ひでございます。

組子は引のける。おきはが上手から出て雪の上に泣伏すお千賀を抱起す。

きは それが出来る位なら、お前よりもお母さんの命でも捨てます。旦那様、佐八郎さん、御無事の……お歸りを（咽び泣く）。上手から要藏が同じく組子等に引立てられて出る。

要藏 おゝ、兄さん達も、餘り無慈悲だ。いや無法だ。

喜太郎 要藏、お前一人の罪のやうにいつたのは私の誤りだつた。決してお前の罪ぢやない。私の罪だ。錢屋本家の罪だ。ゆるしてくれ。

要藏 何が罪です。私達は商賈をしたのだ。國益を思つて埋立をしたわけだ。大きい仕事の前に十人や二十人の命が何です。要藏は過つて人を殺した。人を殺したとしても別に私達を殺して身代までも捲上げやうとする人達程無法ぢやない……。

役人 こら、黙れ。

要藏 要藏は激しく昂奮してゐる。何を。天下の錢五だぞ。

佐八郎 これ要藏、商人の心を忘れてどうする命のある限り損益を思へ。それが商人の心掛けだぞ。

要藏 誰がこんな木葉役人に。

組子 組子は要藏を蹴仆す。

お千賀はかばうやうに縋る。

要藏 千賀さん。

千賀 要藏様。

要藏 お前は私を要藏と呼んでくれ。私を要藏と。私を要藏と。

千賀 お父様、ゆるして下さいまし。

喜太郎に縋つて泣く。

喜太郎は悲しみに堪へぬ體。

喜太郎 お役人様。親どもに追付たうござい

ます。早うお引立て下さいまし。

佐八郎は縛られたまゝで、お千賀のける。

おきはは、お千賀を抱すくめる。

喜太郎、佐八郎は神妙に、要藏は昂奮したまゝ引かれて揚幕へ去る。雪がしきりに降る。

幕

料身美のラトパオレク
たつ造でルイオムーパ
鮎 竹松

編輯後記

松本泰三

九月號は毎日を出でずして賣切れて了つた。表紙のよかつた事と芝居シーズンに入つた事が第一の原因であるやうに思はれる。時々或る人からこんな事を聞かされる。演藝雑誌の生命はその表紙にあると、また或る人は口繪寫眞だといふ。口繪寫眞にしろ、表紙にしろ、雑誌そのものの生命の一端を勤めるものであるから、これが賣行きを支配するといふも、決して誤つた考へだとは云へない。その説から行くと、九月號は表紙が立派で、寫眞の編輯もよかつたといふ事になる、然しそれが雑誌の肺部を承るものだと云へない。全生命は矢張記事にあると思ふ。それとも時代人から離れての内容はゼロである。編輯方法も時代とタツチして行かねばならぬ。舊慣を破る——云ふは易く行ふは難き事で——歌舞伎だからといつて別に昔の事を見習はねばならぬ事はない、と云つて別に新しい事を盲目的に求める必要もない。その間の宜しきを得て、新時代の好劇家と手をつないで行かうとする編輯者の苦心も買つて欲しい。去年の今頃の雑誌と比較對照してもらふと、如何に『道頓堀』の内容が變つて來てゐるかを視はれる。歌舞伎の雑誌だからといつて時代から離れたものにはしたくないと努力してゐる。こんな勝手な熱は別として、とにかく九月號が賣切れたとは喜ばしい。

中座は全關西大名題連揃ひの歌舞伎陣で、鴈治郎

が約半年ぶりの出演に、近松の時代物と世話物の二つを上場してゐる。『佐々木太閤』は初めて舞臺にのぼしたものの、『心中宵庚申』は既に定評のあるものと大變な人氣、鴈治郎はすっかり近松役者になりすましてゐる。

我が演劇史に特筆される『大鑑』に就て、まづその脚本の掲載、次いで木谷氏から演出上の玉稿を、京極氏からその感想を、高安氏から盛綱研究、高原氏から藤戸に就いての記事等々を得た。

『心中宵庚申』では久しぶりで尾崎氏から玉稿が頂けて喜んでゐる。高谷氏からは『宵庚申の人々』と題する玉稿を頂いた。

浪花座は第一劇場が居坐り第三回公演を出した。旗上げ以來滿員續き一日として不入り日はなかつたといふ記録的な公演である。前月は『マツ』が大變好評だつたが十月は『日清談判』がうけてゐるらしい。例によつて野淵氏から『日清談判演出手記』として演出上の感想を頂いた。森氏からは『第一劇場私語』で記事を願つた。

この他、東京の永田氏から『東西舞踊の感想』で舞踊に關する玉稿を頂いた、同じく東京の菅原寛氏から『だんまり私見』の玉稿を頂戴してゐるが、五十頁からなる研究物で、次號から繼續的に掲載して行きたいと思つてゐる。

顔見世號もあと一月となつた、南座の開場や、本誌創刊五週年記念とが一緒になるので、なにか有意義のものにしたい。頁數も二百頁位のものにしたいと思つてゐる。

昭和四年十月一日發行

月刊『道頓堀』第四年第三十七輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。

◆ 註文の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市中區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

定價 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和四年九月三十日印刷
昭和四年十月一日發行

大阪市中區左衛門町八番地

編輯者 松竹土地建物興業株式會社

發行者 島江 鏡也

大阪市中區成城町一丁目

印刷者 松本 米藏

大阪市中區成城町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市中區左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

發行所 道頓堀編輯部

電話 (一三四〇番)
(六六六五番)

一南 温泉料理

御宴會には

百疊敷大廣間

御芝居の

お歸りには

皆様お揃ひにて情趣
深いおつな温泉料理

文樂座

南一食堂

洋食部
和食部

大宴會場

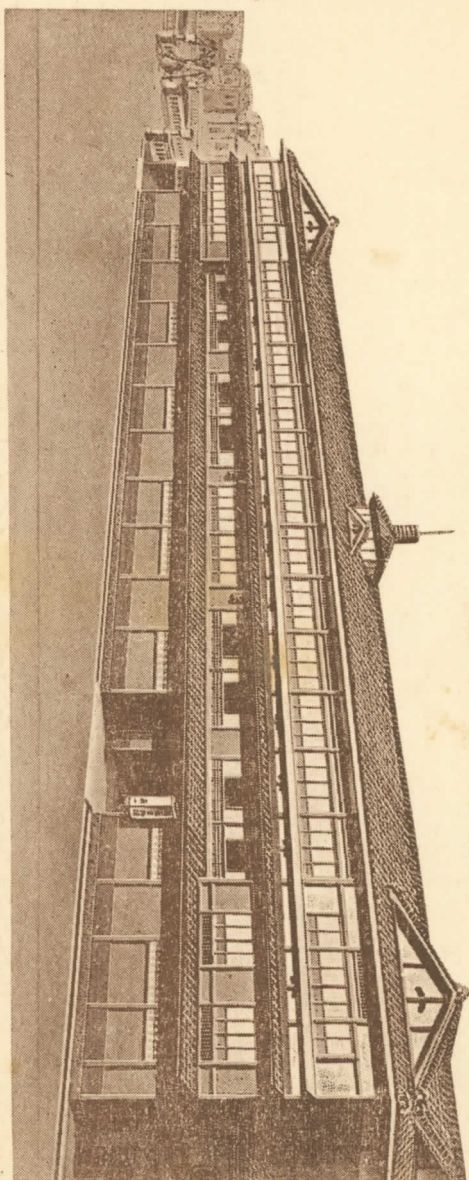
御婚禮

御披露宴

四ツ橋

山 南一温泉料理

電話南
(五七七)
二一〇
一 番



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年九月三十日印刷
昭和四年十月一日發行

道頓堀第四年十月號 第三十七輯

金參拾錢 (郵錢五厘稅)

若く明るの顔になる

シート
白粉

店商平賛尾平京東